

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究							
【年度計画】								
科学研究費補助金・学術研究助成基金助成金等外部資金を活用した調査研究								
担当部課	東京国立博物館学芸研究部 京都国立博物館学芸部 奈良国立博物館学芸部 九州国立博物館学芸部			事業責任者	部長 救仁郷秀明 部長 尾野善裕 部長 内藤栄 部長 小泉恵英			
【実績・成果】 外部資金を活用した調査研究を下記件数実施した。 (東京国立博物館) ・科学研究費補助金：9件 ・学術研究助成基金：22件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件 (京都国立博物館) ・科学研究費補助金：1件 ・学術研究助成基金：5件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件 (奈良国立博物館) ・科学研究費補助金：2件 ・学術研究助成基金：4件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件 (九州国立博物館) ・科学研究費補助金：4件 ・学術研究助成基金：3件 ・科学研究費補助金と学術研究助成基金の両方：0件								
【補足事項】 本項詳細は統計表c-⑦参照								
【定量的評価】項目	2年度実績	目標値	評価	経年変化	28	29	30	元
東京国立博物館	31件	-	-		22	22	18	25
京都国立博物館	6件	-	-		7	11	8	6
奈良国立博物館	6件	-	-		3	5	6	6
九州国立博物館	7件	-	-		8	8	7	6
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 外部資金を活用した文化財に関する調査研究を行った。調査研究の実施においては、各博物館での文化財の収集・保管・展示、教育普及活動等事業と一体的に取り組み、元年度同様順調に成果を挙げている。						
【中期計画記載事項】 文化財に関する調査研究を実施し、その保存と活用を推進することにより、次代への継承及び我が国の文化の向上に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 文化財に関する調査研究実施に際し、外部資金を獲得し活用することで、文化財の保存と活用の推進の一助とした。3年度以降も外部資金活用による調査研究の活性化を図る。						

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア a.特別調査（「法隆寺献納宝物」（第42次）		
【事業概要】当館では、昭和54年より、法隆寺献納宝物の調査を館内及び館外の専門研究者とともに共同で行って きた。本事業は全ての研究者に対して、画像や概要など研究のための情報を提供することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 河野一隆 工芸室 三田覚之
【主な成果】			
(1)調査概要			
・法隆寺献納宝物の染織品に含まれる刺繍作品について調査を実施した（11月4日）。			
・通年にわたって法隆寺献納宝物の染織品調査及び法隆寺宝物館保管の上代裂について調査を行い、法隆寺宝物館 で保管する上代裂のうち、「古幡」について調査を継続しながら本格修理を行っている。			
・元年度後半には新規調査として「龍首水瓶」を対象とし、2年度の報告書刊行を予定していたが、新型コロナウイ ルスの感染拡大防止のため、研究会開催を現在延期している。「龍首水瓶」報告書刊行について、3年度の刊行を 予定している。			
(2)調査の成果			
・新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、実物調査は1日のみとなったが、これまでの研究蓄積を反映するか たちで『法隆寺献納宝物特別調査概報42 染織1 刺繍』を刊行することができた。			
			
調査において撮影した「繡仏裂（N-32）」の顕微鏡写真			
【備考】			
(1)「刺繍」調査日数 1日（これまでの通年にわたる調査成果を反映したもので、実物との照合を行なった） 報告書：『法隆寺献納宝物特別調査概報42 染織1 刺繍』（3年3月30日発行）			
(2)調査研究と並行した染織品の修理 1件 I-335 古幡 奈良時代・天平勝宝9歳（757）1旒			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	法隆寺献納宝物の各種作品に関して、継続的な調査と修理を実施することができた。また、新型コロナウイルスの影響により急遽設定された「刺繍」の調査についても、これまでの研究蓄積を反映することで計画どおり概報を刊行でき、新知見を掲載できた。元年度後半に予定した「龍首水瓶」については、研究会開催をやむなく延期し、報告書刊行を3年度とした。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の最終年度として、法隆寺献納宝物の絵画、書跡、染織の各種作品を様々な観点から調査することができた。今中期計画期間全体を通して、得られた新たな知見を概報刊行等により継続的に公表するなど、中期計画に沿った取組を進めることができた。よって今中期計画期間全体を通して中期計画を遂行できたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア c.特別調査「工芸」第12回		
【事業概要】 東京国立博物館における文化財のうち、金工・陶磁・漆工・染織・刀剣・甲冑等工芸分野の特別調査。該当する工芸分野の研究者が集まり、独立行政法人国立文化財機構が保管する作品の調査を行う。複数の専門家の目で同時に同じ作品を調査することにより、精度の高い成果が得られる。また各機関の研究者が集まることで、最新の研究結果を反映させた知見を共有できる。今後の研究の進展や、展示内容の向上に結びつけることを目的とする。なお、2年度は当初、陶磁・染織の調査会を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大による緊急事態宣言の発令により陶磁は3年度に延期となり、染織のみ特別調査を行うこととなった。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1) 染織 (3年3月3日(水)、4日(木)2日間) 於 東京国立博物館 東京国立博物館には、明治期に海外輸出用や万国博覧会や内国勸業博覧会への出品向けに制作された近代美術染織が所蔵されている。いずれも近代美術史上、重要な役割を担う作品だが、中には保存状態が急激に悪化し、現状を調査して修理するなど改善をしなければ将来へ伝えることが極めて困難な作品も含まれている。今回は、同じく宮内省に由来する近代美術染織を多数所蔵する三の丸尚蔵館の学芸員の知見をいただきつつ、今後の修理をも見据えた調査を行った。 主な作品は、二代川島甚兵衛作「悲母観音図綴額」、西村総左衛門作「近江八景図天鷲絨友禅」など12点。参加者は三の丸尚蔵館の学芸員・太田彩氏、同・五味聖氏、同・小林彩子氏、当館工芸室長・小山弓弦葉、同150周年史編纂室長・恵美千鶴子、同保存修復室研究員・佐藤萌、同工芸室研究員・沼沢ゆかり 以上7名。			
			
		特別調査「工芸」染織調査の様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は、新型コロナウイルス感染拡大防止のため、遠方への出張を伴う調査が難しく、陶磁分野で当初予定していた小郡カンツリー倶楽部からの寄贈品（九州国立博物館で実施予定）調査については、3年度に延期となった。一方、染織分野の特別調査については、当館所蔵品を中心としたため、2年度も予定通り開催することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響により、陶磁分野の調査は3年度以降に延期となった。染織分野は、中期計画の最終年度として、当館所蔵の近代美術染織12件について、外部有識者も含めた調査を実施し、今後の展示計画や修理方針を策定することができた。また今中期計画期間全体を通して、調査結果を工芸史研究並びに当館の展示に反映させるべく取り組むことができ、中期計画を着実に遂行することができた。この成果を、次年度以降の展示案や修理計画に反映していくこととしたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア d. 特別調査「彫刻」第10回		
【事業概要】 社寺等所蔵の仏像、神像、肖像彫刻等を調査し研究報告・論文としてまとめ、あるいは寄託増加特別展等の企画につなげて示質向上を図る。2年度は、館蔵品のなかから中国彫刻に対して、客員研究員とともに共同調査を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1) 調査の概要 本事業では、当館が所蔵する中国彫刻の調査、奈良国立博物館及び九州国立博物館がそれぞれ所蔵する宝慶寺石仏の調査、五浦天心美術館が所蔵する早崎梗吉関係資料の調査などを計画していたが、新型コロナウイルス感染防止の観点から都県を越える調査出張は控え、当館の所蔵品や寄託品の調査を中心に実施した。また、前漢時代から唐時代の陶俑作品の調査も行い、仏教彫刻との造形上の関係やつながりなどについて考察した。			
(2) 調査の成果 ・これまで展示機会がない、もしくは少なかった館蔵品・寄託品の調査を行い、製作地や制作年代を明らかにすることができた。それらの作品の一部を東洋館1室「中国の仏像」に展示した。 ・本調査によって得られた知見を反映した特集「館蔵 珠玉の中国彫刻」（会期：12月1日～3年2月21日）を本館14室で開催した。 ・上記の両室を関連展示として誘導パネルを設置し、相互に連携を図った。			
			
東洋館1室「中国の仏像」		東洋館1室「中国の仏像」	
【備考】 調査回数：6回			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	館蔵品の中国彫刻のうち、これまで展示される機会が少なかった作品を中心に客員研究員とともに調査を実施し、作品の製作年代や製作地を明らかにすることができた。また中国彫刻と密接な関係にある陶俑作品について、当館では東洋陶磁・東洋考古に分類されるものの、それらの調査も行い、これまでよりも広い視点から中国彫刻の歴史及び意義を研究することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	計画していた事業の一部については新型コロナウイルスの影響により実施できなかったが、文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができたことから、十分な成果を上げられた。したがって、中期計画を達成できたと判断した。 引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会や出版物のなかで広く一般に発信していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア e.特別調査「絵画」第5回		
【事業概要】 当館は中近世の扇面画を多数所蔵し、また近年は「源氏物語図扇面貼交屏風」（浄土寺所蔵）の寄託を受けることとなった。この機会をとらえ、当館所蔵品及び浄土寺本を、機構内外の専門家とともに調査、研究する。さらに関連の深い作品の調査を行うことで、将来的な展示、研究に活かす。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室 主任研究員 鷲頭桂
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・「源氏物語図扇面画帖」（A-346）や浄土寺本などの調査を行った。浄土寺本に関しては、サントリー美術館学芸員・上野友愛氏と共同で赤外線撮影を実施した（11/26）ほか、X線撮影（12/11）、蛍光X線撮影（2/8-2/10）を行い、顔料の状態等を調査した。 ・扇面貼交屏風（南禅寺所蔵）6隻の調査と撮影を実施した（10/26～28）。この調査、撮影は京都国立博物館の福士雄也氏、森道彦氏の協力を得て実施した。また同屏風の一連の作品が同館に2隻寄託されており、その調査を3/5に実施した。			
			
南禅寺での撮影の様子		浄土寺本のX線撮影の様子	
(2) 調査の成果 ・絵画表現の変革期である中世後半から近世初期にかけての扇面を集中的に調査することができた。 ・浄土寺本については、複数の光学調査を通して保存状態や顔料に関する新たな新知見を得た。今後の展示等で、これらの成果の活用が期待できる。 ・南禅寺本は、京都国立博物館寄託の2隻の展示公開や画像紹介があるものの、所蔵者が管理されている6隻は『国華』872号（昭和39年（1964年））のモノクロ写真があるのみで、その後、詳細はほとんど紹介されず、保存状態も把握されていなかった。本事業で南禅寺のご協力を得て、6隻の状態確認ができ、扇面180面分の高精細撮影を行うことができた。またその成果を所蔵者と共有することができた。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵、寄託の中近世扇面画と、他機関が所蔵する同時代制作の代表的な扇面絵画を包括的に調査できたことは、大きな成果である。今後の展示、研究への展開が期待できる。 扇面画の熟覧に加えて、複数の光学調査を行うなど、多角的な手法を取り入れることができた。 浄土寺本の光学調査や、南禅寺本の高精細画像など、重要作品に関する新しい研究資料を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の最終年度として、所蔵の絵画列品や寄託作品について、外部識者とともに調査することで、通常業務では得られない多角度からの意見や知見を得られた。今後の基礎情報の整備や展示活用的一面でも有意義であった。また今中期計画期間全体を通して、絵画の各分野の調査を着実にすることができ、中期計画を遂行できたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査研究		
【事業概要】 当館では、29年度より関東地域の社寺に伝存する文化財の皆悉調査を実施している。2年度は元年度に引き続き東京都目黒区に所在する祐天寺の所蔵文化財の調査を行った。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	調査研究課長 河野一隆 絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 (1)調査の概要 ・効率的に調査を推進するため、祐天寺所蔵品のうち、祐天寺研究所及び当館の双方が調査の必要を要する寺宝30件をリストアップし、感染防止に極力つとめながら本調査を推進する方法を検討した。 ・調査の対象となる寺宝30件をリストアップし、絵画分野について2年度は調査を進めることとした。 ・8月19日、9月29日に、祐天寺で、絵画13件の調査を実施した。 ・ファイバースコープを利用した寺宝の内部及び構造調査を実施する予定だったが、新型コロナウイルス感染拡大防止のため延期し、安全に調査を進める方法について、協議を行うにとどまった。 (2)調査の成果 ・元年度に実施した彫刻のX線CT分析について、祐天寺研究所と協議しつつ、画像解析と画像作成を実施し、寺宝の現状診断や修理のための基礎データを取得した後、6月11日に共有した。 ・絵画調査でも寺宝を熟覧し、多くの成果があがった。このうち「両面厨子入祐天上人像・当麻曼荼羅図」を熟覧調査し、元年度調査した「当麻曼荼羅」と比肩すべき精巧な作であることを確認した。また、「阿弥陀三尊来迎図」では、研究所が保有するX線写真と比較検討し、退色した図柄を含めた総合的な検討を行うことができた。			
 地藏菩薩立像のX線CT像  絵画調査風景（祐天寺）			
【備考】 調査日数：2日間（訪問調査）、X線CT画像作成 調査点数：絵画13件（観察、写真撮影） 延べ参加人数：5名			



地蔵菩薩立像のX線CT像



絵画調査風景（祐天寺）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関東地域の社寺所蔵文化財に関する調査を、元年度に引き続いて行った。2年度は、前半期が緊急事態宣言による移動自粛のため、全く進めることができず、解除後も当館、祐天寺双方の感染防止ガイドラインに従った調査であったが、従来のように大人数による調査をせず、事前に調査対象を絞り、短時間で進めるなどの工夫を行った。その結果、従来通りの調査研究を推進することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、文化財の基礎的調査を関東地域の社寺に広げて行った。目黒区・祐天寺調査の2年目にあたる2年度は、新型コロナウイルスの影響による外出制限の大きな影響を受けたものの、中期計画の最終年度として着実に前に進めることができた。以上のことから、中期計画を着実に遂行できたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 列品および寄託品に関連する有形文化財にかかる調査研究		
【事業概要】 館蔵の中国遼東地方由来の考古遺物について、当館客員研究員とともに調査と研究を行い、出土遺構の同定や個々の遺物の年代・製作地等を明らかにし、修理・展示等に向けた基礎データを整備する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	東洋室主任研究員 市元 壘
【主な成果】 昭和6年に東京帝室博物館鑑査官の後藤守一らが調査した熊岳城蘆家屯3号磚墓の出土品について月2回のペースで調査を実施し、また写真撮影を行った。さらに当時の焼付写真との照合作業を通して出土遺構を同定し、副葬品の配列状況を復元した。これらを総合して、同墓の年代が2世紀後半であることを明らかにし、また副葬品の多くは在地産であることを明らかにした。 中国の東北部に位置する遼東地方は、後漢時代から三国時代にかけて存在感を増し、朝鮮半島や日本列島との交流もうかがえることから近年注目度が高まっている地域である。当館が所蔵する熊岳城蘆家屯出土資料は、当地におけるまとまった資料として重要であり、本業務においてこれを調査しその成果を公開することで、日中韓の考古学界に貢献することができた。 熊岳城蘆家屯出土品は、館蔵の東洋考古の列品の中でも数少ない出土地が明らかな一群でありながら、帰属年代や製作地についてはこれまで詳細に検証されてこなかった。本業務を通じてそれらを明らかにしたことで、修理や展示等へ向けたデータの基盤整備ができた。 11月にはこれらの成果を、論文にまとめ投稿した。2年度の11月からは3号貝墓の調査に着手し、3年度の後半には1号貝墓、そして1号磚墓へと調査を拡充する予定である。			
			
3号貝墓出土 大泉五十銅銭 (TJ-3023) 分類作業		3号磚墓出土 灰陶壺 (TJ-2979) の調査	
【備考】調査完了列品件数：35件 (TJ-2975～3008, 5824) 撮影列品件数：27件 論文：石川岳彦・市元 壘「蘆家屯3号磚墓—館蔵遼東出土資料の研究(1)—」『MUSEUM 東京国立博物館研究誌』第691号、東京国立博物館。3年4月			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館が所蔵する東洋考古の列品に対し、帰属年代や製作地について、最新学術成果を踏まえて詳細に解明した。これら研究基盤に立脚し、修理や展示の計画を策定することができた。本研究の公表を通じて、日中韓の考古学の研究交流にも大きく寄与することになった。 当該列品は本格修理が必要なものを多数含んでいる。2年度は、調査と連動して本格修理の検討もすすめたことで、3号磚墓出土品のうち5件の列品について3年度から修理に着手できることとなった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	昭和6年の調査に係る列品は、蘆家屯3号磚墓のほか、1号磚墓、1号貝墓、3号貝墓がある。2年度は、より多くの基礎データを得るために、出土数が最も多い蘆家屯3号磚墓を対象とした。また、中期計画の最終年度として、2年度中に成果を論文にまとめることができた。今後も遼東地方由来のその他の列品について順次調査をしていく計画である。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 仏教美術等の光学的手法による共同研究		
【事業概要】 非常に高度な技術と優れた美的感覚によって製作された平安時代を中心とした仏教絵画の美しさの構造をより深く理解するため、光の当て方も工夫した高精細撮影と、X線、赤外線などによる各種光学調査を実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】  重要文化財「准胝観音像」(A-11796)、重要文化財「准胝仏母像」(A-12449) に対して、高精細拡大撮影を行った。特に重要文化財「准胝仏母像」(A-12449) については、元年度に行った蛍光X線分析による調査で、背景から銀 (Ag) と水銀 (Hg) が検出された箇所を中心に、高精細拡大撮影を行い、その結果、正しく絹表面に水銀 (Hg) を含む赤い顔料があることが確認できた。 これにより、水銀朱と銀による背景表現という、従来、知られていなかった平安仏画の表現についての新知見が得られた。継続的な研究によって、仏画表現に用いられた色使いについて、今までにない成果を上げることができた。 重要文化財 A-12449 准胝仏母像 観察風景			
【備考】 調査3回、作品2点			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	銀(Ag)と水銀朱(Hg)による表現という、従来想定されていなかった彩色法の存在の確実性を高めることができた。元年度の蛍光X線分析と併せ、仏画の表現を考えるうえで重要な問題を提起することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	5か年の中期計画の最終年度となる2年度は、予定していた館蔵の平安時代・12世紀の仏画の調査を終え、全体として背景の彩色における銀の使用や、合せ箔や箔に彩色を重ねるなど、色に対する多様な繊細な意識を提示できたことは大きい。よって今中期計画期間全体を通して、中期計画を遂行できたといえる。 これに続き、3年度以降も同様に中期計画を推進し、平安時代の11世紀の作品である国宝「十六羅漢像」(A-10946・11085)をはじめとして、当館以外の所蔵作品についても視野を広げ、この調査研究を推進するとともに、より多くのデータを蓄積することを目指したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 美術工芸品に用いられた画絹及び染織品の組成にかかる共同研究		
【事業概要】 制作年代がわかる基準作となる作例が比較的多い絵画作品に用いられた絹製品である画絹を中心にして、経・緯の糸の太さや本数の比率、断面形状などを計測し、時代や国、地域による傾向の有無、特徴を抽出する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室長 沖松健次郎
【主な成果】 (1) 研究の概要 ・調査2回(10月21日・22日、3年2月12日) ・調査作品数10点 (2) 研究の成果 ・1回目は近世の仏画に焦点を絞り調査を実施した。 A-12440 当麻曼荼羅図 神田宗庭隆信筆 天保7年(1836) A-250 毘沙門天像 住吉広当筆 天明2年(1782) A-280 観音変相図 鶴洲霊鷲筆 木庵性瑠・高泉性激・千呆性俊賛 延宝7年(1679) 38幅のうち 中央幅・右第一幅(A-280-1,2) A-743 五百羅漢像 狩野一信筆 江戸時代・19世紀 50幅のうち 第一幅・第二幅 いずれも制作年のわかる作例であり、17世紀末、18世紀末、19世紀前半と近世の各時期における基準サンプルを取得することができた。 ・2回目は卷子装の作品を対象に実施した。 国宝 A-10944 一遍聖絵 巻第七 法眼円伊筆 鎌倉時代・正安元年(1299) 1巻 A-85 四季花鳥図巻 酒井抱一筆 江戸時代・文化15年(1818) 2巻 A-59 北楼及び演劇図巻 菱川師宣筆 江戸時代・17世紀 1巻 13世紀の絵巻と19世紀の琳派系作品の基準作となるもの、17世紀の肉筆浮世絵系作品の3作品を対象とすることで、卷子装作品の基準となるデータを整備することができた。また特に、室町時代から江戸時代への絹の組成が大きく変換する17世紀の絵画作品について、仏画と世俗画の両方でデータを取得できた。			
観音変相図(A-280) 調査風景			
【備考】 調査2回、打ち合わせ1回 作品10点。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	江戸時代の各時期の基準となるデータが取得できた。近世各時期の基準サンプルとなる室町時代から江戸時代にかけての画絹変遷の見通しが跡付けられ、多大な成果を得ることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画の最終年度に当たり、事業目的に対応した各時期のデータを順調に整備することができた。今中期計画期間全体を通して、現状とっている時代とその前後の時代の作例数を順調に増やすことができた。今後はさらに各時期のデータを補強し、この分野の今後の研究の基盤整備が見込まれる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 東洋民族資料に関する調査研究		
【事業概要】 東京国立博物館が所蔵する約 3500 件の東洋民族列品を対象として調査研究を行い、展示を充実させる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課特別展室長 猪熊兼樹
【主な成果】 (1) 調査概要 2 年度は、台湾において台湾先住民族資料の調査を行う予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大防止にともなう渡航制限のため同調査を見送り、これまでの調査研究の成果を活用した展示を実施した。 (2) 調査の結果得られた知見 当館が所蔵する東洋民族の列品のうち、特にインドネシアの影絵人形であるワヤンの分類・展示活用に資する知見を得ることができた。 (3) 調査研究の成果 これまでの調査研究（主に元年度のプロジェクト「特集『ワヤン—インドネシアの人形芝居—』に関連する調査研究」）の成果に基づき、当館が所蔵する東洋民族列品のうち特にインドネシアのワヤンについて演目に応じた分類を行った。その成果は2年度の東洋館の展示「アジアの民族文化 ワヤン・クリーマハーバーラタの人形たち—」に反映した。また動画配信「オンライン月例講演会『レジェンドを語る』」において展示解説を行うことで、新型コロナウイルス感染拡大の状況における普及活動の工夫に努めた。			
			
オンライン月例講演会におけるワヤンの解説 ※「オンライン月例講演会『レジェンドを語る』」(https://www.youtube.com/watch?v=igntKvXxvwk) より		オンライン月例講演会におけるワヤンの展示風景	
【備考】 展示期間：恒例企画「博物館でアジアの旅 アジアのレジェンド」(9月8日～10月11日)のうち「アジアの民族文化 ワヤン・クリーマハーバーラタの人形たち—」(東京国立博物館 東洋館 13室7月21日～10月11日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 当館が所蔵する東洋民族列品については、中国資料・韓国資料・東南アジア資料・南洋資料・台湾先住民族資料などから構成されている。これらの資料は、東洋館の平常展示及び特集陳列などにおいて展示活用が期待されるため、その分類整理を進めている。 - 従来、ほとんど展示活用されていなかった東洋民族列品については、東洋館リニューアル以降、東洋館の平常展示「アジアの民族文化」や特集陳列などで展示活用されており、展示内容が着実に充実してきている。 - 当館が所蔵する東洋民族列品のうち、特にインドネシアのワヤンの分類や展示活用に資する知見を得ることができた。また、新型コロナウイルス感染拡大の状況でもYoutubeなどの媒体を活用し、列品の教育普及につとめた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3 年度以降は平常展示「アジアの民族文化」における中国少数民族資料、韓国民族資料、台湾先住民族資料などの調査に取り組む。 28 年度以降、当館の東洋民族資料にちなんだアジア各地の調査を継続しており、2 年度は中期計画の最終年度として、着実に資料の分類整理と展示活用を進めることができた。よって今中期計画期間全体を通して中期計画を遂行できたと判断した。引き続き、この調査を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「書と紙ー平安時代の美しい紙ー」に関連する調査研究		
【事業概要】 2年度に行った特集「書と紙ー平安時代の美しい紙ー」(本館特別1室、9月24日～11月23日)を充実した展示にするための調査研究。平安時代には、美しく装飾された紙(料紙)に詩歌などを能書(書の巧みな人)に揮毫してもらった調度手本が贈り物として作られた。装飾料紙に書かれた書跡について、その見方・美しさをできるだけわかりやすく適切に展示・解説することを目標として、展示作品や関連資料の調査によって、展示手法、展示構成の検討を行う。また、特集にあわせてリーフレットを発行するため、その調査研究も同時に進める。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	書跡・歴史室 恵美千鶴子
【主な成果】 (1) 作品調査 (6月13日ほか) 出品作品の調査を実施した。 (2) 関連資料の収集 (7月15日ほか) 出品作品や関連作品の画像や関連する資料のデータを収集した。 (3) 成果とその公開 展示にあわせてリーフレットを作成した。また、「元永本古今和歌集の魅力とその伝来について」ほか関連する論文を発表し、口頭発表「博物館にとっての複製品」(9月22日)も行った。			
 作成したリーフレット			
【備考】 (1) 作品、関連資料調査 調査件数: 30 件、画像撮影点数: 170 点 (2) 関連資料の収集 収集資料の件数: 28 件 (3) 成果とその公開 公開件数: 論文 4 件、口頭発表 1 件、リーフレット 1 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	一般に「読めない」などと考えられ、書跡作品は展示方法が難しい。したがって、書跡作品の魅力を多角的に紹介することは重要である。そのための基盤となる調査研究を着実に進めることができた。 出品作品のみならず、関連する作品や資料まで幅広く調査できた。また、本特集展示の計画以前から推進してきた調査研究の成果に立脚し、論文で発表することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は中期計画の最終年度として、以前から継続してきた調査研究を大いに進展することができた。また今中期計画期間全体を通して、着実な調査推進、関連調査の発掘、研究の深化などの成果を論文・口頭発表することもできた。今後もこの問題関心を堅持しつつ研究活動の展望を継続したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「大野出目家と越前出目家の能面」に関連する調査研究		
【事業概要】 江戸時代に活躍した世襲の面打の家3つのうち、越前出目家と大野出目家の作った能面23面を展示し、その歴史をたどる。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】 越前出目家と大野出目家に関する資料、論文を収集し、作品と照らし合わせて検討した。越前出目家が後継問題で混乱があること、これまで弟子出目家と呼ばれていた系統が一時越前出目の嫡流となるが、肩書の詐称などで自滅したらしいことなどがわかった。また大野出目家の資料により、幕府御用の面打の代変わり、出家などの時は若年寄の家で行うことがわかった。江戸時代前期から中期にかけての面打の動向を知ることができた。 これらの研究成果に立脚し、総合文化展の特集「大野出目家と越前出目家の能面」（会期：8月25日～10月4日）を企画して、展示で成果を公表した。			
 			
能面 孫次郎 出目満長（花押）朱書（和歌山・根来寺）			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	能面の研究は活発とは言えない状況で、特に江戸時代の面打について考察する研究は極めて少ない。2年度は、最近発表された研究成果に立脚して調査研究を行い、展示によって新知見を示した。 科学研究費によって能狂言面の調査研究を継続して行い、この成果を反映し、より深めた論文や展示等によって研究成果を公表する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画期間全体を通して、文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究を実施し、成果として展示で公表した。引き続き調査を推進し、逐次その成果を展覧会や学術誌等で広く公表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「令和元年度新収品展」に関連する調査研究		
【事業概要】 本特集は、元年度に新たに収蔵品に加わった文化財のうち、寄贈分、購入分より主だった作品を公開するものである。新収品を通じ、当館のもっとも重要な事業のひとつに位置づけられる「文化財の収集」について、その成果と意義を紹介する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部特別展室主任研究員 土屋貴裕
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・元年度には、購入 11 件、寄贈 28 件、合計 39 件の文化財が新たに収蔵品に加わった。うち本特集では 25 件の文化財を特集展示の中で紹介した。 ・新収蔵品のバラエティの豊かさを示すため、絵画、書跡、歴史資料、工芸、考古等の諸分野がバランスよく展示されるよう、作品選定を行った。 ・展示にあたっては、書画分野、工芸・考古分野計 4 名でワーキンググループを編成し、作品調査に基づく展示作品の選定、陳列順の検討などを協議した。解説等の執筆にあたっては、収蔵時の調査に加え、新たに調査を行なうことで、充実した内容となるよう努めた。また、展示作品が多様な素材にわたることから、展示照度等も事前に入念に検討し、作品の保存に関しても問題がないよう検討を行った。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止により対面でのギャラリートーク等が実施できないため、オンライン配信によるギャラリートークを絵画・彫刻室長・沖松健次郎が行った。			
			
平成館企画展示室での展示風景		オンライン配信によるギャラリートークの様子	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本特集は、当館のもっとも重要な事業のひとつに位置づけられる「文化財の収集」について、その成果と意義を紹介するもので、例年実施している特集である。文化財の収集については寄贈と購入が大きな柱となるが、とりわけ寄贈は、今後ますます求められる点である。本特集では、展示作品の選定や陳列順などについて検討を行い、こうした寄贈制度をより広く知っていただくと同時に、購入された文化財を広く国民に観覧に供することで「文化財の収集」に対する国民の理解を深めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	「文化財の収集」及び「文化財の調査研究」という、当館が活動する根幹の事業について、その成果を公表する機会として、意義のある特集を実施することで、中期計画を遂行できた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「世界と出会った江戸美術」に関連する調査研究		
【事業概要】 本特集は、3年1月13日～3月7日に開催予定であった特別展「ジパング 世界と出会った日本の美」の中止を受け、本特別展準備を通して得られた研究成果を公開する場として立案された企画である。 キリシタン関係遺品や蕃書調所などに伝来した館蔵品を中心に、館蔵品・寄託品から、16～19世紀の日本・ヨーロッパ間の交易を背景に制作された美術工芸品や歴史資料を選んで紹介した。 なお、本事業は「日本博」による助成の対象事業である。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室主任研究員 鷲頭桂
【主な成果】 (1) 特集展示 ・本特集では、江戸時代の対外交流の多様性や、当館所蔵品がもつ歴史的価値を紹介するため、絵画、彫刻、漆工、陶磁、金工、歴史資料など幅広い分野から、36件の作品を選定、展示した。 ・事前調査を行い、カスティリオーネ画「準回両部平定得勝図」や安田雷洲筆「草花図扇面」など従来活用されていなかった作品を初公開した。 ・展示及び保存方法を検討し、一部の作品については展示具の新規作成、装丁の見直しを行った。 (2) リーフレットの作成 ・作品を多くの方々に知っていただくため、全16ページのリーフレットを作成し、館内で無料配布すると同時に当館ウェブサイトからPDFを無料ダウンロードできるようにした。 (3) オンライン・ギャラリートークの配信 ・博物館の活動を広く伝え、かつ作品の魅力を紹介するため、ギャラリートーク動画を制作、配信した。会場での案内に加え、作品を詳解する映像を事前に撮影した。			
			
平成館企画展示室での展示風景		オンライン配信のギャラリートーク	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は特別展の代替企画として、特別展のテーマを引き継ぎつつ、当館所蔵品・寄託品に限定して再構成した展示であり、作品選定に当たっては所蔵品の基礎的な調査を行い、従来活用していなかった複数の作品を初公開することができた。また、既知の作品についても展示、保存方法の改善を図ることができた。 また本事業によって得られた知見を公開する工夫として、無料配布のリーフレットやオンライン・ギャラリートーク動画を作成し、展示終了後も本調査研究活動の成果が広く共有できるようにした。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、当館業務の基盤的な活動である「文化財の調査研究」の成果を展示、印刷物、動画など、各種媒体を通して公開することができた。これらの成果は、展示、研究、借用など、当館所蔵品の将来的な活用大いに有益であると同時に、中期計画に沿った事業として順調に推進することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「館蔵 珠玉の中国彫刻」に関連する調査研究		
【事業概要】 館蔵の中国彫刻で、東洋館リニューアル以降、展示の機会が少なかった作品のうち、中国仏教や道教の特色を示す作品を展示した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸企画部企画課長 浅見龍介
【主な成果】 (1) 調査の概要 展示に先立って、以下の事前調査を実施した。 ・6月23日 館蔵の陶俑作品の調査 ・7月6日 館蔵の東洋彫刻の調査 (TC-58 四面龕像、TC-26 如来三尊像、TC-59 菩薩立像、TC-486 如来倚坐像) ・7月9日 館蔵の東洋彫刻の銘文調査 (TC-64 龍樹思惟像台座) ・8月3日 館蔵の陶俑作品の調査 (TJ-682 加彩男子) ・9月28日～29日 特集のリーフレット掲載のため館蔵品の新規撮影 (TC-64 龍樹思惟像台座、TC-19 菩薩龕像、TC-29 諸仏龕像、TC-26 如来三尊像、TC-57 天尊龕像、C-221 観音菩薩立像(九面観音)(模造)、TC-486 菩薩倚坐像) ・10月12日 寄託品の東洋彫刻の調査 (2) 調査の成果 ・調査によって得られた知見を反映した特集「館蔵 珠玉の中国彫刻」(会期：12月1日～3年2月21日)を開催した。 ・本特集のリーフレットを3,000部制作し、来館者に無料で配布した。			
			
8月3日の陶俑作品の調査		展示会場風景（本館14室）	
【備考】 調査回数：6回			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中国彫刻は新たな収蔵が困難な分野だが、当館にはすでに優れたコレクションがあり、作品の基本情報の公開が待たれていた。館蔵品の中国彫刻のうち、これまで展示される機会が少なかった作品を中心に客員研究員とともに調査を実施し、製作年代や製作地を明らかにすることができた。本特集ではそれらの調査によって得られた知見や成果を反映して開催することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画期間全体を通して、文化財に関する基礎的かつ総合的な調査研究の成果を、展覧事業・教育普及活動等に反映するという中期計画に沿った調査研究や研究成果の報告ができた。次期中期においても引き続き調査を進め、逐次その成果を展覧会や出版物のなかで広く公表していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「表慶館の建築図面」に関連する調査研究		
【事業概要】 特集「表慶館の建築図面」の開催準備に当たって、出品予定の作品や関連する文献を調査し、成果を展示に反映する。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部保存修復課長 富坂賢 学芸企画部企画課デザイン室長 矢野 賀一
【主な成果】 ・これまで注目されることが少なかった明治後期の建築図面について調査を行い、建築の計画過程など新たな知見を得ることができた。 ・12月8日から3年2月14日まで本館15室で展示を行った。 ・表慶館で開催した特別展「日本のたてももの―自然素材を活かす伝統の技と知恵―」（会期：12月24日～3年2月21日）と連携し、日本建築についての興味関心を喚起するきっかけを提示した。			
  			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	調査を通じて、館蔵品に関する学術的情報を充実することができた。展示によって、これまで比較的知られることが少なかった明治後期の建築図面の表現や計画の過程、その存在や歴史的意義を周知することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	表慶館造営図面の分類整理やその他の関連資料の基礎的かつ総合的な調査研究を行った。また、本館15室でその成果の一部を展示公開し広く一般に公開することができた。以上のことから、今中期計画を遂行できたと言える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	キ 特集「博物館に初もうで ウシにひかれてトーハクまいり」に関連する調査研究		
【事業概要】 3年の干支にちなみ、収蔵品のなかから牛に関連する作品を選定し、人と牛との豊かな歴史を紹介する特集展示である。毎年恒例の正月企画「博物館に初もうで」の一環として実施するもので、担当研究員の調査研究の成果を公開するとともに、収蔵品に関する新たな活用と普及啓発とを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課絵画・彫刻室研究員 高橋真作
【主な成果】 (1)実施概要 ・開催期間及び開催場所：3年1月2日～30日 本館特別1室・特別2室 ・担当者：高橋真作（同上）、福島修（学芸研究部調査研究課）、増田政史（学芸研究部調査研究課） (2)主な内容 ・絵画・彫刻・工芸の各分野を専門とする計3名のワーキンググループを編成し、調査研究に基づいた作品選定を行い、展示構成や陳列順序等について協議した。 ・収蔵品の多様性をアピールするため、過去に出陳されたことのない作品や、担当者の専門以外の分野からも多く出陳し、計60件の作品を展示した。 ・広報及び普及啓発のため、ポスター（B2サイズ）及びリーフレット（A3サイズ2つ折り）を作成した。 ・文化庁広報誌ぶんかる「文化財のトビラ」、『月刊うえの』（WEB）、1089ブログ等に特集展示の紹介文を寄稿した。 ・新型コロナウイルス感染拡大防止のため、対面でのギャラリートーク等が実施できないことから、オンライン配信によるギャラリートークを高橋が行った。 ・オンライン配信の『ニコニコ生放送』に担当者3名が出演し、20,000人を超えるアクセス数を得た。			
 ポスター  リーフレット  展示風景  ギャラリートーク収録風景			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	3年の干支にちなんだ「牛」というテーマを切り口とし、既存の収蔵品に新たな光を当てることで、初公開作品を多数展示するなど、有形文化財の効果的な活用が実現できた。またその成果について、オンライン配信を含めた多角的な情報発信を行うことにより、国内外に広く周知・公開し、作品の理解を深めることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	絵画・彫刻・工芸の各専門分野を基軸とした調査研究の成果により、多数の初公開作品を発掘・選定するなど、中期計画を遂行できた。また、中期計画の最終年度として、オンライン配信を中心とする新たな情報発信の取り組みを実施し、有形文化財に関する受容層の拡張と作品への理解を促進できた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ク 館内調査研究「中近世風俗図の調査研究」		
【事業概要】 当館所蔵の重要文化財「月次風俗図屏風」(A-11090)は、31年度～3年度の計画で本格修理を実施中である。本事業では、本格修理という機会をとらえて、本図に対して本格的な光学調査を実施し、今後の研究に資することを目的として実施した。			
【担当部課】	学芸研究部調査研究課	【プロジェクト責任者】	絵画・彫刻室 主任研究員 鷲頭桂
【主な成果】 (1) 調査の概要 ・本作品は、修理前の目視での観察でも、絵具層や絵画表現が複雑に重なっていることが確認され、オリジナル部分と後補部分の見分けが困難であった。そのため、修理前に反射赤外線撮影、X線撮影を行ったところ、大幅な構図変更があったことが判明した。より詳細な情報を得るため、修理過程で本紙が下地の屏風から外され、一部裏打紙が除去される時期を利用して、透過赤外線撮影を実施した(7月15日)。 ・「月次風俗図」と絵画表現や制作環境の近さが指摘されている、「四季耕作図屏風」(新潟県立歴史博物館所蔵)の赤外線撮影(10月20日～21日、3年3月17日～18日)及び蛍光X線調査を行い、「月次風俗図屏風」と比較するためのデータを収集した。調査は新潟県立歴史博物館の前嶋敏氏とともに実施した。 (2) 調査の成果 ・「月次風俗図屏風」の光学調査では、表面の絵具層の下に、当初のものと見られる墨線が確認できた。当初は、現在の画面とは異なるモチーフの配置や構図であったが、その後修正されたことが新たにわかった。また、目視や透過光では判別しにくい本紙と補紙の継ぎ目が透過赤外線調査で確認でき、修理において補紙除去を判断する時に参考となる情報を得ることができた。 ・「四季耕作図屏風」も、絵画制作中の変更と推測される、図像や画面構成の修正の痕跡を観察することができた。特に、「月次風俗図屏風」に類似する田楽の表現が本来は描かれていたことなどが確認できた。			
			
新潟県立歴史博物館での調査の様子		月次風俗図(第6扇上部)透過赤外線撮影画像	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・「月次風俗図屏風」の図様変更が確認できたことで、本作品のみならず、周辺の中世風俗図をめぐる研究に資する新知見を得ることができた。 ・「月次風俗図屏風」の光学調査により、本格修理に益する情報を得ることができた。 ・3年度、修理完成後に「月次風俗図屏風」の顔料調査(蛍光X線)を行い、類似作例である「四季耕作図屏風」との比較検討を行う計画である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は「月次風俗図屏風」の修理時期に合わせて計画立案し、2年度は中期計画の最終年度として予定通り光学調査及び分析を実施した。よって今中期期間全体を通して、中期計画を遂行できたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 近畿地区社寺文化財の調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 京都国立博物館では長年にわたり、京都を中心とした近畿地区の社寺に伝存する文化財の悉皆調査を行ってきた。令和2年度は、大徳寺塔頭の龍光院（京都市北区）に伝来する文化財調査を開始した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	調査・国際連携室長 吳孟晋
【主な成果】 (1) 龍光院の調査は所蔵文化財の悉皆調査として計画されており、8月と3年1月に合計2回実施した。 8月24日～28日（絵画・書跡）：調査点数140件 3年1月25日～29日（絵画・書跡）：調査点数126件 (2)京都市内では11月に瑞泉寺（中京区）でも文化財調査に向けての下見調査を行った。 (3)過去に実施した社寺調査の調書の整理を継続して行い、データの電子化を進めた。			
			
龍光院調査			
【備考】 (1)龍光院調査 ・龍光院は大徳寺第一五六世の江月宗玩（1574～1643）を実質的な開祖にいただき、近世以降の日本の禅宗史のみならず茶道史の展開においても重要な役割を果たしてきた寺院である。所蔵文化財には江月ゆかりのものも多く、同院での調査は茶道史研究の観点からも意義があるといえる。 ・龍光院調査では、新型コロナウイルス感染拡大を防ぐため、従来の全研究員参加型ではなく分野ごとの調査とし、少人数で実施した。 ・龍光院での調査成果の一部は、3年10月にアメリカのサンフランシスコ・アジア美術館が主催し、当館が特別協力する展覧会「Heart of Zen」にて紹介される予定である。 (3)過去の社寺調査データの整理 ・新型コロナウイルス感染症感染拡大により作業が滞るなかで、『科学研究費補助金報告書 金剛寺編』（2年1月刊行）の内容を加筆修正に注力した。未調査であった古文書253件の調査報告を加え、『社寺調査報告30』（金剛寺編）刊行に向けて電子データを作成した。			

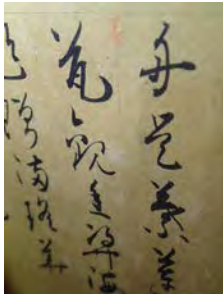
年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	龍光院調査は、年度当初からの新型コロナウイルスの流行拡大により実施は危ぶまれたが、感染状況が比較的落ち着いていた夏に連続5日間の日程で始めることができた。調書は順次、電子化され、悉皆調査終了後には速やかに報告書を刊行できるように整理を進めた。報告書は元年度までの金剛寺調査の完成版刊行の準備を進めたが、年度末にかけての感染再拡大をうけて年度内の刊行は断念した。そのため、年度計画に掲げた目標は一部達成できていないが、過去の社寺の調査データの整備などを計画的に進めたため、年度計画は遂行したと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画にある有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究の一環として、毎年継続して調査を実施してきた。また、当館が立地する京都市内を中心とする寺院の調査も継続的に進めており、近畿において社寺調査のノウハウを着実に蓄積してきたといえる。以上のことから、中期計画を遂行できたと言える。調査成果にもとづく展覧会や特集展示などは、調査の成果を広く紹介するためにも必要と考えており、次期中期計画において実施を検討する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 訓点資料としての典籍に関する調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】 漢文を訓読するために施された、「訓点」と呼ばれる読みを表すための記号は、時代や地域によりかなりの多様性があり、その大半は経典・漢籍・和書などの典籍にみられる。これらに付された訓点により、とくに古代・中世の日本人がどのように本文を読み下していたか、という日本語の有り様が判明する。京都国立博物館では、「守屋コレクション」に代表される、国内外の良質な古典籍を数多く収蔵することから、それらを中心とする調査研究を行うことにより、得ることのできた成果を展示や講演、及び刊行など、博物館における関連事業へと還元する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長（兼列品管理室長）羽田聡
【主な成果】 (1) 典籍の研究には、その特質に応じた専門の学識者が不可欠であるため、当館美術室研究員の上杉智英（仏教学）とともに、新型コロナウイルス対策に十分配慮したうえで、計4回の調査を実施した。 (2) 調査作品は、国宝「日本書紀卷第二十二・卷第二十四（岩崎本）」や国宝「新撰類林抄卷第四残卷」（以上、館蔵品）をはじめ、「紺紙銀字法華経」（寄託品）など、東アジア（日本・中国・朝鮮半島）で書写された古典籍15件に及び、今後の研究にも資するよう、全巻撮影を行った。 (3) 調査における特筆事項として、「新撰類林抄卷第四残卷」は料紙に斜光を当てたところ、草書で記された本文の脇に、読解した文字を楷書で表す白書が全面にわたり確認された。これらは通常では視認できず、本文の執筆とほぼ同時期、すなわち平安時代前期（9～10世紀）と考えられる。 (4) こうした成果公開の手段として、展示・講演・刊行を得、とくに2年度は『日本書紀』の成立からちょうど1300年となるため、当館の所蔵する「岩崎本」「吉田本」という、国宝に指定される2つの『日本書紀』を中心に、東アジアで作成された古典籍の優品を展示し、見どころをYoutubeでウェブ配信した。			
			
「新撰類林抄卷第四残卷」に確認された白書		「国宝『日本書紀』と東アジアの古典籍」展示風景	
【備考】 ・調査回数及び件数 4回・15件 ・撮影コマ数 約100カット ・成果の公開（展示） 平成知新館名品ギャラリー 特集展示「国宝『日本書紀』と東アジアの古典籍」（3年2月4日～2月28日、Youtubeでのウェブ配信は2年2月19日～現在） ・成果の公開（講演） 羽田聡「二つの国宝『日本書紀』」（京都国立博物館土曜講座、3年2月27日） ・成果の公開（刊行） 上杉智英「日本における法蔵『起信論疏』の流伝」（東国大学校仏教文化研究院編『佛教学報』第94輯、3年3月）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの感染拡大をうけ、2度にわたり発出された緊急事態宣言により、調査の実施を必要最小限に留めたため、元年度と比較すると、その回数及び件数は減じているが、ほかの項目は同等の成果をあげている。あわせて、成果の公開では、展示作品の見どころを Youtubeを利用してウェブ配信し、来館のみによらない博物館の魅力発信という新たな試みを行ったため、所期の目標は達成していると判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画5か年のうち、元年度及び2年度は新型コロナウイルスの影響により、とくに調査回数及び件数は減少したが、一般への発信という点では、展示・講演・刊行において継続的に成果をあげているため、所期の目標は達成できていると判断した。次期中期計画においては、白書や角筆など、通常では不可視の情報を正確に把握、かつ共有する方法を模索し、文化財修理をはじめとする、ほかの事業との連携を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ① 有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 旧家伝来の工芸品に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 関西圏を中心に、旧家伝来工芸品の調査を実施することにより、地域の暮らしの在り様を物質的に探るとともに、調査を作品の管理・保存のみならず、寄贈・寄託・貸与に結び付け、博物館の収蔵品と展示の充実を図る。			
【担当部課】	学芸部 工芸室	【プロジェクト責任者】	工芸室長 山川 暁
【主な成果】 (1) ・関西圏を中心に旧家の工芸品の調査を行い、調書を作成すると同時に記録写真の撮影を行った。 5月 京都市内の旧家2か所にて人形の作品調査、写真撮影を行い、作品寄贈に向けての話し合いを行った。 6月、8月、9月 奈良・京都・愛知・石川にて陶磁の作品調査を行い、保存管理についての助言を行った。 9月 静岡市内旧家、京都市内旧家にて漆工・陶磁の作品調査、写真撮影を行い、保存管理についての助言を行うとともに、作品寄託に向けての準備を行った。 10月、11月、12月、3年2月 石川・京都・岡山・奈良・東京にて陶磁の作品調査を行い、保存管理についての助言を行った。 (2) 成果内容 ・旧家伝来品の調査を行い、今後の保存管理に助言を行った。 ・所蔵品調査の結果、作品の寄贈を受けた。			
【備考】 染織・人形調査 回数2回(調書2件、画像撮影31カット)。 漆工調査 回数3回(調書51件、画像撮影548カット)。 陶磁調査 回数14回(調書219件、画像撮影6,713カット)。 作品寄贈 1件			

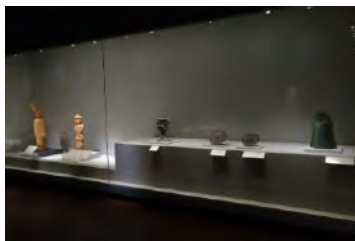
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	関西圏を中心に、戦災の被害が少なかった地域の旧家には、江戸時代から受け継がれる高級工芸品が現在も伝えられている。しかしながら、近年の生活様式の急激な変化により、多くの邸宅や蔵が建て替えられる時期を迎えており、博物館には数多くの調査依頼が寄せられている。本プロジェクトの目的は、それらの調査の要請に応え、旧家の暮らしの物質的な基礎データを蓄積し、研究を進めることである。これまでも日常業務として継続してきた業務ではあるが、プロジェクト化することにより、旧家のかつての生業の聞き取り調査も含め、歴史学・民俗学的な観点からも、美術品をめぐる文化の全体像を把握しようとする問題意識が生まれている。2年度は訪問による調査が難しかったが、可能な限り調査の要望に応じ、寄贈・寄託という形で収蔵品の充実を進めることができた。 以上の実績に基づき、年度計画を達成したと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通じ、着実に調査実績を重ね、基礎データの蓄積を行った。調査の結果当館に作品が収蔵されることで、収蔵品の充実がはかれるとともに、展覧会において活用することが可能になり、研究成果を広く一般にも発信できた。 第5期中期計画においても、本プロジェクトを継続して進め、さらなる成果に結び付けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目		(4)有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究	
プロジェクト名称		エ 京都周辺の考古遺物に関する調査研究 ((4) -①- 1)	
【事業概要】 1. 西宮山古墳遺物の整理と研究、2. 天台展にかかる延暦寺所蔵考古資料の調査			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	特任研究員 宮川禎一 研究員 古谷毅
【主な成果】 1) 当館列品を中心に、平常展示(名品ギャラリー)において夏期・冬期(6月29日～9月13日・12月19日～3年2月28日)に日本考古分野の通史展示約50件を計画し公開した。なお、展示を新型コロナウイルスの影響で充分に行えなかったが、6月に再開館した際に名品ギャラリーとして、平成知新館1階・金工展示室において短縮した代替展示を行い、借用作品の一部を公開(6件:6月4日～20日)した(写真1)。また、展示品の充実を図るため、土器・武器武具・金属器など各分野の列品修理を実施した。 一方、3年度に予定している西宮山古墳遺物の特集展示準備として、当館考古部門の列品を代表する兵庫県たつの市の西宮山古墳出土品について写真再撮影及び整理研究を行った(写真2)。あわせて、元年度から実施している考古相互貸借事業の延長として、たつの市から借用資料の写真撮影や調査(実測製図作業など)を行い、列品関連資料の画像取集に努めた(写真3)。これらの研究成果は、3年度特集展示に反映させ、簡易報告書(展示解説兼用冊子)の作成準備を行う予定である。 2) 5年度に予定されている「天台展」に関して、延暦寺国宝殿において山内出土品の調査を行った。			
   1 名品ギャラリー(代替展示) 2 西宮山古墳出土須恵器(再撮影) 3 西宮山古墳発掘調査写真(スキヤニング)			
【備考】 1)-1 名品ギャラリー[展示公開] ・考古展示(夏期:6件・6月4日～22日[12日間]、冬期:当館43件・12月19日～3年2月28日[56日間]) 1)-2 修理 ・列品:13件(弥生土器:4件、須恵器:6件、武具1件、武器1件、金銅製装身具1件) 1)-3 借用 ・たつの市龍野歴史文化資料館蔵 資料・写真:8件・50枚 1)-4 撮影・スキヤニング等[調査研究] ・列品:60件 ・借用資料:8件(円筒埴輪・須恵器・土師器・馬具・武器等) ・借用写真:50枚 2)調査 ・比叡山山内出土遺物の調査10点			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	名品ギャラリーの展示公開は、新型コロナウイルスの影響を受けつつも、夏期展示は場所と期間を変更して通常の館蔵品(考古資料)の代替展示を行うことができた。また冬期展示はほぼ計画どおりに実施することができたことは評価できる。 また、当館蔵の西宮山古墳出土の遺物及び兵庫県たつの市から借用の西宮山古墳出土品の調査に関して、当初計画通り整理作業を進めることができたことは評価できる。したがって、したがって、年度計画を達成したと判断した。天台展にかかる延暦寺所蔵考古資料の調査…次年度特別展覧会準備として、作品調査を行った。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に基づき、考古遺物の整理・調査によって展示を充実させ、3年度以降の展示計画を立てることができた。また、相互貸借事業の計画・準備を着実に進め、3年度以降の平常展示計画を策定すると共に、名品ギャラリーの拡充に関する準備を行うことができた。将来の特別展に関わる作品の調査を行い、その準備を進めることができた。 以上の実績より中期計画を達成したと判断し、B評価とした。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 特集展示・特別企画に関連する調査研究		
【事業概要】2年度名品ギャラリーの一環として開催される以下の特集展示・特別企画のために調査研究を実施し、その成果を展示及び関連事業を通じて公開した。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 尾野善裕
【主な成果】			
(1) 文化財保存修理所開所 40 周年記念 特別企画「文化財修理の最先端」(12 月 19 日～3 年 1 月 31 日) - 元年度までの調査研究成果や図録・文献等による情報をもとに、展示手法や内容を深化させた。7～12 月初旬にかけて、文化財保存修理所において 装演文化財の修理に関する 各種の作業及び使用材料を実見・調査した。 - 展示、刊行図録及び土曜講座により研究成果を公開した。 (2) 仏教美術研究上野記念財団設立 50 周年記念 特別企画「新聞人のまなざしー上野有竹と日中書画の名品ー」(3 年 2 月 2 日～3 月 7 日) 3 年 2 月 1 日に展示室において、「漢書楊雄伝巻第五十七」の調査を実施した。 - 展示及び土曜講座「上野家の贈り物ー上野コレクションと上野記念財団ー」(3 年 2 月 20 日) により研究成果を公開した。 (3) 日本書記成立 1300 年記念 特集展示「国宝『日本書記』と東アジアの古典籍」(3 年 2 月 4 日～28 日) 3 年 2 月 3 日に展示室において、「新撰類林抄巻第四残巻」の調査を実施した。 - 展示及び土曜講座「2 つの国宝『日本書記』」により研究成果を公開した。 (4) 特集展示「雛まつりと人形」(3 年 2 月 9 日～3 月 7 日) 3 年 1 月から 2 月にかけて、収蔵庫において、御殿かざり雛の調査を実施した。 - 展示により研究成果を公開した。			
【備考】			
(1) 関連事業：文化財保存修理所開所 40 周年記念シンポジウム「文化財修理のいま、むかし」(12 月 19 日 参加者 100 名) 関連講座：「日本の文化財修理 120 年」(3 年 1 月 23 日 参加者 100 人) 刊行物：『文化財保存修理所開所 40 周年記念 特別企画 文化財修理の最先端』解説付き図版目録 新聞掲載：京都新聞「特別企画 文化財修理の最先端」12 月 18 日付、読売新聞「紡ぐプロジェクト」3 年 1 月 7 日付 (2) 関連事業：仏教美術研究上野記念財団 50 周年冊子（仮称）の監修を行った。			



「雛まつりと人形」展示風景



「雛まつりと人形」展示風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響により展示に変更はあったものの、(1)は、我が国の文化財修理事業におけるコア施設として40年の歴史を有する当館保存修理所の事業と、当館研究員の持つ修理への豊富な知見を包括的に展示紹介する初の機会となった。美術史上名高い作品を展示素材として、特別展とさほど遜色ない規模で独自色の強い展示を作ることができた。 また、装演・彫刻文化財修理の専門用語や基本工程等に関する情報を日・英・中・韓の4言語表記で掲載した、国内外における日本の文化財修理の基礎文献となり得る図版目録の作成、シンポジウムや各種の講演事業、新聞紙面での内容紹介等と併せ、文化財の保護と活用に不可欠な修理に関心の高まる昨今の需要に大きく応えることができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	名品ギャラリーの一環として開催される特別企画や特集展示は、干支や「雛まつりと人形」などの毎年恒例の展示と、記念展示やテーマ展示などの時宜に適ったもの年度ごとに計画し、実施している。 新型コロナウイルスの影響による変更は一部あったものの、中期計画期間を通じて、概ね予定していた調査研究を実施し、展示及び関連事業に反映することができた。 次期中期計画においても、本中期計画期間と同様に計画的に調査研究を進め、展示や関連事業に反映していく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	カ 考古相互貸借及び特集展示「丑づくし」にかかる調査研究(4)-①-1)		
【事業概要】 考古資料相互活用促進事業の実施に併せて、貸借資料等の調査研究を実施した。			
【担当部課】	学芸部考古室	【プロジェクト責任者】	特任研究員 宮川禎一 研究員 古谷毅
【主な成果】 2年度考古資料相互活用促進事業(以下、考古相互貸借)として、大分県立歴史博物館、福岡県立九州歴史資料館、大阪府高槻市立今城塚古代歴史館と考古資料の相互交換による展示を行い、併せて以下の貸借資料の共同研究を行った。 ・当館借用資料 X線 CT 調査 3 件 (京都国立博物館、11 月 17 日～18 日) 大分県立歴史博物館所蔵品 2 件 (金銅仏、須恵器) 高槻市立今城塚古代歴史博物館 1 件 (弥生土器) ・当館貸与資料撮影・実測調査(大分県立歴史博物館、12 月 1 日～2 日)			
また、考古相互貸借の列品活用準備のために当館の西宮山古墳出土資料の修理を実施した際に、修理前後の撮影を行い、列品画像の整備を行った。また、展示のために借用資料にクリーニング等の応急修理を実施した際に撮影を行うことで借用資料の画像収集にも努めた。 なお、本事業に伴う列品整理(接合等)・修理(強化・復原等)の成果を安全に維持・保管するために、文化財用保存用木箱の作製と燻蒸を行った。			
西宮山古墳出土 須恵器(上) 土師器(下) (修理前・修理後)			
【備考】 1)当館での成果公開 ・名品ギャラリー・特別公開「九州と近畿の弥生・古墳時代-弥生土器の成立と埴輪・須恵器-」 (夏期(※):6件・6月22日～7月4日[12日間]、冬期:43件・12月19日～3年2月28日[56日間]) ※6月29日～9月13日を予定していたが、新型コロナウイルスの影響で会期を変更した。 ・新春特集展示「丑づくしー干支を愛でるー」(12月19日～3年1月31日)でも借用資料の一部を展示 ・土曜講座「牛と日本人」(3年1月16日) ・土曜講座「九州と近畿の弥生・古墳時代-弥生土器の成立と埴輪・須恵器-」(3年2月13日) 2)列品貸与:28件(大分県立歴史博物館:16件、福岡県立九州歴史資料館:6件、高槻市立今城塚古代歴史館:6件) 3)修理・保管関係[列品整備] ・列品修理:3件(須恵器) ・文化財保管用木箱製作:20 ケース			



西宮山古墳出土 須恵器(上)
土師器(下)
(修理前・修理後)



年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当該の考古相互貸借事業は、新型コロナウイルスの影響を受けつつも、年度計画の目標のとおりほぼ実施できたことは評価できる。本事業は当館の考古平常展示場の質を高め、埴輪や弥生土器の展示が多くの人々の来館者の興味を引いた点が重要であり、貸与先である大分県・福岡県・高槻市での作品の展示公開は、里帰り考古資料に関する地元メディアを中心とした関心を喚起し、広く文化財に関する認識を高めることができた。したがって、年度計画を達成できたと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	考古相互貸借は、中期計画期間中途からの新規事業であったが、元年度に引き続き大分・福岡・大阪府高槻市から借用した考古資料の調査を行い、展示に活用・活性化できたことは評価できる。 2年度の考古相互貸借事業の状況を踏まえて、3年度においては愛媛県・徳島県・大阪府柏原市との相互貸借事業の実現に向けて作業を進める予定である。また、将来的な充実に向けて当館の考古遺物の調査及び修復作業を着実に進める。西日本の府県を中心に相互貸借事業を進めるという当該の実施状況としては堅実であり、中期計画期間を通じ、目標を達成できた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ア 復元模写制作に伴う仏教絵画の調査研究((4)-①-1)		
【事業概要】 仏教絵画の制作当初の姿を復元的に描く模写制作に際し、現状では変色や剥落によって肉眼の観察のみでは判別できなくなっている料絹・料紙や顔料などの素材について、事前に高精細デジタルカメラや蛍光エックス線分析器等を用いた光学的調査を入念に実施し、そこで得られたデータを模写制作に活用・公開する			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 2年度は新型コロナウイルスの流行のため、8月末まで外部職員・学生を受け入れての調査はかなり制限されたが、下記の成果を挙げることができた。			
(1) 愛知県立芸術大学が進める吉備大臣入唐絵巻復元模写制作の基礎資料を提供するために、同時代作品である信貴山縁起絵巻の料紙調査を実施した(7月27日)。調査にあたっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－研究・資料編－』の成果を参照した。 (2) 東京藝術大学大学院生による信貴山縁起絵巻模写制作のため、同絵巻山崎長者巻の原本熟覧及び手板色合わせ等の調査を1度実施した(9月24日)。同模写制作にあたっては、東京文化財研究所と当館の共同研究報告書『朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻調査研究報告書－光学調査編－』『同報告書－研究・資料編－』の成果に基づき使用する顔料の検討を重ねた。			
【備考】 調査回数：2回(7月27日：愛知県立芸術大学調査、9月24日：東京藝術大学調査) 調査作品数：2件(信貴山縁起絵巻山崎長者巻1巻、信貴山縁起絵巻尼公巻1巻)			



愛知県立芸術大学による信貴山縁起絵巻料紙調査

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの流行のため、5月に計画していた調査が中止になるなどの計画変更はあったものの、愛知県立芸術大学・東京藝術大学による復元模写制作のため、平安絵巻作品の熟覧・色合わせ等の作品調査の実施とともに、当館が撮影した高精細カラー画像・近赤外線画像及び当館と東京文化財研究所との共同研究による光学的調査の成果を提供した。その結果、平安絵巻の復元模写の精度の飛躍的な向上が可能となり、模写制作を通じて得られた当該文化財の顔料・基底材等の知見を蓄積することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画最終年度にあたる2年度は、吉備大臣入唐絵巻及び信貴山縁起絵巻という平安絵巻を代表する名品について復元模写を制作し、愛知県立芸術大学及び東京藝術大学とともに精度の高い光学的調査・熟覧を実施し、その成果に基づいて研究会等を重ねながら彩色・料紙等の復元的考察を加え、着実に復元模写制作に寄与することができた。中期計画期間を通し、芸術系大学による復元模写制作に積極的に寄与しつつ、調査を通じて得られた文化財の基礎情報を蓄積できたため、中期計画の目標は達成できたといえる。こうした取り組みを次期中期計画でも継続し、模写制作やその前提となる調査を通じて得られる基礎情報を蓄積していくことで、絵画作品を中心とする文化財の素材研究に大きく寄与することが期待できるだろう。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 イ 古代の写経と聖教に関する基礎的研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】我が国には、寺院を中心に古代の写経や聖教が数多く伝来している。それは、人文科学全般にとって重要な研究資料であるが、たとえば文学作品や歴史書、古文書などに比較すると、仏教学以外の分野での資料としての利用が低調である。本研究は、当館の主要な蔵品である古代の写経と聖教を基軸に、文化財学的な立場から資料を調査し、多分野での利用に堪える基本情報の提示を目指すものである。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 野尻忠
【主な成果】 (1) 写経の調査 ・ 當麻寺（奈良県葛城市）所蔵経巻の調査会（会場：奈良文化財研究所）に、職員3人が参加した（8月7日・12日・14日）。調査の過程で、今回対象の一群の経巻は、院政期（12世紀）の書写であることが分かった。 ・ 当館寄託で個人蔵の「法華経一品経（久能寺経）薬草喻品第五」を、材料科学の専門家とともに調査した。使用されている絵具のうち、界線に使用されている金色は、蛍光X線分析の結果、真鍮であることが確かめられた。 ・ 某寺所蔵の「仏名経」を調査し、奥書にある「安元元年」銘が当初のものであること、よって本品が平安時代（安元元年は1175年）の貴重な写経遺品であることが判明した。 (2) 聖教の調査 ・ 談山神社より寄託の「談山神社本殿造営図並所用具図」12面のうち6面を、建築史学や中世史学の専門家とともに調査した（6月15日）。 ・ 仁和寺聖教調査（文化庁主宰）に職員3人が参加した（7月29～31日、3月24～26日）。 ・ 館蔵の「浄蔵法師伝」につき、古代史学の専門家とともに調査した。国立歴史民俗博物館所蔵写本との文字の異同等が指摘された（11月6日）。 ・ 館蔵の「華嚴経十重唯識瑞鑑記 巻第四」を仏教史学の専門家と調査し、僚巻に関する重要な情報を得るとともに、紙背文書の位置づけについて、さらなる検討が必要であることが分かった（12月25日）。 (3) 紙素材文化財一般の調査 ・ 興国寺（和歌山県由良町）より寄託の「興国寺文書」について、和歌山県の地域史に詳しい専門家とともに調査し、至一なる僧の活動について議論を深めた（9月2日）。 ・ 個人蔵の「八島廃寺伽藍絵図」を実見する機会があり（9月4日）、奈良の地域に縁の深い文化財と捉え、周辺史料を含めて調査した。 (4) 研究成果の開示 ・ 上記の調査や、元年度までに蓄積された研究の成果は、個別に摘記した事項に反映されたほか、平常展の展示解説（題箋）、「第72回正倉院展」や特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」といった展覧会の図録、それに会場パネル等で公表した。			
【備考】 ・ 野尻忠「奈良国立博物館所蔵『華嚴経』巻第七十（紫紙金字）について」（小口雅史編『古代東アジア史料論』、同成社、6月30日）等の論文4件で、研究成果を発表。			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度も、展覧事業の合い間を縫い、機会を捉えて古代・中世の写経や聖教を調査し、基本情報を収集することができた。某寺所蔵「仏名経」のように、思わぬところから平安時代の写経が見出される一方、国宝に指定され著名な「法華経一品経」でも、使用材料について新たな知見が得られるなど、日常的な文化財調査は多彩な成果を上げていく。他分野の専門家から意見を伺う機会も多く設けており、研究の進展に有効である。研究成果の公表も4件と堅調。他方で、30年度から着手している金字経の研究については、2年度は積極的に識者を呼んだり、調査に赴いたりすることができなかったため、本格的な研究は3年度以降に持ち越しとなった。以上を総合的に判断し左の評価とする。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	有形文化財の調査と研究は、順調に実施できた。調査により得られた知見は、展示会場や出版物における解説文等に反映できている。中期計画に掲げる調査・研究成果の展覧事業への反映については、着実に実施できたと言える。従来、書道史の分野以外では研究対象になりにくかった写経、あるいは全般に注目度の低かった聖教は、近年、たとえば歴史学等においても研究資料としての重要性が認識されるようになってきている。この方向性を堅持し、さらに関心を高め、原品の保管環境への理解を深めていくことが当館の使命であり、そのためにも、調査と研究の成果は積極的に公表する必要がある。次期も現在の体制を継続し、さらに充実させていかなければならない。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ウ 仏教工芸・上代工芸の総合的調査 ((4)-①-1)		
【事業概要】 仏教工芸及び日本上代工芸の総合的な調査・研究を行い、成果を公表する。対象は館蔵品、寄託品、一時預かり品をはじめ、展覧会等に際して借用した作品、他の機関、社寺等が所蔵する作品にも及ぶ。また、展覧会の出品候補となる作品や、当館のある奈良周辺の文化財など、各所の文化財についても積極的に調査を実施し、基礎情報の蓄積に励む。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 内藤 栄
【主な成果】 2 年度は新型コロナウイルスの流行のため館外での調査、外部職員を受け入れての調査はかなり制限されたが、下記の成果を挙げることができた。 (1)館蔵品・寄託品の調査 ・寄託品の国宝・天寿国繡帳（奈良・中宮寺所蔵）、藤田美術館所蔵の古代製の染料調査を、宮内庁正倉院事務所職員の協力を得て実施した。（3 年 1 月 15 日） (2)調査報告 ・科学研究費助成事業（基盤研究 C）「染織技法による仏像」における調査報告、考察を、奈良国立博物館研究紀要に発表した。（7 月） (3)共同研究 ・共同研究「聖衆来迎寺所蔵重要文化財鍔銅三具足の制作技法に関する研究」（福井県立一乗朝倉氏遺跡資料館との共同研究）に関わる調査において、元年度の光学調査の成果を実物と対照させる作業を行った。3 年 2 月 16 日） ・奈良県教育委員会より調査依頼を受けた當麻寺西塔発見舍利容器について、教育委員会担当者との共著で論考を発表した。（12 月） (4)展覧会に合わせた調査 ・よみがえる正倉院宝物展に出陳される作品調査を実施した。（4 月） (5)経常調査・その他の調査 ・修理寄託中の文化財について X 線 CT 撮影、写真撮影、顕微鏡調査を実施した。修理中の刺繍善導大師像（當麻寺念仏院所蔵）の材料について、奈良県立橿原考古学研究所研究員を招いて調査を行った。（12 月） ・寄託品の金工品について X 線 CT 撮影を行った。（8 月、12 月）			
 修理中の刺繍善導大師像裏面 （當麻寺念仏院）			
【備考】 ・客員研究員・調査員による調査 6 回実施した。			



修理中の刺繍善導大師像裏面
（當麻寺念仏院）

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの流行により館外調査は実施できなかったが、所蔵品と寄託品の調査・研究に関しては充実した。また、以前調査を行い報告されていない分をまとめて報告した。 研究成果の報告のうち、古代染織の染料に関する報告は近年の新しい調査方法が開発されたために実現できたもので、最新の科学調査である。今後、館外にある作例に関しても情報を蓄積することで、興味深いデータを得ることができると期待される。 また、共同研究「聖衆来迎寺所蔵重要文化財鍔銅三具足の制作技法に関する研究」は 3D 画像撮影を利用した複製制作事業であり、今後の博物館資料の方向性を考える上で重要な意味を持っていると考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の最終年度として、順調に調査を実施し、成果報告も行うことができた。この 5 年間の研究は、X 線 CT 撮影など最新の科学調査が導入された点に大きな特徴がある。この調査は館外からの依頼に応じて実施することもあり、国立機関としての役割を果たすことができた。調査の成果は専門家向けの論文に留まらず、展覧会で公表することに努め、博物館活動に対する一般の興味を喚起することに貢献した。また、資料の収集や寄託品受入にも活用し、当館のコレクション充実にも直結した。以上から、所期の目標を達成していると判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 エ 墳墓出土品の調査研究 (4)-①-1)		
【事業概要】 当館蔵の墳墓出土品の学術調査を通じて展示活用や研究発信に貢献する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画室長 吉澤悟
【主な成果】 (1)大和天神山古墳出土品の調査 元年度に引き続き、大和天神山古墳（奈良県天理市）出土品（銅鏡 23 面、当館蔵、重要文化財）の調査を行ったが、新型コロナウイルスの影響により実測等の実働を伴う作業は見合わせた。その代わり、本調査と連動する島根大学法文学部岩本崇氏の科研費研究「器物の『伝世・長期保有』『復古再生』の実証的研究と倭における王権の形成・維持」において、リモートによる研究会を開催し、古墳時代の遺物の長期・短期間伝世の問題を検討した。 (2)珠城山古墳出土品の再検討 珠城山古墳（奈良県桜井市）から出土した馬具や土器・埴輪類（当館蔵）は、6 世紀の大和王権の伸張や物資流通を考える上で極めて重要であり、近年類例の発見により研究者の注目を集めている。発掘調査後 50 年を経て、新たな位置づけが必要なため、当品に強い関心をもつ研究者を集め、再実測、再整理を始めた。作業環境に配慮しながら、事前打ち合わせを含めて 3 回の検討会・整理作業を行った。 (3)行基墓誌断片の調査の論考作成 元年度に東大寺で開催された第 18 回ザ・グレートブッダ・シンポジウム「東大寺と行基菩薩」にて発表した内容をもとに、新たな知見も加えた論考を作成した。 (4)忍性五輪塔出土品の調査 鎌倉時代の律僧、忍性の遺骨は三分され、鎌倉・極楽寺、大和・額安寺、同・竹林寺にそれぞれ納められた。今回は大和の二つの忍性墓から発見された骨蔵器の詳細な調査を行った。なかでも X 線 CT スキャン調査によって骨蔵器の高台部に隠された未知の銘文を発見するなど、大きな成果が得られた。当館研究紀要にその報告を行い、さらに名品展にて成果の一部を公開した。			
			
忍性骨蔵器の展示（手前に調査成果を提示） 当館 名品展（2 年 12 月～）にて			
【備考】 成果発表は以下の通り ・吉澤悟「行基墓誌断片からみた「行基集団」について」『ザ・グレートブッダ・シンポジウム論集第 18 号』法蔵館 12 月 25 日発行 ・吉澤悟「二つの忍性骨蔵器—大和・額安寺と同・竹林寺出土の銅製骨蔵器の調査—」『鹿園雑集』第 22 号 奈良国立博物館 7 月 31 日発行			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館所蔵品及び寄託品の墳墓出土品に関して、古墳時代から中世まで幅広く、積極的な調査・研究を進めることができた。特に古墳出土品の調査に関しては、館外の専門家たちとの連携を取りながら遺物の再実測・再検討を行い、報告書を発行してきた過去の実績（『五條猫塚古墳の研究』当館、27 年）にならうものであり、将来的に大きな成果が期待される。また、忍性骨蔵器の研究は、新たに発見した銘文の解釈をめぐって専門家の議論が俟たれるところである。関連調査を継続しており、3 年度以降にも成果を発表して行く予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通し、当館の所蔵品・寄託品を中心に積極的に調査・整理を行い、研究発表会や報告書、展覧会等でその成果を発信することができた。中期計画の最終年度である 2 年度は、特に仏教的墳墓資料の調査に力を注ぎ、新発見を含む大きな研究成果を挙げた。以上から、所期の目標を達成していると判断した。次期中期期間においては、これまでの実績を踏まえ、さらに調査対象を広げ、研究基盤の拡充を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧会事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 オ 南都の古代・中世の彫刻に関する調査研究 ((4)-①-1)		
【事業概要】 展覧会開催に際して借用した作品や館蔵・寄託作品、また館外の寺社等の作品のなかから、南都地域（奈良市及びその周辺地域）伝来もしくは南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品を選び、詳細な調書の作成とデジタル高精細画像の写真撮影やX線CTスキャン調査を通じ、データの収集・蓄積を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 岩井共二
【主な成果】 (1)館内外において多数の作品の調査・撮影を行った。作品名は下記のとおり。 (2)調査を通じて重要な学術的知見を得ることができた。 (3)特別展や名品展における図録の解説や題箋の執筆、講座等における報告、また論文等刊行物のかたちで新発見の発表を行った。一部については、3年度の刊行物に発表する。 [作品名] 峰定寺阿弥陀三尊像（5月21日）／大智寺文殊菩薩像（6月1日）／成福寺聖徳太子立像（6月5日）／浄土寺阿弥陀如来立像（7月10日）／法隆寺上御堂釈迦三尊像（7月16日）／東大寺文殊菩薩騎獅像（8月6日）／見徳寺薬師如来坐像（8月12日）／金竜寺菩薩立像（8月12日）／法起寺如来立像（9月1日）／両讃寺薬師如来立像（9月26日）／館蔵蔵王権現立像（9月29日）／館蔵仏像背板（9月29日）／金剛寺阿弥陀如来坐像（10月5日）／個人蔵阿弥陀如来立像（10月5日）／法隆寺薬師如来坐像（金堂）（11月5日）／法隆寺四天王立像（金堂）（11月5日）／藤田美術館伎楽面（11月6日）／藤田美術館菩薩立像（興福寺千体仏）（11月6日）／十市町自治会地藏菩薩立像（11月18日）／法隆寺観音菩薩立像（救世観音）（11月25日～27日）／金峯山寺金剛力士立像（12月7日～2月1日）／玉峰寺薬師如来坐像（12月10日）／談山神社背男立像（12月14日）／聖林寺十一面観音立像（12月24日）／法隆寺五重塔塔本塑像（3年3月1日）			
【備考】 成福寺、法隆寺、見徳寺所蔵の彫刻調査の成果及び撮影写真は、3年度開催の「聖徳太子1400年遠忌記念 特別展 聖徳太子と法隆寺」（3年4月27日～6月20日）の図録や会場パネル等の作品解説で公開する予定。金竜寺、金峯山寺、金剛寺、玉峰寺所蔵の彫刻調査結果については、『なら仏像館 名品図録 2021』（3年2月刊行）にその成果を紹介した。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	調査の成果は、3年度開催の特別展の展示解説などに反映させるための貴重な資料の集積となった。調査方法は、実測、撮影、3D計測、X線CTスキャンなど多岐にわたる。また、これらの調査には、展覧会輸送の事前点検も含まれ、文化財の安全な活用に資する成果を多分に含んでおり、3年度の特別展、特別陳列のみならず、講座等にも反映させることができる。特に、成福寺、法隆寺、見徳寺所蔵の彫刻調査の成果及び撮影写真は、3年度開催の「聖徳太子1400年遠忌記念 特別展 聖徳太子と法隆寺」（3年4月27日～6月20日）の図録や会場パネル等の作品解説で公開ができる予定である。 2年度前半は新型コロナウイルスの影響により、調査の延期や中止があったが、最終的には所期の目標を上回る成果が得られたといえる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画期間を通じ、南都に伝来しない南都と関わりの深い古代・中世の彫刻作品について、調書の作成や記録写真の撮影、X線CT等の光学的修法による調査を行い、データの収集・蓄積に十二分の成果をあげることができた。 特に、中期計画最終年度となる2年度は、新型コロナウイルスの影響により前半は事業が思うように進まなかったものの、大智寺文殊菩薩像については、名品展で公開し、リーフレットで調査研究の成果を公開することができた。また、像高5mに達する金峯山寺金剛力士像については、なら仏像館への搬入展示のために、像本体の綿密な調査と、展示台の設置方法について長期に渡り研究・検討を進めたため、彫刻分野における大型の文化財への安全性に配慮した展示活用ノウハウについて飛躍的に蓄積でき、実際に展示公開することができた。このように、中期計画の5年目として、研究成果の展示・公表・蓄積に着実に取り組んだといえる。 以上より、所期の目標を上回る成果をあげることができたため、A評価とした。 次期中期計画期間は、例年同様のペースで調査・撮影を進めつつ、新たな研究成果を発表できるよう努めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 カ 東京文化財研究所との共同による仏教美術の光学的調査研究 ((4)-①-1))
【事業概要】 東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づいて、当館が所蔵及び保管する仏教絵画を中心とする美術作品について、高精細デジタルカメラや蛍光X線分析器など最新の光学機器を用いた文化財調査を実施し、併せてデジタルコンテンツの作成を行うものである。上記の調査を通じて、色料や基底材など作品に用いられる素材の情報や、制作技法に関する情報、補彩・補絹など補修箇所に関する情報を大量・精緻に蓄積し、報告書等でその成果を広く公表することで、美術史的研究や将来の修理に資することも視野に入れている。	
【担当部課】	学芸部
【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 (1) 元年度末に刊行した共同研究の光学的調査に関連した報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－研究・資料編－』を国内外の大学・研究機関に頒布し、最新の研究成果を広く公開・共有した。 (2) 藤田美術館所蔵絵画作品の高精細デジタル画像撮影調査を合計7日間実施し、各作品の法量・銘文・所見等の基礎情報を蓄積し、目録作成に向けて準備を進めた。 (3) 奈良文化財研究所と「公益財団法人藤田美術館所蔵仏像彩画円柱」共同研究の覚書を交わし、藤田美術館所蔵仏像彩画円柱 3D計測を伴う光学的調査を合計4日間実施した。	
 藤田美術館所蔵絵画作品調査 (12月16日)	
【備考】 調査回数 藤田美術館絵画作品調査7回(10月5日、11月2日、12月15・16日、3月17・18・29日)、藤田美術館所蔵仏像彩画円柱調査4回(1月27日、2月3・4・17日) 調査作品数 合計125件 刊行物送付件数 『信貴山縁起絵巻調査研究報告書－研究・資料編－』400件(国内353機関、海外47機関)	

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	東京文化財研究所との共同研究「文化財の光学的調査と情報共有に関する基礎的調査研究」に基づく元年度末刊行の報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－研究・資料編－』を国内外の大学・研究機関に広く頒布した結果、最新の研究成果が高く評価された。また同共同研究の一環として藤田美術館所蔵絵画作品の全件について光学調査を着実に進め、基礎資料を着実に蓄積することができた。さらに奈良文化財研究所とも新たに共同研究の覚書を交わし、近年当館開催の特別展「国宝の殿堂藤田美術館展」で初公開された仏像彩画円柱について光学的調査を実施した。その成果は3年度以降に建築史的所見を盛り込んだ成果報告書にする予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通し、国立文化財機構内の他の研究機関と協力して調査等を着実に実施し、とりわけ16年度から協定を結んで進められてきた東京文化財研究所とは、継続して光学的調査を共同で進めた。特に、中期計画最終年度となる2年度においては、中期計画当初から東京文化財研究所と調査及び編集・刊行作業を進めていた平安絵巻に関する報告書を広く公開し、今後の平安絵巻研究に資する最新の成果を国内外の研究機関と共有することができた。また、東京文化財研究所・奈良文化財研究所との共同研究として藤田美術館絵画作品の全件調査を進め、美術史研究や建築史研究に資する基礎情報を蓄積することができた。以上から、中期計画の目標は十分に達成できたといえる。 次期中期計画においても、引き続き既に実施した調査成果の公開や、新規の調査対象について機構内の共同研究を継続し、更なる進展を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 キ 特別陳列「おん祭と春日信仰の美術 〔神鹿の造形〕」に関する調査研究 ((4) -①-1)		
【事業概要】 春日大社摂社若宮社の祭礼であるおん祭の歴史・伝統と、春日信仰に関連した美術作品を紹介する展覧会			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	列品室長 中川あや
【主な成果】 (1) 春日若宮御祭礼絵巻の全巻公開 本年は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、春日大社でのおん祭が規模を縮小しての実施となったことに鑑み、おん祭の祭礼の次第を詳細に伝える春日若宮御祭礼絵巻（江戸時代、春日大社蔵）の中下巻を広く展示し、あわせて上巻の全場面パネル展示を行うことで、近世の祭礼の全体像を体感できる展覧会とした。また、図録においても、出陳された中・下巻に関して、全場面の画像を掲載した。 (2) 未紹介作品の公開 本展に出陳された 45 件のうち、「春日鹿曼荼羅」（個人蔵）2 件、「神鹿鞍」（春日大社蔵）1 件については、展覧会における公開が初となる作品であり、図録への掲載も含め、本展を通じて広く紹介することができた。また、これらの作品については調査と写真撮影を行い、今後の研究に資するデータを蓄積することができた。 (3) 神鹿に関わる作品の収集 春日信仰に関連した美術作品として、神鹿を表した、または神鹿に関わる絵画作品、工芸作品を集めて紹介した。また、神鹿をテーマとした公開講座を開催し、春日信仰における神鹿の意味について発信する機会を設けた。 (4) (1) ～ (3) の観点を盛り込むことにより、2 年度の「おん祭と春日信仰の美術」展を、時代に即しつつ、過去の同展とは異なる、独自性の強い展覧会として結実させることができた。			
			
		(展示風景)	
【備考】 ・調査：春日大社 1 回 ・論文等：中川あや「おん祭と春日信仰の美術-特集 神鹿の造形-」（特別陳列『おん祭と春日信仰の美術』図録 展示概説、奈良国立博物館 12 月） ・特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」（12 月 8 日～3 年 1 月 17 日、奈良国立博物館東新館） ・公開講座「春日大社と神鹿の造形」（3 年 1 月 9 日）講師：渡邊亜祐香氏（春日大社国宝殿学芸員）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は春日大社の伝統行事「春日若宮おん祭」を、文化財を通じて紹介する例年の展覧会であるが、2年度は祭礼の規模縮小に即した展示内容とした。また、過去に公開履歴のない作品を複数出陳し、図録に掲載した画像や解説等を通じて、従来あまり知られていなかった文化財の存在や意義を広く公表することができた。さらに、例年の特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」の特集は祭礼の一部を取り上げたものが多かったが、2年度は春日信仰の美術における神鹿に焦点を当て、新たな視点で展覧会を構成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	特別陳列「おん祭と春日信仰の美術」は、平安時代以来の長い歴史を持ち、重要無形民俗文化財である「春日若宮おん祭」の歴史と、春日大社に対する信仰をあわせて紹介する展覧会で、毎年新たな切り口を見出し、展覧会を通じてその多様な魅力、歴史・文化における重要性を紹介してきた。当中期計画期間において、「奈良奉行所」「社家史料」「大宿所」「絵師」「神鹿」と多岐にわたる特集を通じ、おん祭と春日信仰に関する文化財の多角的な調査・研究を進め、公開につなげたため、中期計画を十分に遂行することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	1) 収蔵品・寄託品等及び各博物館の特色に応じた歴史・伝統文化に関連する調査研究 ク 特別陳列「帝国奈良博物館の誕生—設計図と工事録にみる建設の経緯—」に関する調査研究 (4)-①-1)		
【事業概要】 重要文化財 旧帝国奈良博物館本館の附として伝わる「内匠寮奈良博物館建築工事図面」ならびに宮内庁宮内公文書館が保管する『京都及奈良博物館建築工事録』に関する調査研究			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	情報サービス室長 宮崎幹子
【主な成果】 (1) 建築史研究者との協働による初めての全面的な調査 「内匠寮奈良博物館建築工事図面」について、建築史研究者（京都女子大学、東京工業大学）の協力を得て初めて悉皆的な調査が行われ、近代建築としての歴史的意義や技術的な創意工夫が明らかとなり、建築や史料の文化財的価値が再認識された。 (2) 博物館建設と誕生の過程の解明 『京都及奈良博物館建築工事録』の翻刻が行われ、建設の体制や工事の進捗などの歴史的な事実が多数判明した。 (3) 史料の初公開と図録の刊行。 上記の成果をふまえて特別陳列「帝国奈良博物館の誕生—設計図と工事録にみる建設の経緯—」を開催した。7件37点の出陳作品のうち、5件35件は初公開である。建築をテーマとする展覧会の開催は当館では初めての試みで独自性が高く、また図録には当館担当者と建築史研究者による論文を3本掲載し、展示と共に学術的にも高い評価を得た。会期中の入館者数は1万2千人を超え、コロナ禍に開催された展覧会としては高い水準に達したといえる。			
			
調査風景		展示風景	
【備考】 調査 奈良国立博物館9回、宮内庁1回、東京大学1回、奈良県立図書情報館1回 論文等 『帝国奈良博物館の誕生—設計図と工事録にみる建設の経緯—』奈良国立博物館、3年 特別陳列 「帝国奈良博物館の誕生—設計図と工事録にみる建設の経緯—」奈良国立博物館 3年2月6日～3月21日 公開講座等 宮崎幹子「ニコニコ美術館」3年3月8日放映（約2万人視聴） 宮崎幹子「帝国奈良博物館の誕生—一人と建築—」奈良国立博物館 3年3月13日（90名聴講）			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	設計図、工事録とともに近代建築史研究における重要史料だが、これまで詳しく紹介される機会が無く公開が俟たれていた。近代建築史ではこれまで様式研究が主体であり、材料や技術、工法、体制などの実態に即した研究は少なかった。今回の研究と展覧会の開催は、設計図と工事録、そして建築の実査にもとづいた極めて実践的なもので、成果の公表はこの分野における研究の進展に大きく寄与したといえる。また、当館の観覧者は仏教美術の愛好家が大半を占めているが、今回は建築史の大学研究室や建築系展覧会を開催する美術館・博物館にも積極的に広報し、新たな観覧者の獲得にも繋がった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき、中期的な視野に基づいたプロジェクトテーマを設定することができた。2年度の研究対象である重要文化財 旧帝国奈良博物館本館（現在のなら仏像館）は、日本近代建築の黎明期を代表する作品であり文化財的価値が高い。この建築をメインテーマとした研究を実施し、その成果として展覧会を開催することは、わが国の文化財の多様性を示し、価値の再評価へと繋げるもので、広く文化財保護の理念に通じるものである。また、今回の研究と展覧会の開催は、日頃の地道な研究が実を結ばせた点も評価でき、所期の目標を上回る成果を得られたといえる。ただし、会期とスペースの都合から、設計図全241枚のうち公開できた図面は33枚にとどまったため、今後も継続して調査を実施し、報告書の刊行や展覧会の開催などにより、全貌の公表に尽力したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア X線CT スキャナ等による文化財の構造技法解析に関する調査研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 X線CT スキャナ、3D デジタイザ等を使用し各種有形文化財の構造及び技法を調査し、その成果を展覧事業及び教育普及活動に資する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】			
(1) 展示関連作品の調査 展示のために借用した仏像、漆工品、考古資料等について、X線CT スキャナによる非破壊調査も同時に実施し、構造技法及び保存状態を確認した。徳川美術館所蔵「国宝 初音の調度」を調査した結果、木地には良質な一枚板が使用され、亀裂や虫損等は認められず健全な状態にあることが分かり、板の接合方法や布着の様式等が明らかになった。また、福岡県勝浦峯ノ畑古墳の大刀については、内部構造を捉えたCT画像をパネル上で実物と共に展示し、見比べることができるようにした。さらに、「国宝 観世音寺梵鐘」の3D デジタイザによる表面形状並びに蛍光 X線分析を実施し、製作技法の調査を行った。			
		梵鐘の調査風景	
(2) 3Dプリンタによるレプリカの製作 火焔型土器のX線CT データを利用して、断面が観察できるレプリカを3Dプリンタで製作した。このレプリカは、企画展「ならべてわかる本物のひみつ〜実物とレプリカ〜」にて、実物及びCT スキャン画像と併せて展示され、その製作技法が推定できるよう演出した。本展では、新型コロナウイルスの影響によりハンズ・オン展示は取り止めたものの、元年度に製作した阿弥陀如来坐像のレプリカ等も展示し、本事業の成果を一般に向け公開する大変良い機会となった。			
		レプリカを活用した展示風景	
【備考】			
・X線CT 調査件数 31 件、調査回数 259 回 ・3D デジタイザ調査件数 5 件、調査回数 15 回 ・論文等 渡辺祐基、川畑憲子、吉川美穂、木川りか「国宝『初音の調度』のうち乱箱、長文箱、短冊箱の構造・技法のX線CT 調査」『日本文化財科学会第 37 回大会研究発表要旨集』146-147 (9月) 大西智洋、渡辺祐基、當山綾乃「黒漆山水人物螺鈿細紙箱の修復報告」『浦添市美術館紀要』16号 (3年3月) 望月規史、齋部麻矢、田中麻美、和泉田絢子、渡辺祐基「『国宝 観世音寺梵鐘』調査報告」『東風西声』16号 (3年3月) 楠井隆志、渡辺祐基「長崎・聖福寺の関帝像」『東風西声』16号 (3年3月) 川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について (1) 文房具」『東風西声』16号 (3年3月) ・関連展覧会 企画展「ならべてわかる本物のひみつ〜実物とレプリカ〜」(9月8日〜11月23日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は、36件の文化財等の調査を実施し、保存状態及び構造技法に関する情報を得ることができた。さらに、これまでの調査で得られた知見を学会発表や論文を通じて発表し、その成果をパネルやレプリカ製作を通じて展示に活用した。本事業で製作したレプリカが、当館におけるユニバーサル・ミュージアムの取り組みの一環として有効活用されたことは特筆に値する。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業では、中期期間を通し、各種文化財のX線CTスキャナ等を用いた調査研究を実施し、材質や構造技法に関する多量のデータを蓄積してきた。中期計画の最終年度である2年度には、研究の成果を多くの学会発表及び論文として発表するとともに、展示にも十分に活用し、新たな知見を広く発信したことで、中期計画を遂行することができた。 3年度以降も文化財の調査を積極的に実施していく。また、新型コロナウイルス感染防止対策の観点より、ハンズ・オン展示が困難なことから、レプリカ等の新たな活用方法も模索する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 近世キリスト教に関する研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 日本の近世（安土桃山時代から江戸時代まで）の時代性を特徴付けるキリスト教の日本伝来と禁教に関する作品の展示等を通じて、近世日本におけるキリスト教の歴史や信仰に関する研究成果を発信する。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	研究員 松浦晃佑
【主な成果】 (1) 展覧事業 29年度からの継続事業として、「キリスト教の伝来と禁教」というテーマで、キリスト教の日本伝来から明治時代にキリシタン高札が撤廃されるまでの歴史を、来館者がたどれるように作品展示を行った（4月1日～3年3月31日）。「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」がユネスコ世界文化遺産に登録されたことを受けて、元年度から通年展示とし、2年度も同様に通年展示した。来館者のさらなる満足と理解につながるように、2年度は解説パネルを充実した。 また、元年度に調査した「十字浮文軒平瓦」（福岡県久留米市埋蔵文化財センター所蔵）を2年度に展示公開した（6月2日～7月26日）。本資料は、久留米の城下町にキリスト教の教会が存在していたことをうかがわせる考古資料である。16世紀末から17世紀初頭のキリスト教の教会の様子を描いた銅版画や教会模型もあわせて展示したことで、キリシタンの文化や生活の様子を来館者に示すことができた。 (2) 研究成果の発信 研究論文「寛永十七年マカオ使節の嘆願書に関する一考察」下（『東風西声』16号（3年3月））を発表した。日本とマカオのポルトガル人との間の交易とキリシタン禁制の諸問題、そして日本・マカオ間の断交を取り上げ、近世日本の対外関係におけるキリシタン禁制を日本語史料と欧文史料から論じた。			
			
6月2日～7月26日までの展示風景と「十字浮文軒平瓦」の画像			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響により、2年度は資料調査が行えなかったが、元年度の調査を2年度の展示事業に反映できた。世界文化遺産登録により、日本のキリスト教の歴史や信仰のあり方に対する関心が世界的に高まっているが、来館者に近世日本のキリスト教の歴史を、作品展示を通じて紹介し、上記の動向に応えることができた。 また、研究論文を公表し、近世日本におけるキリスト教と対外との関係について、広く研究成果を発信できた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本事業は、近世日本の文化交流に大きな影響を与えたキリスト教の歴史について調査研究である。 中期計画期間内に近隣の機関や、キリスト教の遺物を有する他機関での調査を実施した。中期計画最終年度である2年度は計画に沿った展覧事業と研究成果の公表を通じて、本事業を広く一般に伝え、中期計画を遂行した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 高等学校が所蔵する歴史資料に関する研究 ((4) -①-1))		
【事業概要】 全国の高等学校には現在、構内遺跡出土品、発掘調査出土品等々、様々な来歴の考古資料が保管されている。高等学校所蔵考古資料の実態把握は、考古学研究上の重要性に加え、社会史的、教育史的意義を有する。しかしながら、考古学的知識を有する教職員の不足から、十分な管理、活用が行われているとはいえない状況にある。本研究は、高等学校所蔵考古資料の更なる活用に向けて調査を実施し、その成果を展示、教育普及活動等の博物館活動を通じて広く公開するとともに、高等学校と博物館の効果的な連携活動について研究するものである。			
【担当部課】	交流課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 今井涼子
【主な成果】 (1) 高等学校に対するアンケート調査 2年度は新型コロナウイルスの影響により、「全国高等学校歴史学フォーラム」の開催を中止した。毎年、歴史学フォーラムに参加される高等学校の先生方から高等学校の現状や先生方のお考えを聴取し、歴史学フォーラムのプログラムの参考としてきたが、2年度はそれが叶わなかったためアンケート調査を実施した。対象は、26年開催「全国高等学校考古学フォーラム」から元年開催「全国高等学校歴史学フォーラム」までの参加経験校13校で、11校から回答を得た。フォーラムに対する評価や要望を確認でき、大変有意義な調査となった。3年度からは歴史学フォーラム実施時にアンケート調査を実施し、改善に役立てる予定である。 併せて、26年、28年、30年に実施した「全国高等学校考古名品展」に所蔵資料を出品いただいた高等学校に対しても、アンケート調査を実施した。国立博物館での展覧会に出品したことの影響とその後の資料管理の状況を尋ねた。26校中、19校から回答を得た。アンケート結果から、展覧会が高等学校に及ぼした影響は限定的であったことが分かった。今後はアンケート結果を考慮し、考古資料をさらに活用していただけるよう、展覧会や博学連携事業を企画したい。 (2) 高等学校所蔵資料の調査 山口県立萩高等学校が所蔵する資料と学校の歴史を紹介する展覧会「萩校の秘宝」を視察した。(10月16日) 創立150周年を記念して高等学校と同窓会、地元の博物館が協力して開催したものである。展覧会に先立ち、在校生にこれら資料を紹介し実見する機会を設けており、非常によく練られた有意義な企画であった。今後の当館での博学連携事業の企画にあたり参考になる事例である。			
【備考】 「高等学校所在考古資料を活用した博学連携事業の実施について－九州国立博物館の事例を中心に－」『東風西声』第16号(3年3月31日)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は、新型コロナウイルスの影響により十分な活動を行うことができなかった反面、アンケート調査により客観的な意見を収集することができた。アンケート結果を材料に、引き続き高等学校との継続的な博学連携事業の実施方法を検討し、「全国高等学校歴史学フォーラム」に成果を反映させていく予定である。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。2年度は「全国高等学校歴史学フォーラム」を実施することができなかったが、アンケート調査と高等学校所蔵資料調査を実施した。新型コロナウイルスの影響を受けたものの、今中期全体を通して、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施できたことから、中期計画を概ね達成できたといえる。 今後、研究結果を取りまとめ、他機関でも参考にできるような形に整理する予定である。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ(1)「天神縁起の世界」ほか特集展示等に関連する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 特集展示「天神縁起の世界」(3年2月2日～3月28日)開催に向けて、各所への出陳交渉を進めるとともに作品調査・研究を進め、図録掲載のための新規撮影を実施する。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室長 森實久美子
【主な成果】 (1) 作品の調査研究 出陳作品の調査を行い、一部の作品は外部の研究者と共同調査を実施し、調査後には検討会を開いて作品についての理解を深めた。調査に際しては、安全な輸送と展示のため、作品の基本データを採るとともに状態の把握も行った。 (2) 作品の新規撮影 出陳作品のなかには本展が初出陳となる作品が含まれるほか、ポジフィルムしか画像を持たない作品がほとんどであった。図録に質の高い図版を掲載するため、また、博物館のデータ充実のため、事前に作品を集荷し、借用品全点について博物館内で新規撮影を行った。 (3) 図録及び展示環境の充実 図録、展示、広報について関係者で検討を重ねた。とりわけ図録については、詳細な場面解説や関連マップなどを充実させ、来館者の理解に資する内容を目指した。また展示についても、場面解説や年表などを掲出するほか、より見やすい題箋となるよう日本語だけでなく英語・中国語・韓国語の文字やレイアウトにも配慮したデザインとした。場面解説について、日本語はパネルにて掲出したが、展示スペースの問題から、英語・中国語・韓国語については冊子を作成して希望者が自由に持ち帰ることができるように配慮した。			
			
		福岡・北野天満宮での調査風景	
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新型コロナウイルスの感染拡大によって調査の実施時期は遅れたものの、当初の年度計画についてはおおむね順調に実行できた。出陳作品全点について調査し、研究を深めるとともに、輸送や展示にも万全を期すことができた。展示及び図録は、館内関係者や所蔵者とも協議をしながら快適な展示環境づくりを目指し、専門性に偏り過ぎない分かりやすさを重視した。出陳作品のなかには、近年見出され、発見時には新聞等のメディアでも取り上げられた作品が2点含まれる。社会的な関心も高い展覧会であり、最新の研究成果を盛り込んでわかりやすく公開するとともに、太宰府天満宮とも協同して広報の強化を図った。来場者からも好評であり、計画を上回る成果であった。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施し、それによって得られた成果を展示や図録に反映させることができた。本展は、天神縁起を取り上げた初めての展覧会であり、図録や展示においては最新の成果の発信にも努めた。太宰府天満宮に隣接して建つ当館にとって天神信仰は重要なテーマであり、来館者の関心も非常に高い。図録や展示においては、詳細な場面解説や関連マップなどを充実させ、来館者の理解に資する内容を目指し、展示環境についても専門性に偏り過ぎないように配慮した。その結果、来場者から好評であり、計画を上回る成果であったといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ(2) 特集展示「きゅーはく どうぶつえん」に関する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 特集展示「きゅーはく どうぶつえん」の開催に向けた、展示候補作品や関連展示、関連資料などの調査研究を行った。 本展は、時代や地域、文化財の垣根を越えて、動物の意匠を文化財に表現した作品を一堂に集めた展示企画である。当初設定した開催時期は4月～6月で、期間内にゴールデンウィークを含むことから、想定鑑賞年齢層を家族連れに設定し、子どもでも十分に鑑賞することができるよう配慮した展示構成とすることをテーマとして展示計画の策定を行った。 また、家族層が子供を連れて九州国立博物館に来館するためのきっかけをつくるため、「どうぶつ」に関連したいくつかのイベントを休日を中心に計画した。また、動物をふだんから診察している現役の獣医師に来館してもらい、獣医師の目から見て、文化財に表現された動物の意匠と実際の動物のすがたの差を解説してもらい、ミュージアムトークの特別編なども企画し、文化財に表現されたどうぶつのすがたの楽しさを知ってもらうよう意図した。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 小澤佳恵
【主な成果】 ・小学校低学年の児童が容易に鑑賞できるように、身長 120cm の来館者の目線を意識して、展示物の高さ設定を工夫した。成人の来館者からも一定の理解を得られた。 ・展示解説は、小学校低学年の児童が興味をもてるように平易かつ興味をそそる仕立てを工夫した。 ・展示企画を体感できるように、会場で実際の動物の鳴き声を音声で流す試みを行った。来館者には総じて好評であった。 ・新型コロナウイルスのため、会期が当初予定よりも2か月ほど遅れ、GW中の家族連れの来館促進はできなかった。 ・新型コロナウイルスの影響で、計画していたイベントがすべて中止になったため、これによるファミリー層の誘致がかなわなかった。 ・当初計画していたイベントのうち、獣医師と学芸員がどうぶつモチーフと実際の動物の差異を語るミュージアムトークの企画は、動画を撮影してYouTubeにて放映し、非常に好評を博した。再開館と合わせメディアに複数回取り上げられた。 ・家族連れも楽しめる展覧会という狙いについては、ある程度評価を得られたと考えられる。また、新型コロナウイルスの拡大の影響によって実施したミュージアムトークを動画で撮影してオンラインで公開するという新しい取り組みは、その後のミュージアムトーク動画の公開事業につながった。			
 ミュージアムトーク動画			
【備考】 ・展示手法に関する調査：1月31日(伊都国歴博)、2月4日(京博)、2月27日(太宰府天満宮宝物殿) ・作品調査(館外)：元年10月16日(東博)、12月12日(京博) ・メディア紹介：4月28日(KBCテレビ)、6月3日(LOVE FM)、雑誌『九州王国』6月号、雑誌『ファンファン福岡』6月12日号、朝日新聞福岡5月13日版、ほかケーブルステーション福岡で複数回番組放映あり ・ミュージアムトーク動画本数：3本、被視聴回数：延べ3,119回(3年3月31日現在)			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展では、文化財の時代や、ジャンルを超えた展示、子供連れを含むファミリー層への訴求力のある展示などが実現でき、概ね狙っていた成果を達成した。 新型コロナウイルスの拡大の影響を受け、イベントなどはほとんど実施できず、イベントを通じたファミリー層の誘致という目標は達成できなかった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画の最終年度として、計画に沿って展示手法等に関する調査研究を実施した。本展は、これまで当館ではあまり扱われていなかったテーマの展示企画である。また、アジアとの交流をテーマに掲げる当館として、地域を越えてアジア各地の動物意匠の作品を展示する試みは有意義なものであった。来場者からも好評いただき、歴史・伝統文化の理解促進に資する展示会となり、中期計画を達成したといえる。 新型コロナウイルス拡大のさなかの開催であり、来館者増に寄与することは難しい状況下にあったが、同様の企画を今後も継続的に立案・実施することで、従来の来館者層を拡大することを継続的に試みていくことが必要と考えられる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究
プロジェクト名称	エ(3) 特集展示「大宰府史跡指定 100 年記念・九州国立博物館開館 15 周年記念特集展示 筑紫の神と仏」に関する研究((4)-①-1))
【事業概要】 巨岩祭祀遺跡出土品の使用痕跡調査と文献史料に見られる「祭式」の統合分析研究の成果を基に、特集展示「大宰府史跡指定 100 年記念・九州国立博物館開館 15 周年記念特集展示 筑紫の神と仏」を開催した。展示及び図録を通じて、本研究の成果をより広く一般に公開した。	
【担当部課】	展示課
【プロジェクト責任者】	研究員 小嶋 篤
【主な成果】 (1) 調査研究 宗像・沖ノ島を代表とする古墳時代～平安時代の巨岩祭祀遺跡出土品の使用痕跡を調査し、『皇太神宮儀式帳』等で確認できる祭式と照合した。その結果、漠然と「祭祀遺物」と認識されてきた資料について、祭式におけるどのような所作に基づいて使用痕跡が残されてきたのかを峻別し、古代祭祀の具体像に肉薄することができた。また、巨岩祭祀の具体的所作がつかめたことで、記録保存調査されてきた祭祀遺構の一部に「神社」が含まれていることを明らかにし、官衙に付随する神社の存在を論証した。	
(2) 展覧会 本特集展示は5月19日～8月30日の開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染予防対策に伴う会期を変更し、6月2日～8月30日の開催となった。また、本期間中に予定していたミュージアムトーク、大宰府学研究連続講座はすべて中止となった。	
展示は「第1章 古墳と巨岩」、「第2章 社の姿と仏の教え」、「第3章 大宰府の太宰 観世音寺」、「第4章 大宰府の鬼門 宝満山」、「第5章 神・仏・人」の5章構成とし、大宰府史跡出土品を中心に全119件の文化財を陳列した。その特色は古墳時代・飛鳥時代・奈良時代という律令国家形成期における信仰の変遷を体系的に整理したことにある。とくに、巨岩祭祀遺跡出土品の使用痕跡調査と文献史料に見られる「祭式」の統合分析研究の成果を基に、巨岩祭祀と庭上祭祀（社殿建立）の時系列・連続性を、宗像・沖ノ島祭祀遺跡、後野・山ノ神前遺跡群、金武遺跡群の出土品の比較展示で示すよう努めた。また、本比較展示では祭式の具体的所作を視覚的に認識できるよう、イラストを利用することで、観覧者の理解補助を工夫した。あわせて、文化財の生きた姿、宗教空間を体感できるよう、国宝・観世音寺梵鐘の音色を現地鐘楼で収録し、高音質スピーカーを利用して展示台周囲で定期的に流し、臨場感ある展示を演出した。	
【備考】 ・展覧会図録『筑紫の神と仏』九州国立博物館、5月18日 ・会期中の文化交流展示室入場者数：15,646人 ・YouTube「kyuhakuchannel」にて動画2本（特集展示「筑紫の神と仏」ご紹介、特集展示「筑紫の神と仏」国宝梵鐘（観世音寺）展示作業）配信中。 ・新聞（特集記事）：朝日新聞7月15日朝刊、毎日新聞8月2日朝刊 ・雑誌『九州王国』『時代とともに変化してきた祈りの歴史』（7月号） ・テレビ番組：KBC「サワダデス。」（7月29日放送） ・beyond2020 プログラム事業 ・WEB掲載「ふくおかよかとこパスポート（ココシル福岡）」、「アソビュー」、「太宰府 EVENT」、「PRTIMES」、「culture NIPPON」、「おでかけナビ」、「ぐらんざ」、「ARTNE」、「福岡ふかばりメディア ささっと」、「ゆこゆこネット」、「じゃらん」、「トラベルニュース」、「福岡のニュース」、「FUKUOKA NOW」、「観光経済新聞」	



祭式のイラストと出土品を
組み合わせた比較展示



国宝・観世音寺梵鐘の展示状況

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は大宰府史跡指定100年記念を冠した特集展示であり、大宰府史跡の歴史的価値をひろく周知できるよう努めた。ただし、新型コロナウイルス感染予防対策のため、大宰府史跡指定100年記念事業の多くが中止・延期となっており、3年度以降の展示でも積極的な取り組みが求められる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に基づき調査研究を実施し、「祭祀遺物」として漠然と報告されていた資料について、緻密な資料観察による使用痕跡抽出を経て、「祭式」の中で位置づけることができた。このことにより、これまで関心が低かった有形文化財にも新たな光を当て、教育普及のさらなる展開を促すことができたことから、中期計画を上回る成果を上げたといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ(4) 特集展示「九州国立博物館開館 15 周年記念 特集展示 織物に魅せられて 加賀前田家伝来の名物裂」に関連する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 本展は九州国立博物館所蔵「前田家伝来名物裂帖」の修理完了を記念して開催された展示である。展示では、一部に科学研究費・若手研究「名物裂を中心とした日本伝世古渡裂の歴史的・技法的成立過程を探る研究」(20K12880) (研究代表者：九州国立博物館アソシエイトフェロー・桑原有寿子) の調査研究の成果を活用した。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	アソシエイトフェロー 桑原有寿子
【主な成果】 (1) 展覧事業 本展は12月1日～3年1月24日まで、染織品を中心とした87件の作品を展示した。九州国立博物館は元年度までの3年にわたって所蔵品の「前田家伝来名物裂帖」の修理を行った。本展はその完了記念の展示であり、出陳作品のうち36点は修理によって公開が可能となった。 展示にあたり、加賀前田家ゆかりの染織品を始めとした名物裂の出陳交渉及び調査を行った。これによって、前田家が染織品を蒐集した背景や、茶の湯の広まりとともに染織品を賞翫する文化が花開いたこと、名物裂の文化成立の背景には世界規模でおこった染織品の交流があり、対外交流の窓口であった九州が大きな役割を果たしたことを説明できる展示となった。 (2) 教育普及事業 新型コロナウイルス拡大の影響を受けて、予定していた講演会や研究会は中止されたが、名物裂の魅力を伝えるため、以下の教育普及事業を展開した。 ・ミュージアムトーク：3年1月5日「のぞいてみよう！織物の世界」(講師：桑原有寿子) ・九州大学人文学国際研究センター公開講座「東洋染織品の移動と変容」：3年1月23日「日本伝世古渡裂の歴史」(講師：桑原有寿子) ・ウェブサイトにおける展覧会紹介動画の公開 (3) 研究成果の発信 会場には修理の過程を紹介するパネルを設置し、修理事業によって文化財の保存と活用を可能になることを紹介した。 展示では科学研究費・若手研究「名物裂を中心とした日本伝世古渡裂の歴史的・技法的成立過程を探る研究」(20K12880) (研究代表者：九州国立博物館アソシエイトフェロー・桑原有寿子) の研究成果として、染織品の顕微鏡写真を展示した。また、借用した出陳作品及び館蔵作品の高精細スキャナ撮影や赤外線撮影を行い、データの収集を行った。 会期中には、NHK 福岡「はっけん TV」(3年1月8日放映) など、テレビや雑誌で取り上げられた。			
【備考】 ミュージアムトーク：1回(3年1月5日) 出張講座：1回(3年1月23日)			



展示会場の様子

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今回の展示で、初めて九博本「前田家伝来名物裂帖」の全ページ(うち一部は同時開催の関連展示にて展示)を公開することができた。また、文化交流の視点から「茶の湯の織物」が捉えられることを、視覚的にわかりやすく紹介できた。しかしながら、新型コロナウイルス拡大の影響により、予定していた教育普及事業及び調査が一部行えなかった。展覧会終了後も、調査及び研究成果の発表は継続して行う必要がある。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	本事業は、中期計画に沿って調査研究を行い、日本伝来の裂のみならず日本の名物裂に見られる金襴の素形とも言える中国・金代の金襴をあわせて展示することができた。また作品の解説も研究成果をもとに世界の織物史の中でどのように捉えられるかという視点から名物裂を紹介できた。これは当館の基本方針「日本とアジア諸地域等との文化交流を中心とした文化財について、収集、保存、管理、展示、調査研究、教育普及事業等を行う」を十分に満たし、中期計画を上回る成果となった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ(5) 特集展示「九州国立博物館 開館 15 周年記念特集展示 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館 蔵品巡回特別展 しきしまの大和へ 奈良大発掘」に関連する調査研究((4)-①-1))		
【事業概要】 本展示は、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の施設改修に伴う巡回特別展である。当館では開館 15 周年記念特集展示と合わせ、縄文時代～室町時代までの奈良・大和の歴史を、奈良県内の多岐にわたる発掘調査出土資料から紹介した。			
【担当部課】	展示課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 齋部麻矢
【主な成果】			
(1) 事前資料調査 巡回展開始前に各開催施設の担当者が集まり、合同で展示資料の調査を行った。資料の解釈や取り扱い、展示方法に注意が必要な資料については意見交換を行い、各施設に合わせた展示方法や解説を検討した。			
(2) 展覧事業 当館での会期は 7 月 28 日～12 月 20 日で、327 点の資料を展示した（所有者の都合により急遽 1 点返却したため、撤収後は実物大の写真パネルで代用）。我が国の国家形成と外来文化の観点からみた、Ⅰ）くにづくり前史、Ⅱ）王権誕生と外来要素、Ⅲ）国家形成と渡来文化、Ⅳ）古代国家成立と外交、Ⅴ）しきしまの大和ごろという 5 つのテーマを研究所が設定し、これに合わせて、関連展示室 2・3 室において展示を行った。当館は巡回 3 館目の実施であったが、他館より展示スペースが広いことから、全体の展示レイアウトは当館独自のものとした。併せて題箋やパネルについても既存データに加えて、橿原考古学研究所のこれまでの調査・研究成果も盛り込み、すべて新規で作成した。さらに展示期間が長いことから、開催中の来館者からの質問に対して回答するとともに、質問に則したイラストや解説の題箋・小パネルを追加展示し、随時アップデートを行った。			
(3) 活用事業 新型コロナウイルス感染予防対策のため、11・12 月に当館のシアターで短時間のミュージアムトークを行った。展示室では、出土遺跡の状況や、わかりやすい展示解説で理解を深めるため、写真データを橿原考古学研究所から新たに借用し、復元イラストも作成して多数のパネルを作成した。また、用途や意味がわかりづらい考古資料について、一般的にわかりやすい解説を心掛けた。この解説は当館 Twitter を活用して計 17 回配信し、好評を得た。九州では、奈良の地名や地形がわかりづらいため、出土地図をミニ解説とともに印刷し、展示室で配布した。図録では、巡回館はコラムの形で執筆に参加した。なお、企画段階では特別展「加耶」と同時期に開催し、両展示に関わるシンポジウムなどの開催を予定していたが、特別展延期により実施できなかった。			
【備考】 (1) 元年度資料調査：1 回（3 日間） 橿原考古学研究所附属博物館 新聞等掲載：西日本新聞（2 回）・朝日新聞・TVQ・ぐらんざ（フリーペーパー）ほか ミュージアムトーク：11 月 10 日（15 名）・12 月 8 日（18 名） (2) 出品件数 327 件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	日本の中心であった畿内の資料から、異文化交流と独自性の確立、国家形成の過程を紹介することができた。また、九州ではなかなか目にできない資料を紹介できた。一般的に地味な考古資料をパネルや写真、イラストを用いて各資料をわかりやすく解説した。当館ならではの展示が構築できた。ユニバーサルデザインを意識して「UDフォント」を初めて導入し、「読みやすい」との感想もいただいた。以上から、所期の目標を上回る成果を出すことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究を実施し、展覧事業によって広く一般に発信したことで、中期計画を上回る成果を出すことができた。 本展示は、九州と比較されがちな畿内の発掘資料を展示することで、一般的な興味を引くことができた。さらに当館のテーマの一つである「交流」を柱とした展示にもなった。展示全体を通して「親しみやすい・わかりやすい」イラストパネルと解説を作り、好評を得て、計画を上回る成果であった。 今後も特に一般の新規観覧者にも親しみやすい展示手法や解説を研究し、誰もが楽しみながら歴史に親しむことのできる企画へとつなげたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	オ 水中遺跡保護体制の整備充実に関する調査研究 ((4)-①-1))		
【事業概要】 本事業は、国内外における水中遺跡の調査手法等の検証を行い、その結果をもとに30年度から5年計画で実施される予定の『発掘調査のてびきー水中遺跡調査編ー』の作成に資することを目的とする。奈良文化財研究所は、作業部会・研究集会の実施と『てびき』作成に向けた検討、当館は、国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討、諸外国における水中遺跡保護に関する最新情報の収集、『てびき』に使用するイラスト制作に係る業務、当事業の目的と内容の周知を目的とした事業紹介パンフレットの作成等を行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉恵英
【主な成果】 2年度の事業は、①『発掘調査のてびきー水中遺跡調査編ー』の作成業務、②国内の水中遺跡の保存・活用手法及び整備充実のための体制整備に関する調査研究、③海外における水中遺跡の発掘調査等に関する最新情報の収集、の3課題に分けられる。 課題①：主に奈良文化財研究所が担当し、『てびき』の内容検討のため作業部会（協力者会議）を4回開き、12月に滋賀県で自治体職員・専門家へのヒアリング、3年2月に全国の自治体職員を対象とした研究集会「水中遺跡保護行政の実態Ⅲ」をオンラインにて開催した。当館は、『てびき』に使用する資料・写真等のアーカイブの作成やイラスト制作に係る調整等を行った。また、事業の目的と内容の周知を目指し、これまでの取組みと『てびき』の刊行を紹介するパンフレットを作成し、全国の地方公共団体等へ送付した。 課題②：当館が中心となり、国内の水中遺跡に関する保存・活用手法の検討を実施した。静岡県下田市沖合にてROV調査（アクセス困難な水中遺跡における発掘調査や潜水によらない水中遺跡の視認方法等の実証実験）を行い、同時にリアルタイムで映像を遠隔配信し、陸上で映像を視聴する方法について実証実験を実施した。 課題③：『てびき』を作成する上で参考となる資料として、水中遺跡や遺物の保全に関する書籍『Conservation of Marine Archaeological Objects』を翻訳した。その他、諸外国で実施されている水中遺跡の調査等に関する論文や書籍から最新情報を収集した。		 船上と陸上をつなぎリアルタイムで映像を確認している様子  事業紹介パンフレットの一部	
【備考】 文化庁の取組：水中遺跡調査検討委員会（2回）、協力者会議（4回）、研究集会・ポスター発表（1回）			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	①～③の課題について、新型コロナウイルスの影響により、当初の計画から実施場所等に変更が生じたものの、概ね予定通りに実施することができた。課題①：『てびき』の執筆を開始し、より充実した内容となるよう検討を重ね、イラスト制作にも取りかかることができた。課題②：下田市で水中遺跡調査の手法について検証し、課題を抽出できた。課題③：海外における水中遺跡や遺物の保全に関する情報を学び、国内における保存と管理の方法を精査することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当事業は、5か年計画で『てびき』の作成及び周知を進めている。1～2年目に調査・資料収集、3～4年目に執筆と刊行、最終年度は、『てびき』のプロモーションを主な業務として行う。2年度は、3年目にあたり、『てびき』の執筆を開始した。当機構が実施した調査等は、『てびき』の内容充実に貢献した。 『てびき』は、水中遺跡調査未経験の自治体職員を対象としているため、より平易な内容となるよう検討を重ねた。水中遺跡の調査と保護が喫緊の課題と捉えられていない現状を打開するためには、当事業の周知が重要であるという認識を共有した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	特別展「きもの KIMONO」に関連する調査研究		
【事業概要】 特別展「きもの KIMONO」は、800年以上を生き抜き、今なおあらたなファッション・シーンを繰り広げる「きもの」を、現代を生きる日本文化の象徴として展覧する、当館47年ぶりの染織の展覧会である。開催に際し、2年度は出品される作品を借用し調査するとともに、来館者にきものの歴史をわかりやすく理解できる展示を行った。また、新型コロナウイルス感染拡大のため講演会、国際シンポジウムが大講堂で行えなくなったため、ギャラリートーク、記録動画、国際シンポジウムパネリストによる口頭発表動画などを配信した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	学芸研究部調査研究課工芸室長 小山弓弦葉
【主な成果】 (1)調査概要 当館所蔵品及び国内外機関に所蔵される染織並びにきものが描かれた日本絵画を調査研究した。 共催者とともに、展覧会に出品される作品の借用・展示・撤収作業を行い、広報目的のギャラリートーク、研究記録としてのギャラリー内の記録動画を作成した。 共催者と共に、図録の再校を行った上で、3刷まで増刷した。 (2)調査の結果得られた知見 ・脆弱で伝存する数が少ない染織文化財の新たな価値付けを行った。 ・展覧会事業計画や文化財の復元制作などを通して、それらの文化財の有効な活用にも寄与した。 ・展覧会では、200件以上の染織文化財・日本絵画を展示し、日本人にとって現在も「衣服」であり続ける「きもの」の歴史をわかりやすく紹介し、さらに、伝統衣装、民族衣装としての「きもの」の未来像について考える機会となるように展示に工夫を凝らした。 (3)調査研究の成果 本展を通じて、日本染織における専門の博物館で調査することにより、染織に関する有意義な知見を得ることができた。また、染織文化財の復元を製作し、当時の女性や男性が着装する風俗を模した着付をマネキンに施し、江戸時代におけるきもの文化の理解を手助けした。これらの復元染織文化財は、今後の教育普及事業に有効に活用できる。 これまでの調査・研究によって得られた知見を反映した図録が、展覧会会期に合わせて発行された。			
【備考】 特別展「きもの KIMONO」は、2年4月14日（火）～6月7日（日）まで開催の予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大に伴う緊急事態宣言により会期を延期し、2年6月30日（火）～8月23日（日）までの開催となった。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	- 日本内外に所蔵される美術館・博物館や個人所蔵の染織コレクションを調査することによって、日本の伝統工芸である染織の美術的・民族的な知識や情報を深めることができた。 - 当館が所蔵する染織文化財2件、絵画作品1件を元に、その復元品を制作することによって、今後の教育普及事業である「着付け体験」などのワークショップにも有効に活用できる成果物があつた。 - 本展の実施にあたり、他所蔵者との調査研究の可能性が広がった。染織文化財を守り、後世に伝えていくために、2年度以降も相互の協力しながら、調査研究を深め、次の展覧会事業あるいは、教育普及事業につながるよう、より充実した調査研究を目指したい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は中期計画の最終年度として、特別展「きもの KIMONO」に関するバイリンガルによるギャラリートーク、記録動画、国際シンポジウム動画などの配信を通して国内外に発信し、中期計画に沿った事業を今中期計画期間全体を通して行うことができた。 - 当館においては、日本・東洋の伝統文化を紹介し、有形文化財を保護、活用するために、例年さまざまなテーマを設けて特別展事業を行っている。日本文化の特質である「工芸」に対する一般来館者のより深い理解を得るために、染織だけではなく、工芸他分野の展覧会についても計画を推進する。 - 今後開催される「工芸」の展覧会に向けて、列品を精査し、来館者が満足すると同時に、列品の調査研究も充実するような計画を立て、実行したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「皇室の名宝」に関する調査研究 (4) -①-2)		
【事業概要】 御即位記念特別展「皇室の名宝」実施に向けて調査研究を実施し、その成果を、展示・図録・会期中の講演会などを通して公開する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	企画・工芸室長 山川 暁
【主な成果】 皇室ゆかりの地である京都において開催する展覧会であることを踏まえ、宮廷文化に関連する作品及び文献調査を実施し、それらの成果を、展覧会図録や記念講演会などの場で発表した。具体的には、三の丸尚蔵館・書陵部・侍従職・京都事務所など宮内庁諸機関と連携し、障壁画などの調査及び新規撮影を実施し、その成果を「御所をめぐる色とかたち」というテーマにまとめ、展示を構成し、図録や講演にも反映した。 京都御所をめぐる文化の研究は、京都に所在する当館の重要な研究課題であり、このたびの宮内庁諸機関の研究者との共同研究を通して新たな知見を得るとともに、建築や有職を含めた研究の広がりを生み出す機会となった。			
【備考】 展覧会会期 10月10日～11月23日 展覧会図録の作成 多言語による展覧会鑑賞ガイドの作成 記念講演会6回			

京都御所内 障壁画撮影風景

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	令和の世の始まりにあたって、天皇の即位礼を筆頭に宮廷文化への関心が高まっている時期であり、展覧会を通して、即位礼の様相など近代以前の宮廷文化を紹介できたことは、時宜にかなった内容であった。 京都御所を中心とする宮廷文化の研究は、当館の重要な研究課題であり、これまでに蓄積してきた調査研究の成果を反映する場ともなった。作品の多くはすでに広く知られる名高いものであったが、それを宮廷という場で享受された品として捉えなおすことで、新たな観点を提示することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	京都文化を中心とした文化財の研究を掲げる当館では、中期計画期間中、宮廷文化に関連する調査研究を継続し、特集展示「皇室の御寺 泉涌寺」(28年)、特集展示「御所文化を受け継ぐ」(29年)、特集展示「初公開！天皇の即位図」(30年)、特集展示「京都御所障壁画紫宸殿」(元年)、特別展「皇室の名宝」(2年)と、その成果を展示に反映させてきた。中期計画最終年度である2年度に、その節目として、これまでの成果も反映しつつ、宮廷文化を取り上げた特別展を開催することができた意義は非常に大きく、中期計画期間全体として所期の目標を上回る成果をあげることができたといえる。 今後も引き続き宮廷文化の研究を継続し、その成果を展覧会などを通して社会に還元していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展「鑑真和上と戒律のあゆみ」に関する調査研究 ((4) -①-2)		
【事業概要】 日本の戒律文化に関する調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊
【主な成果】 3年春季特別展「鑑真和上と戒律のあゆみ」(3年3月27日～5月16日)にちなみ、日本の戒律文化に関する研究を行った。律宗、真言律宗、真言宗泉涌寺派、華嚴宗だけでなく、天台宗、天台真盛宗、真言宗、浄土宗、浄土真宗、日蓮法華宗、曹洞宗といった主要宗派を網羅する形で、総括性を持たせ、日本仏教通史の一側面を戒律という理想と社会現実との相剋という観点から研究した点に特色がある。鎌倉時代の戒律復興運動期が中心ではあったが、近世戒律運動に関しての調査も進み、槇尾山西明寺や大阪・高貴寺では、従来ほとんど紹介されていない作品の調査が実現し、展覧会に活かすことができた。			
【備考】 保存修理指導室長 大原嘉豊、調査・国際連携室長 呉孟晋、美術室研究員 上杉智英の研究員を中心に、西谷功 泉涌寺学芸員、大谷由香 龍谷大学准教授、岩井朋子 龍谷ミュージアム准教授を調査員として招聘し、共同研究を行った。 ・出品件数 160件(うち国宝13件、重要文化財63件、重要美術品3件) ・成果の公開(展示) 3年3月27日～5月16日(予定) ・成果の公開(刊行) 『凝然国師没後700年 特別展 鑑真和上と戒律のあゆみ』図版目録(3年3月27日刊行) ・成果の公開(講演) 上杉智英「律とは何か」(3年4月3日)ほか全5回予定			



慈雲巖上坐禅像
高貴寺所蔵

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	日本の戒律運動については、近年、日本史学を中心に律僧の活躍に焦点を当てた研究が進んでおり、本研究は時宜に叶った学界の要請にも応えるものである。特に、律僧の活動で算出された遺品を発掘・再調査することができ、特に近世戒律復興運動については、従来の研究が停滞していた分野でもあるが、それをかなり前進させることができた。また、共同研究を行い、展覧会成果に活かすことができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業等に関連する調査研究を実施した。 従来、研究が停滞していた分野においても調査を実施し、展覧会による成果の公開まで、順調に遂行できたと判断した。 特別展の展覧会期に併せて行われ、3年3月27日に開催を迎えるが、その調査研究の成果は展覧会図録に結実している。また、3年5月9日公益財団法人仏教美術研究上野記念財団主催による「日本における梵網経と菩薩戒思想の問題」と題するシンポジウムも予定している。この共同研究の成果をいかし、今後も継続的に研究会を行うことを予定している。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 第72回「正倉院展」に関する調査研究		
【事業概要】 特別展「第72回正倉院展」の開催に当たり、円滑かつ安全に展覧会を遂行し、最新の成果を広く国民に周知するため、当該年度に開催される宝物を含む宝物全般についての調査・研究、展示環境について調査・研究、観覧環境についての調査・研究、その他宝物の適切な輸送方法など、多角的に研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	学芸部長 内藤 栄
【主な成果】 (1)宝物についての調査・研究 ・宮内庁正倉院事務所の協力を得て、調書の閲覧をしたほか一部の宝物の実地調査を行った。 ・上記成果は展覧会図録に掲載される解説、論考(宝物寸描)、総論、会場での解説パネル、公開講座等に反映した。 (2)観覧券販売に関する検討 ・新型コロナウイルスの感染防止のため、昨年までの正倉院展の来館者数データ等に基づき来館者数の上限を決めた。その際、観客の動線、想定される滞在時間、混雑が懸念される場所を中心に検討した。 ・来館者数の上限に基づき、観覧券の販売方法を検討した。ネット予約を中心としながらも、ネットを使用しない方が購入できる方法を検討し、不公平感が生じないように配慮した。 (3)情報の発信 ・入館制限を実施するため観覧を希望してもできない場合があることを考慮し、展覧会場の様子を動画で発信する方法を検討した。 (4)展示環境に関する調査・研究 ・展覧会前に正倉院事務所職員と展示環境に関する検討会を実施し、当館の方針を説明した。 ・展覧会会期中、随時環境の報告を正倉院事務所に対して行い、終了後には塵埃の検査を実施した。 (5)その他 ・正倉院事務所職員と安全に輸送する方法を検討した。			
【備考】 ・宝物に関する内部検討会を2回実施した。 ・新たに執筆された解説文について、学芸部職員全員が参加する研究会で検討した。 ・公開講座 2回 鶴真美(正倉院事務所保存課保存科学室員)「正倉院の石葉とその素材」 内藤栄(当館学芸部長)「武器・武具の献納と薬物の献納について」			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの感染防止により入館者制限を実行し、入館者数は年度計画を下回る結果となった。しかし、入館券の販売方法、館内動線、ソーシャルディスタンスの確保などは成功した。また、入館者数を制限したことにより展示室の環境は例年以上に安定しており、今後正倉院展の入館者数の上限を考える上での指針を得ることができた。観覧者の満足度も高く、今後も正倉院展に人数制限を導入することを希望する意見が寄せられた。2年度は薬物といった疫病に関する宝物が出陳されたが、2回実施された公開講座で薬物について取り上げるなど、疫病に関する国民の関心が高まる中、一定の貢献を果たし得た。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画において宝物の調査・研究、観覧環境についての調査・研究を重点項目に据えている。宝物についての調査・研究は、正倉院展の開催に伴う宝物の実見や資料収集、宮内庁正倉院事務所による最新の研究を基礎にしている。中期計画期間を通し、調査・研究による成果を積み上げるとともに、その成果を展覧会会場でのパネルや解説、音声ガイド、図録、講演会等では着実に公表することができた。また、観覧環境の調査・研究についても、保存修理指導室員を中心に正倉院事務所職員と検討を重ね、年々の改善に繋げることができた。以上から、所期の目標は達成したといえる。 また、中期計画最終年度となる2年度は、新型コロナウイルスの影響により、予約制による観覧方法の導入、学術シンポジウムの中止など様々な制約が生じたが、開催自体が危ぶまれた正倉院展を無事開催し、成功裏に終了することができたことは高く評価できる。特に人数制限の効果で例年と比較して格段に環境が改善され、今後の正倉院展の入館者数を考える上で貴重なデータを得ることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展「奈良中宮寺の国宝」に関連する調査研究		
【事業概要】 特別展「奈良・中宮寺の国宝」(3年1月26日～3月21日)の実施にむけて、各所への出陳交渉ならびに、作品調査、研究を進め、展覧会の構成を構築する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	部長 小泉恵英
【主な成果】 (1) 出陳交渉 中宮寺の寺宝についての出陳交渉と平行して、東京国立博物館、法隆寺、大阪・野中寺、永青文庫、長崎・日本二十六聖人記念館などに出品交渉し、上代日本美術と古代の半跏思惟像の作品を充実させることができた。 (2) 調査研究 中宮寺の全面的な協力を得て、各寺宝を調査した。本尊については、状態調査とあわせて最適な展示環境を作るための照明実験等も実施した。近代文学において中宮寺本尊を称える文学作品を収集した。 (3) 成果の公開 調査成果は、展覧会図録、会場パネルに反映した。本展では、中宮寺の歴史とあわせて古代アジアの半跏思惟像を一堂に会し、さらに図録には中宮寺本尊について述べる近代文学作品を多数収録するなど、多様な側面から展覧会を構成した。			
			
中宮寺本尊の展示風景		「アジアの半跏思惟像と弥勒菩薩」の会場パネル	
【備考】 展覧会は、1) 古代の中宮寺、2) 中宮寺の再興、3) 門跡寺院としての中宮寺、4) 半跏思惟像と弥勒菩薩、5) 中宮寺憧憬の5章構成とした。図録では個別の作品解説の他、総論で「中宮寺の歴史」各論で「アジアの半跏思惟像と弥勒菩薩」を掲載した。			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本展は、中宮寺の歴史を時代毎に紹介するだけでなく、古代の日本で流行した半跏思惟像のルーツをアジア世界にたどった。半跏思惟像の古代の信仰について、弥勒菩薩とのつながりが深いことを示しながら、時代の経過とともにその信仰が変遷していくことを紹介した。 近代以後に、文化財の考え方が成立し、仏像などを美術品として愛好するようになる時代的な流れについても紹介し、あわせて中宮寺本尊を取り上げた文学作品も取り上げるなど、多角的に展覧会を構成した。 我が国でも屈指の人気を誇る中宮寺本尊の展示のため、展示空間や照明方法を入念に検討し、造形美を最大限に表現できるような空間を作り上げた。入館者の反応も極めて良好であった。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って有形文化財の展覧事業、教育普及活動等に関連する調査研究を実施した。2年度は、新型コロナウイルスの感染拡大により、予定されていた特別展4つのうち3つが中止となったが、本展は会期通り開催し、研究の成果を反映することができ、中期計画を遂行したといえる。 中宮寺の歴史に加えてアジアへの広がりを持たせた展示内容や、文学作品も取り入れた図録構成など、充実した内容となった。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 特別展「琉球展」に関連する調査研究((4)-①-2))		
【事業概要】 特別展「琉球展」(4年7月16日～9月4日)開催に向けて、各所への出陳交渉を進めるとともに作品調査・研究を進める。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	課長 原田あゆみ
【主な成果】 (1) 作品の調査研究 出陳予定作品の調査を東京国立博物館と共同で行った。外部の研究者と情報交換を行い、作品についての理解を深め、展覧会としてどのように紹介をしていくか、沖縄側の意見もうかがった。 調査に際しては、安全な輸送と展示のため、作品の基本データを採るとともに状態の把握に努めた。 (2) 研究資料の収集 作品の理解を深め、さらに最新の研究成果を知るために、図書のほか各地の報告書や研究会資料を収集した。			
			
首里城の現状と新出資料について調査の様子			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの感染拡大によって調査の実施時期は遅れたものの、当初の計画についてはおおむね順調に実行している。出陳作品について調査を行い、研究を深めるとともに、新たな研究成果の情報収集ができた。また、展覧会の内容構築には、沖縄の研究者や博物館関係者と共同で準備を進めている。社会的な関心も高い展覧会であり、最新の研究成果を盛り込んでわかりやすく公開できるよう、主催メディアとの連携強化を図っている。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施することができ、順調に中期計画を遂行できたといえる。 「琉球」の研究は当館にとって重要なテーマであり、今後これまでの成果を取りまとめつつ、並行して調査研究も継続し、展覧会では最新の研究成果を紹介するとともに、わかりやすい内容、展示を目指して準備を進めていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 特別展「最澄と天台宗のすべて」に関連する調査研究((4)-①-2)		
【事業概要】 最澄 1200 年遠忌を記念して開催する特別展「最澄と天台宗のすべて」(会期：4 年 2 月 8 日～3 月 21 日) 開催に向けて、出陳交渉を進めるとともに作品の調査研究を行い、来館者に天台宗や最澄について分かりやすく伝える展示や図録を目指す。			
【担当部課】	学芸部文化財課	【プロジェクト責任者】	資料登録室長 森實久美子
【主な成果】 (1) 出陳交渉及び調査 共催者とともに約 30 か所について出陳交渉を行った。出陳作品のうち滋賀・延暦寺や愛媛・等妙寺、福井・國神社などにおいて調査を実施した。また、共催者と、展示方法、図録構成、広報について協議した。 (2) 新規撮影 延暦寺、四天王寺、等妙寺等の所蔵品について、現地撮影あるいは先行借用のうえ京都国立博物館において撮影を行った。 (3) 成果の公開 延暦寺ではこれまで殆ど調査が行われてこなかった勅封唐櫃及び、その収納作品の調査を行い、新たな知見が得られた。展示で、その成果を作品とともに公開し、図録では他の作品も含めた詳細な作品解説や総論、コラムなどを掲載して天台宗に関わる美術の集大成とすべく検討を重ねた。			
【備考】 巡回会場：東京国立博物館 (3 年 10 月 12 日～11 月 21 日) 京都国立博物館 (4 年 4 月 12 日～5 月 22 日)			



滋賀・延暦寺での調査風景



滋賀・延暦寺での調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの感染拡大によって出陳交渉の進捗は遅れたものの、事業概要にある目的は順調に達成した。東京国立博物館を皮切りに当館、京都国立博物館と3館を巡回する本展は、最澄の1200年遠忌を記念する大規模な特別展であり、当館にとっては天台宗をテーマとする初めての展覧会でもある。最新の研究成果も取り入れながら、天台宗の歴史と美術を優品によってたどることができる本展は訴求力があり、一般の方のみならず学界にも寄与するものである。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を実施し、展覧会の準備を進めることができた。作品の出品交渉は2年度におおむね完了し、また並行して展示や図録、イベントについても検討を重ねることができたため、中期計画は順調に達成することができた。 今後、新型コロナウイルスの感染状況が不透明な中での大型展覧会として、展示方法やイベントの在り方などを工夫し、次期中期においても満足度の高い展示を目指して協議を続けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) -①-3) 文化財を活用した効果的な展示や、教育活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 各施設と協力して、レプリカやVR等先端技術を使った、文化財の活用についての調査・研究		
【事業概要】 文化財に親しむ機会の拡大を図ることを目的として、文化財のレプリカやVR等の先端技術及び、文化財の活用事例についての調査・研究を行った。それらの知見をもとに体験型展示等の活用事業を実施し、成果を一般に広く公開するとともに、その効果について検証した。			
【担当部課】	本部文化財活用センター	【プロジェクト責任者】	副センター長 小林牧
【主な成果】 (1) レプリカ制作やデジタルコンテンツ制作に関して優れた技術を持つ、企業・機関等や、それらを使ったコンテンツの公開、活用を行っている国内外の博物館・美術館の視察・インタビューを行った。 (2) 各施設と連携し、レプリカやデジタル技術を活用した体験型展示の実施や教育プログラムの開発・実施を行い、アンケートによる体験者への調査を行った。また、その成果を広く普及するため、「2019年度ぶんかつアウトリーチプログラム報告書」を刊行。 (3) ・キャノン株式会社、凸版印刷株式会社、シャープ株式会社との連携による共同研究プロジェクトを継続して実施した。また、東京国立博物館・NHKと「みんなの8K文化財」の共同研究プロジェクトを締結、NHKエンタープライズと「オンライン用コンテンツ制作事業」の共同研究プロジェクトを締結した。放送番組「誰もみたことのない8K文化財」(NHK・BS8K)として「舟木本 洛中洛外図(3年3月20日)」、「遮光器土偶」(3年3月20日)を制作・放映した。 ・東京国立博物館、KDDIとの共同プロジェクトで、5G、ARを活用したコンテンツ「5Gで文化財 国宝『聖徳太子絵伝』ARでたどる聖徳太子の生涯」を東京国立博物館法隆寺宝物館資料室にて実施し、延べ1,437人が体験した。 ・企画展示「なりきり日本美術館リターンズ」(10月27日～12月6日)を東京国立博物館本館特別4室特別5室で開催した。 ・東京国立博物館、凸版印刷株式会社と共催して、本館の一部をCGで再現する「バーチャルトーハク」(12月19日～3年2月28日)を公開した。			
【備考】 (1) 主な調査先／ソニー株式会社、チームラボ かみさまがすまう森(佐賀県武雄市)、京都市京セラ美術館ほか(松嶋雅人、高橋真作、小島有紀子、高木結美、松沼穂積、加納彩子)、国立工芸館(小林牧) (2) アンケート調査実施事業／高精細複製品によるあたらしい屏風体験「国宝 花下遊楽図屏風」(7月1日～2日)、日本文化紹介映像(7月1日～3年3月28日)、なりきり日本美術館リターンズ(10月27日～12月6日)、8Kで文化財「ふれる・まわせる名茶碗」(限定公開7月29日～8月2日、再公開11月10日～23日)、ぶんかつアウトリーチプログラム(2年度全11回実施) (3) シャープ株式会社との共同研究により制作した「8Kで文化財 ふれる・まわせる名茶碗」が「2020年度 グッドデザイン賞」および「グッドデザイン・ベスト100」(主催：公益財団法人日本デザイン振興会)を受賞。外部からも高い評価を得た。			



高精細複製品による新しい屏風体験



アウトリーチプログラムの様子



高精細複製品による新しい屏風体験



アウトリーチプログラムの様子

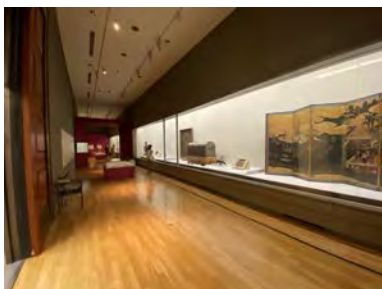
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度に引き続き、文化財に親しむ機会の拡大を目的として、国内における先進事例の調査・研究を行い、各施設や企業等との連携を強化しながら、文化財の新たな制作や鑑賞方法の開発を推進した。これらによって得た知見をもとに、体験型展示の企画・運営、教育プログラムの提供を行うことで成果を広く公開し、研究課題に関して一般市民への普及に貢献した。なお、海外の博物館における先端技術、展示等の視察は、2年度は中止した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿い、有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究を推進し、国内外(2年度は国内のみ)の各施設や企業等とも連携を締結、強化しながら、文化財に親しむ手法の開発に関する研究を重点的に行った。展示やシンポジウムの開催、教育プログラムの実施等においてその成果を広く公開し、中期計画を遂行できた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館環境デザインに関する調査研究		
【事業概要】 当館における文化財の展示／観覧環境のデザインについて調査・研究し、今後の展示／観覧環境のデザイン向上を目的として実施する。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	企画課デザイン室長 矢野 賀一
【主な成果】 ・「本館 13 室工芸展示改修」「博物館でアジアの旅」「親と子のギャラリー トーハク×びじゅチューン！『なりきり日本美術館リターンズ』『びじゅチューン！×OPAM なりきり日本美術館』『世界と出会った江戸美術』『まるごと日本美術体験』『イスラム展』（3 年度開催予定）」「博物館で初もうで」「本館 17 室保存修復」の展示デザインを行った。 ・「法隆寺百済観音像展示ケース解体移設作業」を行った。 ・「東京国立博物館ポスター」「総合文化展「日本美術の流れ」解説パネル」「特集展示サイン」「カフェのグラフィック」のデザインを行った。			
			
法隆寺展の展示ケース		なりきり日本美術館展示会場	
			
世界と出会った江戸美術展示会場			
【備考】 ・他館 の デザイン調査：これまでの国内外の博物館・美術館でのデザインを調査し、特に 2 年度においては総合文化展の展示デザインのための参考とした。 ・調査先／京都市京セラ美術館、竹中大工道具館、春日大社宝物館、アーティゾン美術館、東京都写真美術館、福田美術館、大倉集古館、国立工芸館			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	年度当初の目標を達成している。国内外の美術博物館デザインの最新事例を調査した成果を、総合文化展示及び特別展への展開することが達成されている。3年度は引き続き国内外の美術博物館デザインの調査を行う。また最新の情報技術など、本館の総合文化展示や展示室のスマート化などへ展開できるよう調査研究を進める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期全体を通して、本館13室で工芸作品を展示するため、高透過低反射合せガラスや小型LED照明器具を用いた展示ケースをデザインし、無線操作が可能な高演色LEDスポットライトを導入するなど、観覧環境の向上につなげることができ、中期計画で策定した目標を達成した。 3年度以降は展示室のスマート化の調査研究及び本館リニューアルのデザインを進める予定である。

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館教育に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を豊かにすることを目的とした、博物館教育の理論と実践に関する調査研究を、教育普及事業の実践、参加者に対するアンケート、学校教員との研究会を通して行った。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 伊藤信二
【主な成果】 (1) 各種ワークショップ、スクールプログラム等は対面プログラムを避け、zoomを使用したオンラインワークショップや自由見学と組み合わせる事前視聴動画など、新規プログラムの開発とその運営に関する研究を行った。 (2) 日本文化体験プログラムを継続して実施した。2年度は、さまざまなタイプの日本文化体験ができる参加型展示として親と子のギャラリー「まるごと体験！日本の文化」(会期：3年1月19日～2月28日)を実施し、デジタルコンテンツや手でさわるハンズオン展示など、多様な角度から日本文化体験のあり方について検討、研究を行った。 (3) 障がい者に向けたプログラムの開発を目指した調査・研究を継続して行い、オンライン講演会、オンラインギャラリートークにおいて字幕やテロップなどの表記を実施した。 (3) ボランティア組織のマネジメント及びボランティアによる事業の開発等について調査・研究を行い、ボランティアに向けて、オンライン利用についての研修を行った。			
【備考】調査 (1) ワークショップ等における参加者アンケート調査 4回			



オンラインワークショップ

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	新型コロナウイルスの影響でほとんどの既存の教育プログラムが中止となったため、オンラインでのワークショップやイベントの開催、動画による作品解説の提供など、感染拡大防止と両立した新しい形態の教育普及プログラムを検討、実践した。オンラインワークショップでは、今までプログラムを提供することができなかった遠方の参加者にも体験していただくことができ、新たな来館者層の開拓につながった。そのため、所期の計画を上回る成果を上げたと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は新型コロナウイルスの感染拡大により、従来の手法からの変更を余儀なくされたが、そうした中においても、より幅広い来館者に向けた鑑賞支援プログラムの調査・研究と実践を目指した。 未就学児を対象としたキッズデーなど子どもを対象とした事業、オンラインでの講演会やギャラリートークにおける字幕やテロップの導入など障がい者を対象とした事業、感染対策を万全にとったうえでの日本文化体験の充実など、外国人を視野に入れた事業の調査・研究などを中期計画の最終年度として実施した。これらの取り組みは、新型コロナウイルス収束以後にも当館の重要なレガシーとなりうるものである。 以上により今中期計画期間全体を通して、中期計画を遂行できたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 凸版印刷と共同で実施するミュージアムシアターにおけるコンテンツの開発に関する調査研究		
【事業概要】 館蔵文化財のデジタルアーカイブを活用した、文化財の新たな公開・鑑賞手法を、凸版印刷株式会社と共同で研究する。			
【担当部課】	学芸企画部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	博物館情報課長 今井敦
【主な成果】 ・「風神雷神図のウラ 一夏秋草図に秘めた想い」を、7月1日～10月4日に公開した。 ・文化財活用センター企画担当課長・松嶋雅人が監修した新作コンテンツ「国宝 松林図屏風―乱世を生きた絵師・等伯―」を制作し、同作品が出品された特別展「桃山―天下人の100年」の会期を含む、10月7日～12月20日、3年1月2日～1月17日に公開した。 ・「洛中洛外図屏風 舟木本」を、3年1月20日より公開した。 ・新作コンテンツ「光琳が描いた小袖 重要文化財 白綾地秋草模様 尾形光琳筆」のために、修理前画像を撮影した。			
【備考】 ・新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、新作コンテンツ「国宝金堂―聖徳太子のこころ」は休演となった。			
			
「国宝 松林図屏風」撮影の様子			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・新型コロナウイルスの影響で一作品が休演を余儀なくされたが、既存のコンテンツの再演とともに、特別展と連動した新作コンテンツを公開することができ、所蔵品のデジタルアーカイブ蓄積の有用性を再確認できた。 ・「風神雷神図のウラ 一夏秋草図に秘めた想い」は、3,943名（定員充足率23%、新型コロナウイルス感染症対策のため、上演期間を通じて定員数を90席から48席に削減）の来場者があった。「国宝 松林図屏風―乱世を生きた絵師・等伯―」は、5,036名（定員充足率17.3%、新型コロナウイルス感染症対策のため、1月2日～3日、8日～17日は定員数を90席から48席に削減）の来場者があった。デジタルデータを活用した新たな鑑賞手法の有用性が立証された。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	・デジタルアーカイブのデータ取得に関する調査研究については、新たなデータ取得手法の確立を含め、着実な成果をあげることができ、中期計画の目標を達成できた。 ・新規データの取得による新作コンテンツの開発により、集客力のあるコンテンツを継続的に公開することができ、中期計画の目標を達成できた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ ICTを利用した博物館見学ガイドの開発に関する調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 来館者の鑑賞体験を深めることを目的とした日英中韓4ヶ国語による鑑賞支援アプリ「トーハクナビ」を開発し、ユーザー動向解析によりより豊かな鑑賞体験の創造に関する調査研究を行った。また、あわせて児童生徒のための鑑賞支援アプリ「学校版 トーハクナビ」を開発した。			
【担当部課】	学芸企画部博物館教育課	【プロジェクト責任者】	博物館教育課長 伊藤信二
【主な成果】 1)平成24年より提供してきた公式ガイドアプリ「トーハクナビ」(日英2言語対応)を、同名の新しいアプリ(日英中韓4言語対応)としてリニューアルした。 2)公式WEB(https://www.tnm.jp/)と国立博物館所蔵品統合検索システム ColBase(https://colbase.nich.go.jp/)との連携を行い、最新の展示情報や作品解説が常に更新される仕組みを整えた。 3)展示室内に設置したビーコンとシステムを連動させることで、来館者の操作を最小限にかつスムーズに解説を提供し、展示室内で特に注目すべき作品への理解の促進を図った。 4)これまでの外国人調査で特に人気の高かった「浮世絵」や、文章による解説だけでは理解が難しい「鏡」「自在置物」等について、直感的な操作でそのしるみを学ぶインタラクティブコンテンツを開発し、アプリに搭載した。 5)新たに200件弱の作品解説(日英中韓)を作成し、システムに追加した。また、既存の解説についてもネイティブスタッフや担当研究員と議論しながら精査を行い、質の向上に努めた。 6)27年4月より継続して「トーハクナビ」のユーザーログを集積。新たにアプリに搭載したGoogle Analyticsのデータ、展示室内のビーコンのログデータにより、より精度の高いデータを集積できるしるみを整えた。 7)学校団体で来館する児童・生徒を対象としたスクールプログラムの一環として、タブレット端末によるアプリ「学校版トーハクナビ」も、あわせてリニューアルを行った。ただし新型コロナウイルスの影響によるスクールプログラム受入れ中止に伴い、「学校版トーハクナビ」の貸出は行われなかった。 8)ICTを利用した博物館ガイドについて、他館への情報提供や意見交換を行った。			
主館 (日本文物)  老猿  老猿 列第: C-232 这是一尊右手拄着岩石瞻耷斜上方、左脚立起坐在岩石上的猿猴像。其左手握着藤笏，周围有羽毛散开，像是刚刚与猴进行了场激烈搏斗。其视线朝右方的空窗一望无际。雕造出一 トーハクナビ作品解説画面 (中国語)			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新しいシステムの開発により、長年課題であった、言語による解説数やデバイスの不均衡が改善され、頻繁な展示替えに対応しうる作品解説の提供が実現した。 アプリ「トーハクナビ」ユーザーの動向についてのデータを集積することができ、アプリの特性を活かし、インタラクティブコンテンツや、ビーコンによる作品検索など新たな鑑賞体験を提供することができた。 今後は、2年度開発したアプリとシステムをプラットフォームとし、より利便性の高い機能の搭載や、作品解説の充実を検討したい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	今中期計画期間全体を通して、これまでの蓄積してきたデータとノウハウを生かし、主に訪日外国人を対象とした鑑賞支援プログラムの開発を実現することができた。またこれまでのユーザー動向解析の方法に加え、展示室内のビーコンやアプリそのものからログデータを集積するしるみも整えた。2年度は館内での利用者数が限られていたため、3年度以降に大掛かりな調査を実施したい。 また、学校団体での来館者に対しては、「学校版トーハクナビ」の提供を再開したい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 博物館教育及びボランティアに関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】 本研究では、第一に、館内で活動するボランティア「京博ナビゲーター」を実例に、対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究を行った。第二に、「文化財に親しむ授業」で講師を務める大学生及び大学院生のボランティア「文化財ソムリエ」の育成に関する実践と研究を行った。第三に、感染症対策と博物館教育の両立に関する実践と研究を行った。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室主任研究員 水谷亜希
【主な成果】 1) 京博ナビゲーターの活動 ・京博ナビゲーター198 人の育成及び運営(感染症対策含む)にかかる調査研究 ・特別展開連ワークショップ「姿から見つける、私の好きな観音さま」の実践と研究(結果的にワークショップは中止となったため、「おたのしみコーナー」に変更) ・第1 期京博ナビゲーター(29 年度任期満了)への質問紙調査をもとに、元調査員と共同で論文を執筆・公開(1 件) ・「京博ナビゲーター活動記録 2014(平成 26)～2020(令和 2)年」(1 回・2,000 部)の発行 2) 文化財に親しむ授業 ・文化財ソムリエ 18 人の育成にかかる調査研究(スクーリング・20 回) ・「文化財に親しむ授業」(6 回・304 人)の実践と研究 ・「記者体験in京都国立博物館」(京都市教育委員会主催)(1回・135人)の実践と研究 ・教員による複製を活用した授業の支援と分析(3 回・183 人) 3) ・感染症対策に関する他館の活動調査(オンラインや電話による情報収集、近隣館の視察) ・「姿から見つける、私の好きな観音さま」七観音オリジナルぬりえ(7 種類・40,000 部)の発行 ・特別展開連鑑賞ガイド「宮廷文化ことはじめ」(日本語 56,000 部・英語 4,200 部・中国語 700 部・韓国語 700 部)の発行 ・特別展開連鑑賞ガイド「戒律と鑑真さん」(日本語 45,000 部・英語 1,500 部・中国語 500 部・韓国語 500 部)の発行 ・子ども向けリーフレット「京都国立博物館へようこそ」(1 回・5,000 部)の発行 ・名品ギャラリー ジュニア版音声ガイド(日本語・英語・中国語・韓国語 各 24 本)の作成			
【備考】 本研究を踏まえた事業の実績については、処理番号 1311B1、1311B2、1312B も参照。 1) 科学研究費助成事業「対話とハンズ・オン教材を組み合わせた博物館教育の実践と研究」6 年計画(研究代表者の育児休業のため 2 年延長)の 5 年目 論文：水谷亜希・鳥賀陽梨沙「京都国立博物館におけるボランティア活動の展開とその意義—京博ナビゲーター—」『学叢』第 42 号、京都国立博物館、6 月			



京博ナビゲーター
活動記録

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	京博ナビゲーターについては、新型コロナウイルスの影響により館内での活動が全て中止となったが、情報収集や計画の見直しをすることで、活動について再考するきっかけになり、また従来の「ハンズ・オン」「対話」の重要性について再認識する機会にもなった。京博ナビゲーターの協力を得て作成した論文や活動記録の冊子は、当館・他館の今後の活動の参考になるものと位置づけている。文化財ソムリエ育成については、2年度は授業内容の全面リニューアルを目指したことにより、文化財ソムリエが主体的に議論し、授業案を作成することができた。 感染症対策と博物館教育の両立については、前述の活動に加え、個人で楽しむことのできる教育コンテンツ(ぬりえ・特別展開連鑑賞ガイド・ジュニア版音声ガイド)や、オンラインでの情報発信(動画)を新規に実践し、さらには4言語で展開することで、対象を拡大することができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
S	今中期全体を通して、「京博ナビゲーター」の活動に関しては、新規事業としてミュージアム・カートへの教材追加、資料の多言語化、ポータルサイトの運用開始、論文や記録集の作成・公開を行い、「文化財に親しむ授業」に関しては、高精細複製の教材追加、近隣他県への複製貸出、ICOM関連イベントの実施等を新たに行った。その他、子ども向け特集展示、ジュニア版音声ガイド作成等を新規に行い、中期計画を大幅に上回る成果をあげることができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究		
プロジェクト名称	ア 歴史、伝統文化の教育普及に資するための調査研究 ((4)-①-3))		
【事業概要】 奈良を中心とした寺社の歴史や伝統文化に関連する教育普及コンテンツを制作し、学習の機会を提供するとともに、オンライン形式でボランティア活動を推進し、新たな形で地域学習の展開を図る。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	教育室長 谷口耕生
【主な成果】 (1)奈良教育大学文化遺産教育専修・奈良教育大学大学院「地域と伝統文化」教育プログラムの学生と当館が連携する形で、特別陳列「おん祭」に関連する子ども向けワークショップの動画「紙コップで作ろう！鼓」と「動く！おん祭の絵巻」を制作し、一般に公開した。動画を制作するにあたり、Web 会議用アプリ Teams を利用する形式で検討を重ねた。 (2)オンライン主体とした形式でボランティア活動を推進し、オンライン形式で活動を進めることができる体制を整えた。オンライン形式で活動を進める体制を整備したことにより、展示案内・ワークショップの動画の制作や、オンライン中継形式による奈良の歴史や伝統文化を学ぶ世界遺産学習等、今後展開していく活動の足掛かりを築くことができた。			
【備考】 ・動画の再生回数「紙コップで作ろう！鼓」332回、「動く！おん祭の絵巻」396回 ・オンライン主体で推進しているボランティア活動の種類は計15種類			



ワークショップ動画「紙コップで作ろう！鼓」

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	オンラインシステムを活用しながら奈良教育大学と検討を重ね、「紙コップで作ろう！鼓」と「動く！おん祭の絵巻」の動画2本を制作することができた。また、オンライン形式によってボランティア活動を実践したことにより、新たな教育普及コンテンツを制作し展開していく足掛かりを築くことができた。今後も引き続き、オンラインコンテンツの制作やオンライン形式によるボランティア活動の展開を図り、教育普及事業の質を向上させる予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通し、奈良教育大学や奈良市教育委員会と連携し、教育プログラムの開発や、教育普及コンテンツの制作に尽力することができた。特に、中期計画最終年度にあたる2年度は、展示に関連するワークショップの動画を制作・公開したことにより、新型コロナウイルスの感染拡大により来館できない人々に対して学習の機会を提供することができた。また、従来は対面形式にて実施していたボランティア活動をオンライン形式でも行えるよう仕組みづくりを進めてきたことで、新型コロナウイルスの感染拡大の状況下においても、オンライン形式で世界遺産学習を継続して実施する体制を整えることができた。以上により、中期計画を遂行したと判断した。 次期中期においてもオンラインシステムを活用し、地域学習やアウトリーチ活動の一層の充実化を図りたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 特別展のテーマに則した解説パネル・冊子・ワークショップ等、観覧者の理解促進のための教育普及プログラムに関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】 特別展をよりわかりやすくするための教育普及プログラムを実施する。2年度は「古代エジプト展」及び「よみがえる正倉院宝物」のための準備を行った。			
【担当部課】	学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 西島亜木子
【主な成果】 ・「古代エジプト展」は新型コロナウイルスによる文化財輸送の影響や、感染予防対策の観点から当館での開催は中止となった。本展ではミイラが多数出品されることから、ミイラづくりのプロセスを体験するコーナー及びヒエログリフで名前を書く体験コーナーの設置を予定しており、実施に向けた準備を行った。体験コーナーの一つ、死者の臓器をカノボス壺に入れるコーナーで使用する臓器とカノボス壺を、監修の中野智章氏指導のもと制作した。 また、なじみのないエジプトの文化を紹介する解説パネルも制作することとなり、本展監修者に協力を得ながら原稿を作成した。会場に掲示予定であった「ヒエログリフ アルファベット表」とヒエログリフの解説は、当館ウェブサイトの「おうち de きゅーはく」に掲載した。 さらに、イベントの一つとして実施予定であった「ミイラづくりワークショップ」（講師：古代オリエント博物館職員）を視覚障がい者にも参加していただけるように、「視覚障がい者向けミイラづくりワークショップ」として古代オリエント博物館と共同で開発した。			
			
制作したカノボス壺		ヒエログリフ アルファベット対応表	
・特別展「よみがえる正倉院宝物」は、模造の意義をわかりやすく伝えるため、模造製作者の言葉や道具を紹介するコーナーを設置予定である。このコーナーで製作者の声を会場で流し、言葉の一部を掲示するため、制作者へのインタビューを実施し、制作時に使用した道具についてのヒアリングも行った。			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	新型コロナウイルスの影響により「古代エジプト展」は当館では開催されなかったが、制作したカノボス壺は今後文化交流展で活用予定である。会場に掲示予定であったヒエログリフの解説パネルは、当館が新型コロナウイルス感染予防対策として閉館中に開設したウェブサイト「おうち de きゅーはく」に掲載することで、活用できた。このページに関してのツイートに対する「いいね」は23,000件に及び、大変話題となった。これまで当館に来館したことがない層にもアピールできたといえる。また、「古代エジプト展」で開催予定であったファイアンスを作るワークショップは、今後文化交流展関連イベントとして開催する予定である。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って調査研究を行った。特別展の教育普及プログラムは、これまでのアンケート調査で高い評価を受けており、来館者の期待に答えることができていると言える。2年度は新たにウェブでの発信を行った。これまで来館がなかった層にもアピールでき、新たな来館者層の開拓につながった。また、元年度より新たに始めた視覚障がい者向けプログラムも高評価を得ており、今後の開催が期待されている。 以上のことから、中期計画における「教育普及に関する調査研究」のうち、特別展の教育普及について、充分達成できたと考える。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ①有形文化財の展覧事業・教育普及活動等に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化交流展示室における障がい者向け展示解説プログラムに関する調査研究 ((4) -①-3))		
【事業概要】 当館では、多様な方が博物館の楽しさを享受できるよう、元年度から手話通訳付きミュージアム・トークや特別展の視覚障がい者向け観覧ツアーなど、多岐にわたる取組を行っている。2年度は文化交流展示室でのユニバーサル・ミュージアムに向けた企画や手話通訳付きリモートバックヤードツアー、点字館内案内作成の取組を通して、博物館での合理的配慮をどのように行うべきか、当事者のヒアリング等も含めた研究を行った。			
【担当部課】	展示課 学芸部企画課	【プロジェクト責任者】	主任研究員 加藤小夜子 主任研究員 西島亜木子
(主な成果)			
(1) 文化交流展示室第7室企画展示「ならべてわかる本物のひみつ〜実物とレプリカ〜」 ・企画の際に福祉団体のイベント※1（元年12月7日）や国立視力障害センター（6月18日）でヒアリングを行い、展示にインクルーシブデザインの手法を取り入れた。（※1 福岡市民福祉プラザ みんなでふくし&ふくふくまつり） ・点字付きチラシや点字付きガイドブック（銅印「大宰之印」）を作成し、展示室内での配布に加えて福祉団体や特別支援学校等へ送付した。特に点字付きガイドブックについては、印面が分かるような盛り上げ加工を施したため、大きさや文字の形が分かりやすいと好評を得た。 ・点字付きのキャプション（白黒反転文字・UD フォント使用）台を設置し、白杖などの杖を置く器具を取り付けた。また、車椅子の来館者も利用しやすい台を選び、導線を確保した。 ・当初はハンズ・オンを予定していたが、新型コロナウイルスの影響により実施が難しくなった。そこで土器のレプリカの断面を展示することで作り方の想像につなげたり、銅鐸を鳴らす音から当時の人々に思いを馳せる投げかけを表示するなど、さわらなくても楽しめる企画へと変更した。			
(2) 文化交流展示室 視覚障がい者向け館内案内作製 本年度文化交流展示室のテーマ解説の点訳と触知図を掲載したリーフレットを作製した。白黒反転文字、UD フォントを取り入れ、音声コードも掲載している。また、色が見えにくい方のために専門家に意見を仰ぎ、各テーマの境目が分かりやすくなるような色の調整等を行った。主に特別対応の際のガイダンス、視覚特別支援学校の修学旅行の事前学習等で活用を予定している。			
(3) 手話通訳付きリモートバックヤードツアー 手話通訳付きバックヤードツアーをリモートで実施した（3月6日10:00～14:00～）。参加者24人中18人が県外からの参加、また聴覚障がいの方の参加は4人であった。事後のアンケートではバックヤードの見学やチャットで研究員とやりとりができたことが良かった点としてあげられ、展示室や免震層でも開催してほしいなどの要望も多かった。			
(4) 字幕付きウェブコンテンツ 自宅でワークショップなどを楽しめるウェブコンテンツ「おうち de きゅーはく」は、文化交流展の展示に関するコンテンツも制作しており、動画はすべて字幕を付け、聴覚障がい者にも楽しんでいただける内容とした。			
【備考】 ・「ならべてわかる本物のひみつ〜実物とレプリカ〜」会期中の文化交流展示室入場者数：21,536人 ・取材：(1)読売新聞(9月21日掲載) 日経新聞（11月17日掲載） ケーブルステーション福岡（9月16日放送） KBC ラジオ（10月27日放送） (3)NHK(3月6日放送) ・論文：茂泉千尋・加藤小夜子「コロナ禍におけるハンズ・オン展示とユニバーサル・ミュージアムの取り組み―九州国立博物館の事例から―」『東風西声』第16号、九州国立博物館、3年3月31日			



実物とレプリカの間にキャプション台を設置 点字付きガイドブック

年度計画に対する総合的評価

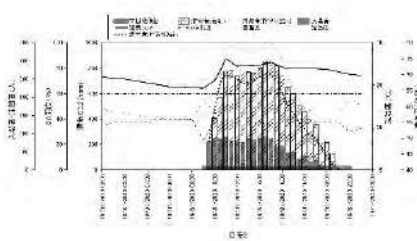
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	国立視力障害センターの利用者（視覚障がい者）からの、作品の「色・大きさ・材質」がわかると作品のイメージがしやすいとの意見があり、これを(1)の作品解説に取り入れたところ、晴眼者からも「材質や奥行き長さが分かり、より楽しめる」と好評を得た。インクルーシブデザインの手法を取り入れることは、結果的に子どもから高齢者まで年齢や国籍を問わず、また障がいの有無に関わらず「誰もが楽しめる博物館」へつながることを実感できた。また、2年度は視覚障がい者向け館内案内を作製することができた。3年度に向けてより効果的な活用方法を検討したい。

中期計画の実施状況の確認

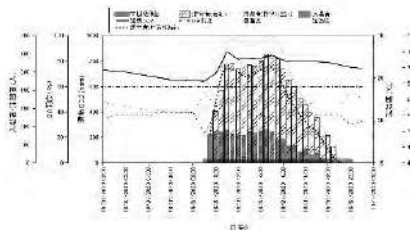
評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、毎年新たなユニバーサル・ミュージアムへの企画を実施し、多様な方への歴史・伝統文化の理解に資する展覧事業ができたことから計画を達成したいえる。 30年の障がい者による文化芸術活動の推進に関する法律の成立やオリンピック・パラリンピック開催に向けて、多様な方が博物館の楽しさを享受できるよう、より一層の配慮が求められる。博物館での合理的配慮はヒアリングなしには成立しない。今後も様々な機関や団体、学校などとの連携をさらに深め、ユニバーサル・ミュージアムへの取り組みを進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館の環境保存に関する調査研究		
【事業概要】 当館による文化財の活用に伴い保全の必要性が生じる、収蔵環境、展示環境、輸送環境について調査研究し、今後の環境の向上を目的として実施する事業。			
【担当部課】	学芸研究部保存修復課	【プロジェクト責任者】	保存修復課長 富坂賢
【主な成果】			
(1) 展示保存施設の環境に関する調査研究 新規の作品貸与予定先の施設を中心に、展示環境の調査を行った。その際に協議した、環境改善や環境維持についての共通する課題や取り組み事例を情報共有し、当館の環境保全についての有益な知見が得られた。			
(2) 地震波を受けた際の展示物の挙動に関する調査研究 想定を超える水平加速度をもつ地震波を受けた際の博物館用の免震装置がどのような挙動を示し、またそれを推定する方法について検証した。			
(3) 梱包資材の衝撃吸収特性に関する調査研究 文化財輸送に用いられる緩衝材について、衝撃試験によって衝撃吸収特性を計測し、適切な使用法について検証した。			
(4) 展示室内の換気と保存環境維持の両立を目指した調査研究 感染症対策の一環として、展示室内の換気と保存環境維持の両立を考慮しつつ、適切な収容可能人数の検証を行った。			
【備考】			
【調査先】 国立アイヌ民族博物館、秋田大学鉱業博物館、神戸市立博物館、陸前高田市立博物館、福島県文化財センター白河館、大阪府立狭山池博物館、北海道立近代美術館、新潟県立近代美術館、長崎歴史文化博物館			
【研究成果の学会発表・論文】			
・相川悠、和田浩「老朽化した収蔵施設における生物被害状況及びその対策の事例報告」文化財保存修復学会第42回大会、7月10日			
・黄川田翔、和田浩、他「想定を超える水平加速度をもつ地震波を受けた際の博物館用免震装置の挙動」日本文化財科学会第37回大会、9月5日			
・和田浩「資料の展示で用いられる支持具における保存と演出の両立に関する課題」教職課程センター紀要、第5号、p.41-45、12月1日			
・和田浩「美術品に用いられる包装資材の評価に関する現状と課題」日本包装技術協会北海道支部2020年度包装懇話会、11月25日			
・和田浩「展示室内の滞留者数と室内環境について」第39回日本展示学会研究大会、9月20日			



特別展開催時における入場者・滞留者・空調稼働状況・温湿度・換気状況の総合的な解析を実施した一例



特別展開催時における入場者・滞留者・空調稼働状況・温湿度・換気状況の総合的な解析を実施した一例

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の貸与予定先施設を中心に、現地に赴き調査をし、施設毎の状況に応じた実現可能な環境保全について双方で協議を続けた。こうした調査により当館に有益な知見が得られ、当館の環境評価と改善に関する調査研究へと進展させることができた。 博物館の防災に関する調査研究も新たなテーマに基づいて進め、博物館が今後想定しておくべき地震の規模についての考え方をまとめる基礎ができた。 また、従来手薄であった文化財梱包に用いられる資材の衝撃吸収特性について試験を重ね、特性把握のための手法を確立することに成功した。 以上に關する成果についても各種学会等で相応な数の研究発表を行うことができた。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	今中期計画期間全体を通して、収蔵環境、展示環境、輸送環境の3つの環境に対する調査研究をバランス良くかつ効果的に実施することができた。特に、輸送環境に関する研究は独自性が非常に高いものと評価できる。加えて博物館防災の観点から独自の研究課題を見出し、次期計画へと継続すべき内容を明確化し、得られる成果と効果についてある程度の予測を策定した。毎年度の研究成果は学会等の適切な場で発表公開し、様々な分野の研究者と協議しながら、研究内容をより高次元へ発展させることができた。 以上に示した成果のように、中期計画の目標を達成することができた。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 修復文化財に関する資料収集及び調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】文化財保存修理所で実施されている修復・模写文化財の資料収集及び調査研究を行う。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 大原嘉豊
【主な成果】			
(1)修復文化財情報の収集と調査			
・元年度に文化財保存修理所の工房に搬入された新規の修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理計画書」に基づき、137 件のデータを収集し、「修復文化財データベース」に登録した。			
・当館研究員により 1 回行った修理工房の巡回のほか、修理技術者とともに実施した科学調査を含む調査を適宜実施し、文化財の構造や使用材料、内部納入品・銘文調査など、修理中にのみ得られる情報を収集、分析した。			
(2)修復文化財情報の整理			
・30 年度に修理が完了し、搬出を終えた修復文化財に関して、修理工房より提出された「修理解説書(報告書)」に基づき、1,272 件のデータを「修復文化財データベース」上で更新し、整理作業を行った。			
(3)模写作成のための文化財の調査			
・当館と模写修理事業者(六法美術)による当館蔵「若狭国鎮守神人絵系図」の復元模写(5 か年計画)の 4 か年目として、欠失箇所の処置等について検討を開始した。			
(4)情報の公開と共有			
・29 年度に修理が完成した文化財 163 件に関する報告を『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 18 号(3 年 3 月 31 日発行)に掲載した。			
・修理時の調査により発見された銘文 28 件を「銘文集成」として同書に報告した。			
【備考】			
(1)データ収集件数 137 件、巡回回数 1 回			
(2)データベースの追加更新件数 1,272 件			
(4)報告書 1 冊(修理報告 163 件、銘文報告 28 件を含む)			

京都国立博物館
文化財保存修理所
修理報告書 18

京都国立博物館

『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 18 号

年表
十六年度

京都国立博物館
文化財保存修理所
修理報告書
18

京都国立博物館

『京都国立博物館文化財保存修理所修理報告書』第 18 号

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	文化財保存修理所で行われる文化財修理に係る情報については、紙ベースでの収集・整理を行うとともに、過去の情報から順次適及的にデジタル化を進めている。2年度は、新型コロナウイルスの影響もあったものの予定通りデジタル化を進め、さらに今後のデジタルデータの増量を見据え新たにサーバーの増設を行った。 「若狭国鎮守神人絵系図」(当館蔵)の復元模写事業は、具体的な欠失箇所の処置について検討を開始するなど5か年計画の4か年目として順調に進捗している。 また、特別企画「文化財修理の最先端」を開催し、近年の修理事業を通して得られた知見を広く公開することができた。さらに、その知見を盛り込んだ図録の刊行、シンポジウムの開催を通じて広く情報を発信したことは、年度計画を上回る成果であったといえる。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	中期計画に沿って、有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究活動の一環として、文化財保存修理所で実施されている修理・模写文化財の資料収集及び調査研究を行った。修理文化財の多寡自体は他律的要因により変動があるが、安定した件数で推移しており、資料収集を継続的に蓄積していくという中期計画の所期目標を上回る成果をあげることができた。 また、特別企画「文化財修理の最先端」の展示及び図録を通して、近年の修理事業から得られた知見を広く公開できたことは中期計画の最終年度を締めくくるに相応しい成果であったといえる。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財の製作・技法等に関わる材質構造調査・研究 ((4)-②-1)		
【事業概要】 博物館の展示・教育普及活動に関連する調査研究として、有形文化財の製作技術に関わる調査や材料等に関する調査を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存科学室 降幡順子
【主な成果】 (1) 特別展「聖地をたずねて」に関連する調査研究として「密教法具」(三室戸寺)の構造及び材質調査を実施し、鍍金、構造に関する情報を得ることができた。 (2) 特別展「皇室の名宝」に関連する調査研究として、「花手桶形引手」(宮内庁京都事務所)の構造及び材質調査、「悠紀主基図屏風」(館蔵品)の彩色材料調査を実施した。引手調査では、母材の材質、鍍金、修復箇所に関する情報を得ることができた。 (3) 名品ギャラリー「九州と近畿の弥生・古墳時代」(相互貸借事業)に関する調査研究として弥生土器、須恵器等の構造調査を実施し、土器製作技法に関する情報を得ることができた。 (4) 国・都道府県からの依頼を受入れた復元・修理事業に関わる事前調査及び共同調査等に係る非破壊分析調査を実施した。2年度は、考古、絵画、染織、金工品を対象に X 線 CT 撮像 4 件(7 点)、透過 X 線撮影 4 件(18 点)、蛍光 X 線分析(携帯型装置含む)11 件(79 点)、デジタル写真計測 1 件(1 点)を行い、展示・復元事業等の調査として、有用なデータを提供することができた。			
【備考】 (1) 学会発表等 ・降幡順子・LimaAugusta・山本文子「黄色上絵付顔料について—16 世紀後半から 20 世紀の日本と中国—」『文化財保存修復学会』、6 月 ・降幡順子・中屋菜緒・近藤無滴「社寺等における立体的な文化財資料の減災—シミュレーションを利用した転倒防止対策—」『日本文化財科学会』、9 月 (2) 論文等 ・井並林太郎・降幡順子、「佐竹本三十六歌仙絵 科学分析結果報告」、『学叢』42 号、京都国立博物館、pp.123-142、6 月 ・永島明子・池田素子・降幡順子、「平安時代の蒔絵箱三合について—宝相華迦陵頻伽蒔絵へい冊子箱(仁和寺蔵)・宝相華蒔絵宝珠箱(仁和寺蔵)・宝相華蒔絵経箱(延暦寺蔵)」、『学叢』42 号、京都国立博物館、pp.143-160、6 月 ・古谷毅・小山浩和・降幡順子、「鳥取県立博物館蔵宇部神社経塚出土経筒の科学的調査—X 線 CT・蛍光 X 線調査による構造および材質分析—」、『学叢』42 号、京都国立博物館、pp.113-122、6 月 ・神野恵・降幡順子・尾野善裕・大坪州一郎・本吉恵理子、「平城京出土須恵器の胎土分析」『奈良文化財研究所紀要 2020』、奈良文化財研究所、pp.186-189、9 月 ・降幡順子、「文化財修理に関わる科学調査」『文化財修理の最前線』、pp.7-8、12 月 ・降幡順子・古川史隆・田澤梓、「金勝寺所蔵 独鈷杵および五鈷杵の科学的調査報告」『研究紀要第 37 号』、滋賀県立琵琶湖文化館、pp.1-12、2 年 3 月			



調査風景



調査風景

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は、外部からの依頼による科学調査を含め、館蔵品・寄託品、展示に関わる科学分析調査の機会が増加し、成果を展示・復元事業等へ活用することで、社会への貢献を果たすことができた。また、研究を継続し、データの蓄積を図ることで、今後の文化財の非破壊分析への応用にも期待できる。これらの結果の一部は、学会、紀要等により広く公表することができた。3年度以降も調査研究の展示、復元・修理事業への活用と、調査成果の迅速な情報公開に努める。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画当初から年々収蔵品・寄託品の調査点数が増加し、研究成果の発信も増加させることができた。これまで修理等への情報提供が多かったが、今中期計画全体を通じて、展示事業等へ調査結果を活用する機会も増え、広報等への取組も実施することができたことから中期計画所期の目標を達成することができた。 次期中期計画においても調査研究の継続に努め、データを蓄積するとともに、より安全な科学調査の実施を目指した体制を整えるとともに、新たに教育活動への取り組みの充実を図る必要があると考えている。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 収蔵庫・展示室・ケース内部等における環境が文化財に与える影響などに関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 館内施設や設備（展示室・展示ケース・収蔵庫等）の環境が文化財に与える影響の調査・分析を目的としている。次の3点の調査を継続的に実施し、得たデータの分析と情報共有を行うことで保存環境の向上を図った。 (1) 温湿度センサーを用いた館内施設の温湿度調査 (2) 展示ケース内に浮遊する塵埃調査（電子顕微鏡を用いた塵埃の観察） (3) 文化財害虫トラップの設置及び回収			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 元年度に引き続き、展示室や展示ケースに設置した無線式温湿度センサーで24時間リアルタイムモニタリングを実施した。蓄積した温湿度データから、展覧会ごとに情報を整理し展示ケースの気密性向上に役立てた。収蔵庫についても元年度同様、温湿度データロガーとデジタル温湿度計を用いた定期的なモニタリングと温湿度データの回収を行い、空調の調整に役立てた。 (2) 正倉院展終了後に、展示ケース内のアクリル製治具などから塵埃を採取、電子顕微鏡にて観察し、塵埃の状況からケースの気密性に対する評価を行った。 調査結果を踏まえ、気密性向上のための修理や部材交換などのメンテナンスを実施予定。 (3) 元年度に引き続き、文化財害虫の生息状況を把握するため、文化財の保管及び展示に関わる箇所を中心に昆虫調査用トラップを設置し、2か月に1回交換を行った。調査結果を蓄積し分析することでIPM(総合的有害生物管理)を推進し、文化財害虫の生息が確認された箇所を重点的に清掃し被害の低減に努めた。また、清掃と防塵マット交換を定期的の実施し、展示室・収蔵庫の周辺の衛生環境保持に努めた。			
			
		温湿度データロガーとモニタリング PC	
【備考】 ・学芸部保存修理指導室員並びに総務課環境整備係員等により構成される、「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」を実施した。月に1回程度開催し、保存環境に関する問題点や改善案について協議を重ねている。 (1) 展示室内温湿度調査：167 か所 (2) 展示ケース内ほか粉塵調査：24 か所 (3) 文化財虫害生息状況調査：100 か所 ・「奈良国立博物館環境整備委員会保存環境に関するワーキンググループ」：8 回開催			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	継続した調査の実施やデータの蓄積を着実にやっている。また、調査で得られた結果を踏まえ、ワーキンググループでの情報共有や議論を行い、保存環境の保持と改善を図った。データの共有化を進め、保存環境の維持や向上を進めると共に円滑な監視体制を整えた。なら仏像館についても同様に館内環境維持のため継続して調査を進めデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通し、展示室や収蔵庫の温湿度並びに文化財害虫に関するモニタリングや調査を行った。また、28年にリニューアルオープンした、なら仏像館も、同様にデータの蓄積を着実に継続して実施することができたため、中期計画は達成されたと判断した。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 文化財修理の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の3点の内容について実施した。 (1) 修理方法の記録を残し将来の文化財修理に資するため、館蔵品や寄託品の保存状態に関する科学的な調査を行う。 その内容を保存カルテとして記録する。 (2) 館蔵品や寄託品の修理を着工するにあたり、修理文化財の保存状態に関する情報を得るための科学的な調査を行った。また、調査結果を踏まえた修理調書を作成している。 (3) 修理中の文化財から取得した材質・銘文等の情報について調査と分析を行った。また、その結果を当館の研究紀要などへの掲載等を行いデータの蓄積を実施している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 元年度に引き続き、館蔵品や寄託品の保存状態を詳細に観察するとともに、得られた情報をふまえて保存カルテを作成している。必要に応じて光学調査も併せて実施し、作品の基礎データを蓄積した。 (2) 元年度に引き続き、館蔵品や寄託品の修理に伴い、詳細な観察や光学調査を実施した。保存カルテと調査結果をふまえて修理調書を作成し、館内鑑査や修理方針の策定に役立てた。 (3) 2年度は修理中の木製文化財の樹種同定を実施しなかったが、修理中に発見された銘文は、当館研究員が翻刻を行い情報化と整理を実施した。この成果は「奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書」第2号として4月に刊行した。2年度の成果については3年3月刊行の修理報告書第3号に掲載した。			
【備考】 ・保存カルテや修理調書を基に修理された文化財は、修理完了後の翌年度冬に開催される特集展示「新たに修理された文化財」にて公表している。 (1) 保存カルテ作成件数：総計84件 (内訳 絵画：19件、書跡：17件、彫刻：2件、工芸：14件、考古：30件、その他：2件) (2) 修理調書作成件数：総計8件 (内訳 絵画：3件、彫刻：2件、工芸：2件、考古：1件) (3) 材質調査件数：0件			



2年度 特集展示「新たに修理された文化財」会場の様子



2年度 特集展示「新たに修理された文化財」会場の様子

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	文化財保存修理所の修理技術者と連携を進め、X線CT、X線透過撮影や顔料調査などの科学的調査を行い、修理に有用な成果が得られた。保存カルテについても整備を進め、修理方針の検討に役立てた。また、材質調査や銘文調査も引き続き実施し、データの蓄積を図った。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館の文化財保存修理所は、奈良をはじめとする国指定品の修理における拠点であり、修理技術者との連携は今後も重要である。本事業は、修理に関する基礎情報を収集し、その成果を公開するものである。中期計画期間を通して、継続した調査並びに情報の蓄積に尽力できたため、中期計画は達成された。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 保存科学の観点からの収蔵品・寄託品等の調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 本事業では、以下の2点の内容について実施した。 (1) 館蔵品や寄託品の修理前や修理中等に併せ、光学調査(X線透過撮影・蛍光X線分析)を実施した。そして、修理方針の策定に有効な情報を取得し反映させた。 (2) 文化財保存修理所での修理中の文化財については、当館の研究員と工房の技術員が共同で光学調査を実施し、得られた結果を修理へ反映している。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	保存修理指導室長 鳥越俊行
【主な成果】 (1) 館蔵・寄託の文化財(彫刻や漆工品など)の修理等に併せ、X線CTスキャナやX線透過撮影を実施し内部構造や納入品の把握を行った。これらの光学調査は修理に活用すると共に、データの蓄積も進めた。 (2) 当館研究員と工房の技術者が共同でX線CTスキャナ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの光学調査を行った。館蔵品や寄託品の修理前や修理中にこれらの調査を実施することで、修理へ成果を随時反映させることが可能となり、彫刻作品・漆工作品や絵画作品のより安全な修理に役立てることができた。			
			
		修理に伴う蛍光X線分析調査の様子	
【備考】 ・調査件数 X線CTスキャナ調査:6回 蛍光X線分析調査回数:3件			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	元年度に引き続き、修理等の際に内部構造や保存状態・材質情報に関する情報を得るため光学調査を実施した。X線CTスキャナやX線透過撮影は安全な修理に欠かすことのできないものとなっており、また蛍光X線分析は彩色材料の同定に重要な役割を果たしている。光学調査の結果は、修理調書に反映させるとともに修理方針の策定にも役立てている。今後も継続した調査並びにデータの蓄積を図りたい。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通して、X線CTスキャナを順調に稼働できたため、彫刻や漆工品などの修理に大いに資することができた。文化財保存修理所での修理内容を踏まえ、X線透過撮影や蛍光X線分析などの調査を行うことで、修理方針の策定等に伴う調査を随時実施できた。調査の継続並びにデータの蓄積により、中期計画は達成された。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財の材質・構造等に関する共同研究 ((4) -②-1))		
【事業概要】 X線 CT スキャナ等の科学的手法を使用し、各種文化財の材質・構造等に関する調査研究を外部研究者と共同で実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	研究員 渡辺祐基
【主な成果】 (1) 漆工品の構造調査 文化庁所蔵の「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度」のうち、文房具をはじめとする各作品のX線 CT 調査を実施した。その結果、個々の作品における木地の材質、部材の接合方法、布着の様式が明らかになった。さらに、文房具に分類される作品群において、接合や布着に複数の技法・様式が存在することが分かった。3年度も、未調査作品のCT スキャンを継続するとともに、構造等に基づいた作品の分類について検討し、製作技法に関する理解を深めていく。 また、修復技術者と協力して琉球漆器のX線 CT 調査を実施し、木地構造や布着に関する知見のほか、螺鈿の状態に関する情報も得ることができた。		 婚礼調度のX線 CT 調査風景	
(2) 茶入の製作技法調査 茶入の伝統的な製作技法を解明するための研究に30年度、元年度に引き続き取り組んだ。2年度もいくつかの作品のX線 CT 調査を実施した。CT データより、これらの茶入には異なる製作技法が使われている可能性が示唆された。そこで、異なる製作技法によって復元した茶入のCT 調査も併せて行い、製作技法と茶入内部に存在する空隙や亀裂の関係を検討した。本調査で得られたCT 画像は、実物とともに展示され、展覧事業にも活用することができた。		 CT 画像を取り入れた展示風景	
【備考】 ・X線 CT 調査件数31件、調査回数259回 ・3D デジタイザ調査件数5件、調査回数15回 ・論文等 渡辺祐基、川畑憲子、吉川美穂、木川りか「国宝『初音の調度』のうち乱箱、長文箱、短冊箱の構造・技法のX線 CT 調査」『日本文化財科学会第37回大会研究発表要旨集』146-147 (9月) 大西智洋、渡辺祐基、當山綾乃「黒漆山水人物螺鈿料紙箱の修復報告」『浦添市美術館紀要』16号 (3年3月) 望月規史、齋部麻矢、田中麻美、和泉田絢子、渡辺祐基「『国宝 観世音寺梵鐘』調査報告」『東風西声』16号 (3年3月) 楠井隆志、渡辺祐基「長崎・聖福寺の開帝像」『東風西声』16号 (3年3月) 川畑憲子、渡辺祐基、田中麻美「叢梨地牡丹唐草向鶴紋散蒔絵調度の木地構造について (1) 文房具」『東風西声』16号 (3年3月)			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は36件の文化財等の調査を実施でき、特に工芸分野において、文化財の内部構造に関する貴重なデータを収集できた。さらに、これまで蓄積してきたデータから得られた知見について、共同研究者及び専門家と共に検討した上で (オンライン会議含む)、学会発表や論文を通じて積極的に公開した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期期間に沿って、漆工品や陶磁器、その他多様な文化財のX線CTスキャナ等を用いた調査を実施し、包括的なデータベースを構築してきた。さらに、中期計画の最終年度である2年度には、3Dデータの収集のみならず、それらの解析及び公表にも重点的に取り組み、多くの業績を残すことにより、中期計画を達成することができた。 3年度以降も多数の作品の調査を計画しているほか、得られたデータの客観的な解析手法の検討並びに展示・教育普及事業への活用についても取り組んでいきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	イ 博物館における国内・アジア地域の文化財保存修復に関する研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 ベトナム国立歴史博物館が所蔵する作品の保存修理事業を行い、ベトナムでの修理理念の検討と人材育成等を目指す。また、文化財の修理技術や保存修復事業について、修理の内容や成果を展示公開し、博物館における文化財の保護と継承への取り組みとその意義について理解を深める機会を提供する。			
【担当部課】	博物館科学課	【プロジェクト責任者】	保存修復室長 志賀智史
【主な成果】 ・知恩院所蔵「弥勒下生経变相図」修理完成披露展 実施予定日：3年1月26日～3月7日の6週間 展示場所：文化交流展示室 第7室 住友財団の文化財修理助成金により修理を実施した知恩院所蔵「弥勒下生経变相図」とともに、新調した桐箱や太巻添軸、伝統的な装幀修理に用いる材料や道具、また絵画技法を分かりやすく可視化した見本などを展示することで、文化財の修理技術や実際の修理成果について紹介した。 ・文化交流展示「文化財をまもり伝える博物館」 実施予定日：3年3月16日～5月9日の8週間 展示場所：文化交流展示室 基本展示室 バックヤードツアーでしか見ることができない博物館の役割について、「修理」、「模写模造」、「収蔵」、「環境」の4つのテーマで作品を中心に様々な資料を展示することで、より多くの方々に「文化財をまもり伝える」という博物館の役割について知って頂く機会を設けた。 ・ベトナム国立歴史博物館所蔵品の修理事業（中止） 当館との協定館であるベトナム国立歴史博物館が所蔵する所蔵品について、修理工房幸匠（株）の協力を得て、元年度からの3か年継続事業（住友財団助成事業）として修理を行う予定であったが、新型コロナウイルスの流行により現地へ渡航することができず、やむなく実施を中止した。2年度は、当館紀要『東風西声』（3年3月刊行）にベトナム国立歴史博物館保存修復部部長グエン・ティ・フォン・トム氏より「ベトナム国立歴史博物館における文化財の保存修復について」を寄稿頂き、元年度までの事業成果やベトナムでの文化財の修理理念、現地人修理技術者の育成について報告・公開した。			
 修理完成披露展の展示風景			
【備考】			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	2年度は、新型コロナウイルス感染予防対策のための制限措置によりベトナムへの渡航が叶わなかったため、現地での修理を進めることはできなかった。今後も社会情勢に鑑み、適宜調整を行いながら事業を継続し、海外との国際協力ネットワークの構築と拡大に務めていく。一方で、保存修理についての展示公開では、修理作品の公開やバックヤードの業務の紹介を通じて、「文化財をまもりつたえる」という博物館の役割を一般の方々に強く印象付けることができた。以上により、年度計画は達成したと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に沿って、国内・アジア地域の文化財の修理や保全環境に関する展示事業を行うなど、多方面への文化財保存修復に関する普及活動を行ったことから、中期計画を達成できたと考える。 元年度に開始したベトナムでの文化財修理事業は、今後の展開が期待されるものであり、引き続き事業継続のために諸方面との調整を行っていく。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ウ 博物館危機管理としての持続的 IPM システムの研究((4)-②-1))		
【事業概要】 本研究の目的は、我が国の博物館における IPM（総合的有害生物管理）普及のための持続的なシステムづくりである。館内職員のみならず、地元 NPO 法人やボランティア、大学・専門教育機関・地域文化施設と連携して IPM を実践するためのプログラム確立を通し、研修会の開催等を通じて IPM の社会的理解度を深めつつ、博物館等における IPM を軸にした地域共働システムづくりを目指すものである。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長兼環境保全室長 木川りか
【主な成果】 (1) 「IPM オンライン相談会」の開催 例年、IPM セミナー及び IPM 研修を 10 月に実施しているが、2 年度は新型コロナウイルスの状況を鑑み、オンラインによる 1 施設あたり 1 時間の IPM 相談会を実施した(10 月 21 日～23 日の 3 日間)。全国各地の 18 施設から応募があり、9 施設を対象とした。枠の関係で今回オンライン対応できなかった施設には、書面で回答した。アンケート結果では「個別具体的な相談ができたので、大変参考になった」、「通常の研修は皆が受けるわけにはいかないが、オンラインでは施設の複数のスタッフが、同時に内容を視聴できた点良かった」などの意見があり、高い満足度がうかがえた。2 年度の取り組みは、従来の研修とは方式が大きく異なったが、オンラインによる新たなメリットも示された。今後も、同様の取り組みを継続していきたい。 (2) 館内関係者向け IPM 研修の開催 2 年度も新任職員を主な対象として、館内関係者向けに IPM 研修を実施した(10 月 2 日)。2 年度は、新型コロナウイルス対策として、例年よりも人数を絞り、密にならないように気をつけて開催した。館内の各部署の関係者に館の IPM ポリシーを共有し IPM 活動に対する理解を深める点で重要な役割を果たしている。			
			
		IPM オンライン相談会の様子	
			
		IPM 館内研修風景	
【備考】 ・ IPM オンライン相談会(3 日間) 1 回 参加施設数: 9 施設 ・ 館内希望者向け IPM 研修(1 日間) 1 回 参加人数: 10 人 ・ 学会研究会等発表: 木川りか、渡辺祐基、富松志帆、松尾実香、秋山純子、岡部海都、柿本大典、大城戸博文「ガラス外壁を有する博物館建造物における衝突野鳥の傾向分析と照明・音声を利用した対策について」日本環境動物昆虫学会 第 32 回年次大会(11 月 29 日、オンライン開催)			

年度計画に対する総合的評価

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
A	博物館の危機管理として館内の IPM 活動を進めるとともに、その経験をもとに IPM オンライン相談会を開催し、全国各地の文化財関連施設への普及に資することができた。新型コロナウイルスの影響を考慮した新たな方法で実施できたことは評価される。また、成果の一部を学会で報告し、当館の取り組みを発信することができた。以上から当初の計画を上回る成果をあげることができたと判断した。

中期計画の実施状況の確認

評定	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通し、当館内の活動によって IPM の活動についてのノウハウが蓄積されてきている。その成果を生かして、博物館等の IPM 活動に関連し、全国の博物館等から総務系と学芸系など職種の異なる担当者に向けて継続的に普及事業を実施した。その結果、中期計画における「文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究」について、概ね達成できたと考える。 次期中期以降においては、2 年度のオンラインによる相談会のメリットを生かし、よりよい普及事業を企画していきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	エ 展示ケース内の環境に関する調査研究 ((4)-②-1))		
【事業概要】 展示ケースは、展示される文化財を粉塵や温湿度の急激な変化から保護し、また作品への影響を最小限にする照度条件でより良く作品を観覧していただくための環境を実現するにあたってきわめて重要な役割を担っている。さまざまな状況下の展示ケース内の環境条件について、作品を保護する見地より多角的かつ詳細な調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部博物館科学課	【プロジェクト責任者】	課長 木川りか
【主な成果】 (1) 展示ケース内で使用する展示台の材質と空気質にかかわる調査 今後、展示ケース内の空気質環境をより適切に制御していくために、展示ケース内で使用する材料の調査を進めている。展示台などに今後、使用する可能性のある材料について、揮発性化学物質の調査を実施している。  材料から放出される揮発性化学物質の調査 (2) 展示ケース内の空気質環境をより向上させるための対策 展示ケース内では、敷板や展示台に合板が用いられることが多く、合板から放出される有機酸やアルデヒドなどの揮発性化学物質の問題は広く認識されている。 当館でも定期的に酢酸、アルデヒドの環境濃度を調査している。また、化学物質の放出量を低減するため、展示台の集中的なエアレーションを実施し、保管場所でも定常的に展示台のエアレーションができるよう、保管棚を改良した。また、定期的に展示ケース内の換気ができるように、実験を進めている。  展示台の集中エアレーション  展示ケースの換気実験と風速測定			
【備考】			

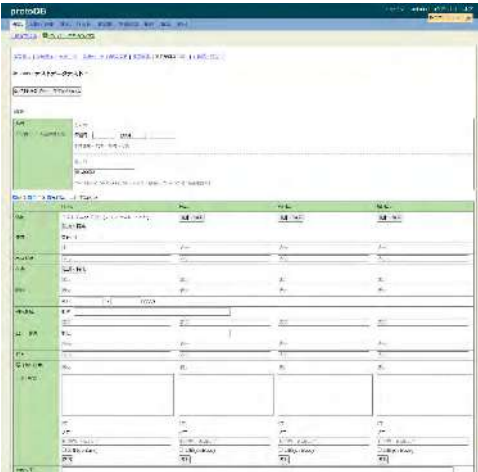
年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	展示ケース内の空気質環境について詳細な調査を継続的に実施し、状況の把握に努めた。将来を見据えて揮発性化学物質の濃度を低減するための方策について、検討を進めることができた。このような試みで得られる結果は、博物館等施設全般に共有できる知見と考えられる。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	本研究は作品保護の見地より展示ケース内の環境条件について調査を進め、中期計画を達成した。中期計画最終年度となる2年度においても、予定していた項目について継続的にいろいろな条件下で引き続きデータを集めることができた。 次期中期においては、さらなる改善につながる対策について、引き続き多角的に検討し、調査を続けていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	博物館資料・業務の情報処理に関する調査研究		
【事業概要】 当館における収蔵品管理システムの調査研究を通じて、資料情報と学芸業務の有機的な関連について調査研究を行い、博物館における効果的・効率的な情報の管理及び蓄積、活用のための環境構築に資することを目的とする。			
【担当部課】	学芸研究部博物館情報課	【プロジェクト責任者】	情報管理室長 村田良二
【主な成果】 1)収蔵品管理システムについて、作品検索、総合文化展管理、鑑査会議管理、作品管理、修理予定・履歴管理、文献情報管理の各機能を継続的に運用し、随時改善を重ねて機能を向上させた。 2)新型コロナウイルスの影響により在宅勤務となっている職員が、自宅等から安全に利用するための調整を行った。またこれに伴い、システムに対するすべてのアクセスについて、URL、ユーザ、日時のログを取得できるように改修した。 3)総合文化展のデータ管理について、特に題箋及び解説の多言語対応のための作業効率向上のため、データ入力・編集画面を再設計し、新たに実装した。 4)ColBase との連携におけるデータ出力機能について、更新日時に関する微調整を行った。			
			
		多言語データ入力画面	
【備考】 収集データ件数 237,591 件 (内訳) 作品データ件数 223,957 件 平常展データ件数 5,853 件 鑑査会議データ件数 102 件 貸与データ件数 2,084 件 修理データ件数 2,709 件 文献データ件数 2,886 件			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	収蔵品の効果的・効率的な管理のためのシステムを継続的に開発し、館内からの要望に応えながら着実に発展させることができた。新型コロナウイルスの影響により職員が在宅時でもシステムを安全に利用できるよう、詳細なログを取得する等の改修を行った。またColBaseや音声ガイドシステムとの連携でも多言語データの重要性が高まっており業務量の増加していることから、より効率的に作業できるよう多言語データの編集を行いやすい機能性をもった画面に刷新した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間全体を通して、システム全体の設計を再検討し、さらに発展させていくことを目指し、最終年度となる2年度は、継続的な機能改善と同時に、多言語編集機能の刷新を行った。よって中期計画を遂行できたと判断した。次年度以降は、ColBaseによるデータ公開の成果を踏まえ、一般の利用に供するためのデータを整備する仕組みを検討する。

業務実績書

中期計画の項目	(4)有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	創立 150 年へ向けた館史編纂のための基礎的な資料整理と調査研究		
【事業概要】 4 年度の当館創立 150 年へ向けて『東京国立博物館 150 年史』を編纂するために、業務文書や刊行物等を収集、整理し、今後の編纂事業の基礎資料を作成する。また、原稿の整理や入稿など編集作業を行う。2 年度は関係文書類の整理とデータ化、保存措置を続けた。また、寄稿された原稿の整理と入稿を推進した。			
【担当部課】	学芸企画部企画課	【プロジェクト責任者】	東京国立博物館百五十年史編纂室長・恵美千鶴子
【主な成果】 (1)収集した文書類の整理・目録化・保存措置（6 月 1 日～3 年 3 月 25 日：週に 1～2 日） 資料保管室（資料館 3 階）に収集した約 8,500 件の館史関係文書類について、27 年度に完成した目録（仮）と対応させながら、資料の保存や出納のために、中性紙箱への入れ替えを行った。また、館内外より新たに収集した資料について目録を作り、活用できるように整理をした。以上は、東京国立博物館百五十年史編纂室員 1 名、編纂室アソシエイトフェロー1 名がともに本作業に携わった。 (2)『150 年史』原稿についての整理と入稿作業（適宜） 提出された原稿について、内容を確認し、文体の統一に向けての問題点を抽出し検討した。確認した原稿を、編集出版業者に入稿した。まだ原稿を提出していない執筆者に対して連絡を入れながら、原稿提出を促した。 (3)館史の内容に即した文書類の整理・デジタル化 a)『百年史』資料のデジタル化（8 月 4 日～3 年 3 月 25 日の間、週に 1 日） 『150 年史』編纂に向けて、執筆資料とするために、『百年史』編纂時の資料のデジタル化を行った。アソシエイトフェロー1 名、有期雇用職員 1 名が担当した。 b)『150 年史 年表（稿）』へのデータ追加（適宜） 30 年度に作成した冊子『150 年史 年表（稿）』の訂正や追加項目をデータとして蓄積した。 (4)聞き取り調査のデータ化（8 月 4 日～3 年 3 月 25 日の間、週に 1 日） 30～元年度に実施した当館の OB への聞き取り調査について、聞き取った内容をテキストデータ化した。 (5)問い合わせへの対応と関係資料の提供（6 月 1 日ほか） 『150 年史』執筆者などへの資料提供と、館内・館外からの館史に関する問い合わせに対応した。			
【備考】 (1)収集した文書類の整理：31 日間実施 (3) a) 『百年史』資料のデジタル化：21 日間実施（633 点） b) 『150 年史 年表（稿）』へのデータ追加：25 点 (6)資料提供・問い合わせ対応：15 件			



『百年史』資料のデジタル化



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	27 年度より継続的に行ってきた文書類の整理・保存措置について 2 年度も進めた。また収集・整理した文書類のデータを活用し、『150 年史』執筆者や問い合わせに対して資料提供を行うことができた。そして、寄稿された原稿の整理と入稿することにより、編集出版業務を進めることができた。引き続き、館内各所に所在する文書類を『150 年史』編纂に有効に活用できるようにすると同時に、原稿執筆を促し、資料編の準備も併せて進め、編集出版作業を進めたい。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	『150 年史』執筆者への資料提供や館史に関わる問い合わせ、調査研究などの要望に迅速に対応できるようになった。また、原稿の整理や入稿を進められたことから、中期計画に沿った調査研究を実施することができた。3 年度以降も引き続き文書類のデータ化を行い、利用しやすい文書整理を心掛け、さらなる活用を図るとともに、編集出版作業を進めていきたい。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ②その他有形文化財に関連する調査研究 2) 博物館情報、文化財情報に関する調査研究		
プロジェクト名称	博物館情報システム・資料情報処理に関する調査研究		
【事業概要】 当館の文化財情報システムや博物館ウェブサイト、博物館システムの整備や運用について検討するとともに、文化財情報に関する諸般の調査研究を実施する。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	美術室長 兼 列品管理室長 羽田 聡
【主な成果】 (1) 当館の文化財情報システムや館蔵品データベース、公式ウェブサイトなどのシステム、博物館におけるインフラネットワークの整備や運用について検討する情報システム検討委員会を隔月で開催し、文化財情報に関する調査研究を推進した。 (2) 文化財情報システムや館蔵品データベース、公式ウェブサイトのリニューアルに向け、ワーキンググループを設置した。ワーキンググループにおいて、現状の課題抽出とリニューアルにおけるポイントをまとめた。 (3) ColBase から館蔵品データベースに対してハーベスティング(自動的なデータ収集)が実施された。エラー内容をもとに、元年度の改修に修正を加えた。			
【備考】 ・ 情報システム検討委員会5回			
システム等リニューアルに向けた 九州国立博物館とのオンラインミーティング			

年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	4月より新たに博物館情報担当の研究員を採用し、文化財情報システムや館蔵品データベース、公式ウェブサイトのリニューアルに向け検討を重ねた結果、現在運用中のシステム等における課題を抽出し、リニューアルにおける要点をまとめることができた。リニューアルの検討材料として、館外からも情報を収集し、意見交換を行った。また、新型コロナウイルスによる状況下においても、ウェブ会議システムを使用するなど、積極的な情報収集と調査研究に努めることで、所期の目標を達成することができた。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画期間を通じて博物館システムの問題点を集積し、最終年度において文化財情報システムや館蔵品データベース、公式ウェブサイトのリニューアルに向けた検討のため、それぞれワーキンググループを立ち上げ、関係者間で積極的な意見交換を行うことができた。次期中期計画における本格的なシステム等のリニューアル及び運用に向けて、情報収集と共有を継続する。

業務実績書

中期計画の項目	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ② その他 有形文化財に関連する調査研究		
プロジェクト名称	ア 文化財アーカイブズの形成に関する理論的・実践的研究		
【事業概要】 仏教の歴史や美術にまつわる文化財について、展覧や研究事業と連動した情報収集を実施する。これに、デジタル技術を適切に取り入れることにより、データの継続的な作成や情報資源の公開と共有に展開させる。その際、文化財の保存と活用という視点を重視し、それに資するアーカイブズの形成を目指す。			
【担当部課】	学芸部	【プロジェクト責任者】	資料室長 野尻忠
【主な成果】 (1) 文化財の情報収集 ・ 仏教の歴史や美術に関する研究文献を収集し、図書情報システムに1,555冊を新規登録し、データを充実させた。 ・ 館蔵古写真のうち、被写体を特定できていないものについて調査を進め、その成果の一部を発表した（【備考】参照）。 (2) 既存資料のデジタル化 ・ フィルム写真のスキャンニングによるデータ化を3,017件実施し、文化財アーカイブを充実させた。 (3) デジタル写真撮影 ・ 4～10月の間は写真技師が不在となったが、外部の技術者に発注するなどして、写真撮影を継続することができた。 ・ 11月には法隆寺東院夢殿において救世観音立像（国宝）を撮影し、12月には高さ5メートル超の金峯山寺仁王門金剛力士像（重要文化財）を撮影するなど、貴重な撮影機会を得て、文化財アーカイブズを充実させることができた。 (4) データ公開 ・ 元年度から継続中の、法隆寺金堂壁画写真ガラス原板の高精細デジタルデータを用いたコンテンツ制作は、引き続き共同研究を進め、個別画像の接合作業を完了し、7月よりコンテンツが公開された (https://horyuji-kondohekiga.jp/)。			
7月より公開された「法隆寺金堂壁画写真ガラス原板デジタルビューア」のトップページ			
			
【備考】 ・ 野尻忠「奈良国立博物館の古写真にみる奈良公園の景観」（奈良国立博物館サンデートーク、11月29日実施）等で、研究成果を発表			



年度計画に対する総合的評価

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	当館では、文化財そのものの収集と展覧に加え、アーカイブズを形成してそれらを活用することも、重要な事業として位置づけている。文化財写真の収集もその重要な柱の一つである。我が国の文化財は、材質の脆弱性などから、移動や調査の機会が限られているものが多く、調査の機会が得られたときには、可能な限り画像データを取得し、共有可能な研究資源としていくことは大きな意義がある。上記のとおり、2年度も希少な機会を捉えて写真撮影を実施できた。スキャンニングによるデータ集積も例年通り実施できており、順調に研究を推進できている。成果の公表についても、既存のデータベースへのデータ追加は例年通りの件数を実施し、加えて上記のデジタルビューア公開や口頭発表の形での成果公表を実施した。

中期計画の実施状況の確認

評価	判定の理由、改良・改善計画、次年度計画への反映等
B	中期計画に掲げる「文化財の収集・保存・修理・管理ほか、文化財及び博物館の業務に関連する調査研究」の一つとして、本プロジェクトは順調に実施できている。幸いにも体制が維持され、デジタル画像の取得や既存資料のデジタル化は、定量的に見ても継続的な事業継続ができている。眼前にある文化財そのものの研究とともに、将来に伝えるべき情報を取得し、蓄積し、共有財産としていくアーカイブズ事業は、今後ますます重要になっていくと思われる。この事業を継続し、さらに活発化させるには、それに見合った増員やインフラ整備が重要度を増していくため、そうした方面にも取り組んで行く必要がある。

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウム等の開催若しくは職員を派遣する。 (東京国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館及び東アジア・欧米主要館を中心に、海外の博物館との交流を活発に行う。 2) アジア国立博物館協会 (ANMA) 理事会・定期大会、IEO (国際展覧会オーガナイザー会議)、日中韓国立博物館長会議等の国際会議へ参加する。									
担当部課	学芸企画部企画課国際交流室			事業責任者	室長 楊鋭				
【実績・成果】 (4館共通) ・26年から継続して実施している「北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業」(文化庁支援事業)の一環として国際シンポジウム「日本美術がつなぐ博物館コミュニティーズ/ポスト・コロナ時代の挑戦」及び日本美術専門家会議は、新型コロナウイルスの影響により開催方法を変更し、それぞれ3年1月30日と2月5日に、オンラインにて開催した。 (東京国立博物館) ・2年3月から6月にかけて、欧米及びアジアの代表的な博物館・美術館計52館が休館中に実施している施策について、各館の公式ホームページやSNSの閲覧を通じて、追跡調査を行った。9月には当館の公式SNSアカウントで英語・中国語・韓国語による館蔵作品の紹介を試み始めた。より幅広く海外への日本美術の紹介に努めている。 ・中国上海博物館主催の国際博物館専門家会議「博物館の力ー国際博物館オンライン対話」(7月15日)などの国際オンライン会議に積極的に参加した。									
【補足事項】 (4館共通) ・オンラインで行った国際シンポジウム「日本美術がつなぐ博物館コミュニティーズ/ポスト・コロナ時代の挑戦」の国内外参加・視聴者数は1,287人。 (東京国立博物館) ・韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館等と定期的に行ってきた学術交流は、新型コロナウイルスの影響により中止となったが、オンラインにて両館と緊密な連携を取っている。現在、韓国国立中央博物館とはオンラインセミナー形式での学術交流を検討している。									
				国際シンポジウム		日本美術専門家会議			
【定量的評価】項目		2年度実績	目標値	評定		28	29	30	元
海外からの研究者招聘		0人	-	-	経年 変化	73	35	79	55
海外への研究者派遣		0人	-	-		60	67	52	89
国際シンポジウム開催数		1回	-	-		1	1	1	1
国際シンポジウム参加者数		1,287人	-	-		463	334	256	314
【年度計画に対する総合評価】 評定：B		【判定根拠、課題と対応】 これまで韓国国立中央博物館及び中国・上海博物館と定期的に行ってきた学術交流や、海外の優れた研究者の招聘及び当館研究員の海外派遣は新型コロナウイルスの影響によりすべて中止した。代替となる取り組みとして、オンラインにて様々な交流が進み、博物館同士の絆を深めた。2年度で7度目となる北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業もオンラインにて開催、12ヵ国87人の参加があった。さらに、日本在住の外国人来館者向けに展示室のパネルや作品の多言語解説の改善を継続的に行い、SNSを通じて多言語による海外向けの情報発信も試み始めた。3年度は、海外の博物館・美術館との交流・連携を一層深めていくとともに、デジタルメディアを活用して、持続的に発展可能な博物館国際交流及び効果的な情報発信に努めたい。							
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評定：A		【判定根拠、課題と対応】 例年のような多くの研究者招へいと派遣は新型コロナウイルスの影響により実施できなかったが、オンライン形式で海外博物館関係者との交流や対話などを積極的に行った。第7回となった北米・欧州ミュージアム日本美術専門家会議では、「日本美術がつなぐ博物館コミュニティーズ/ポスト・コロナ時代の挑戦」というテーマのもと、欧米ミュージアムの現状と取り組みについて活発な議論が交わされ、交流を通じて相互理解を一層深めた。また、館内標識案内の多言語表記の増設や関連イベントの多言語対応、展示室内のパネルや作品の多言語解説の改善を継続的に行った。 2年度は新型コロナウイルスの影響により達成できなかった部分もあったが、今中期全体を通して目標値以上の研究者招へいと派遣を実施し、成果を達成した。また、国際シンポジウムや日本美術専門家会議も継続して開催でき、大きな成果を得た。さらに、博物館における多言語対応の充実や国内外への情報発信にも努めている。5年間(28～2年度)の取組状況を総合的に判断し、中期計画を上回る成果をあげることができた。							

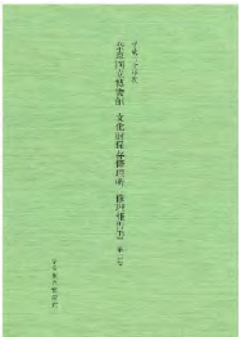
【書式A】		施設名	京都国立博物館	処理番号	1430B				
中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等								
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムの開催若しくは職員を派遣する。 (京都国立博物館) 1) 海外の博物館・美術館との学術交流協定の締結に向けた協議を行う。									
担当部課	総務課 学芸部		事業責任者	課長 西尾佐枝子 調査・国際連携室長 呉孟晋					
【実績・成果】 (4館共通) 各項目とも新型コロナウイルスの感染拡大により国際的な人的往来が厳しく制限される状況が継続するなかで、当初の計画のほとんどを実施することができなかったが、一部の事業についてはウェブ会議などを活用することにより以下の成果を生み出すことができた。 2) 2年度北米欧州ミュージアム日本美術専門家連携交流事業において、ウェブ会議などに職員が参加して意見交換を行った。 3) ・九州大学人文学国際研究センターの公開講座の企画・運営に協力し、職員2人が研究発表を行った。 ・研究交流などのため、職員4人がオンライン上で開催された海外の学会や講演会で発表を行った。 (京都国立博物館) 1) アメリカのサンフランシスコ・アジア美術館と学術交流基本協定を締結した。									
				 サンフランシスコ・アジア美術館との オンラインによる学術交流基本協定締結					
【補足事項】 (4館共通) 1) 特別企画「新聞人のまなざし—上野有竹と日中書画の名品—」関連の国際講演会の講師として、台湾の元国立故宮博物院院長で中央研究院院士の石守謙氏（中国絵画史）を招へい予定であったが、中止を余儀なくされた。 ・京都国立博物館が協力する香港中文大学文物館主催の「博物館專業交流項目」（香港・中国キュレーター研修）は、実施が3年度に延期された。 3) 公開講座は、「The Transformation of East asian Cloth: Transnational and Translocal Textiles（東洋染織品の移動と変容）」と題し、3年1月から3月にかけて4回開催された。 ・オンライン上での学会発表例として、「ユネスコ・アジア文化センター 文化遺産に関わる国際会議」（12月22日）での栗原祐司副館長の基調講演「Museum and Local Community」などがある。 (京都国立博物館) 1) ウェブ会議システムを積極的に活用し、相互訪問・対面による会議なしで締結することができた。協定の締結式もオンラインで開催。学術交流協定の締結実績は元年度をもって終了したフランスのギメ美術館に次いで2例目となった。									
【定量的評価】項目		2年度実績	目標値	評価	経年 変 化	28	29	30	元
海外からの研究者招聘		0人	-	-		2	2	14	3
海外への研究者派遣		0人	-	-		21	21	35	18
国際シンポジウム開催数		0回	-	-		0	1	1	0
国際シンポジウム参加者数		0人	-	-		0	140	99	0
【年度計画に対する総合評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 国際交流事業は、積極的な人的往来による交流を前提としており、博物館事業のなかでも最も新型コロナウイルスの影響を受けたものの一つである。当初計画のほとんどを実施することができず、オンラインでの実施もかなりの制約を受けた。そのような状況でも、サンフランシスコ・アジア美術館と学術協定を締結することができたのは、両館で長年にわたり蓄積してきた人的交流の成果であり、評価できる。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B			【判定根拠、課題と対応】 中期計画全体では、元年度のICOM京都大会への協力を筆頭に、旺盛なインバウンド需要も背景として、国際交流を活発に展開することができた。最終年度である2年度は新型コロナウイルスの影響により当初事業計画の変更を余儀なくされたが、それを踏まえても海外の美術館・博物館と連絡を絶やさず、交流を継続していたことから、中期計画を達成したと評価できる。 次期中期計画では、感染状況を見極めながら、ウェブ会議などの積極的活用などを通じて、国際交流を継続していきたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】(4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウムを開催若しくは職員を派遣する。 (奈良国立博物館) 1) 学術交流協定を締結している博物館を中心として、海外の博物館等との交流を活発に行う。								
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤栄					
【実績・成果】 (4館共通) 1), 2), 3) 新型コロナウイルスの影響により、研究者の招へい・派遣は実施できなかった。 3) 東京国立博物館主催北米・欧州ミュージアム日本美術専門家連携・交流事業による国際シンポジウムに、当館職員4名が参加した。 (奈良国立博物館) 1) 上海博物館との学術交流協定を見直し、更新した。 1) 元年度から引き続き上海博物館開催「鑑真和上と唐招提寺東山魁夷作品展」に学術協力として協力した。新型コロナウイルスの影響により上海博物館が会期中から休館し、また、撤収作業や返却の輸送のため研究員を派遣することが不可能となった。上海博物館が再開し、同展は多くの観客を迎え、閉幕したが、研究員を派遣することができなかったため、ウェブ中継を行い、撤収作業の指示を行った。新型コロナウイルスの影響により返却ができない状態が続いたが、隔離期間を設けた上で9～10月に当館職員を派遣し、日本へ輸送するための点検・梱包作業を行った。国宝及び重要文化財を含む出品作品すべて、事故なく返却できた。								
【補足事項】								
【定量的評価】項目	2年度実績	目標値	評価	経年変化	28	29	30	元
海外からの研究者招聘	0人	—	—		9	17	12	12
海外への研究者派遣	0人	—	—		16	22	20	33
国際シンポジウム開催数	—	—	—		—	—	—	—
国際シンポジウム参加者数	—	—	—		—	—	—	—
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 新型コロナウイルスの影響により海外渡航が制限される中で、招へい事業などは困難であった。なお、学術協力など海外の博物館に対して可能なかぎりの支援を行い、文化財の保全に貢献することができた。特にコロナ禍中の海外への展覧会対応等困難な中での事業を模索し対応したこともあり、規模縮小しても例年並み成果と評価した。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画期間を通して、多数の研究者の招聘・派遣や、国際研修会の参加等により、海外の博物館や研究所等と充実した交流を図ることができた。特に、元年度にはICOM京都大会も開催され、国際委員会の一つであるCOMCOL(コレクション活動に関する国際委員会)の事業に全面的に協力した。2年度は新型コロナウイルス感染症の影響を大きく受けたが、学術協力など海外の博物館に対して可能なかぎりの支援を行うことができた。以上から、計画は達成できたと判断できる。 次期は新たな生活様式などへ対応した事業の検討を進めたい。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ③国内外の博物館等との学術交流等							
【年度計画】 (4館共通) 1) 海外の博物館・美術館等の研究者を招へいし、海外の研究者との交流を促進する。 2) 当機構職員を海外の博物館・美術館等に研究交流並びに研修のため派遣する。 3) 国際的な講演・研究集会、シンポジウム等の開催若しくは職員を派遣する。 (九州国立博物館) 1) 学術文化交流協定を締結している海外博物館等との交流を活発に行う。 2) 海外の文化財研究者や修理技術者を招へいし、文化財保存修復施設を活用した専門的な国際交流セミナーやワークショップを開催する。								
担当部課	学芸部博物館科学課 交流課 総務課			事業責任者	課長 木川りか 課長 山野孝 課長 執行正一			
【実績・成果】 (4館共通) 1)、2)、3) 新型コロナウイルスの影響により、海外の研究者を招へいすることや、海外へ職員を派遣することはできなかった。 (九州国立博物館) 1) ・第51回国際木材保存会議 (The 51st Scientific Conference of International Research Group on Wood Protection) に当館の研究員1人が参加し、研究発表及び情報収集を行った。本会議はスロベニアで開催予定であったが、新型コロナウイルスの影響により、オンライン会議 (ウェビナー) として開催された。(6月10日～11日) ・上海博物館との学術文化交流に関する協定を締結した(3年1月29日)。協議は電子メールにて行い、協定書は送付するなど、新型コロナウイルスを考慮しての協定締結となった。 2) 海外協定館の1つであるベトナム国立歴史博物館とは、毎年、住友財団の助成を得て同館所蔵品の修理事業を実施している。この事業は、日本人修理技術者を現地に派遣し、現地の修理技術者とともに修理を実施するものであるが、2年度は新型コロナウイルスの影響により海外渡航が制限されており、修理事業を実施することができなかった。しかし、当館研究紀要において、同館における文化財の保存修復についての概要を紹介する論文を、同館保存修復部長グエン・ティ・フォン・トム氏に執筆いただき、ベトナムにおける文化財修理事業の周知と理解を深めることができた。								
								
オンライン上での国際会議の研究発表の様子								
【補足事項】								
【定量的評価】項目	2年度実績	目標値	評価	経年 変化	28	29	30	元
海外からの研究者招聘	0人	-	-		43	9	21	3
海外への研究者派遣	0人	-	-		67	47	45	31
国際シンポジウム開催数	0回	-	-		1	0	1	1
国際シンポジウム参加者数	0人	-	-		173	0	200	306
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 2年度は新型コロナウイルスの影響により、海外からの招へい及び海外への派遣を行うことはできなかったが、中華人民共和国上海博物館との学術文化交流協定を締結し、双方における学術研究、人員交流及びその他の活動で協力していくことについて合意した。						
【中期計画記載事項】 我が国における博物館活動の先導的役割を果たすとともに、文化財とその活用等に関する博物館活動について、先進的かつ有用な情報を集積するため、海外の優れた研究者を招へいし、国際シンポジウムや研究会・共同調査等を実施する。また職員を海外の博物館・文化財研究所等の研究機関及び国際会議等に派遣する。さらに、2019年ICOM京都大会の開催にあたり、国内外の博物館・美術館や研究機関等とのネットワークを構築し、博物館活動全体の活性化に寄与する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 本事業では、中期計画期間を通し、国内外の博物館や美術館等と交流を行ってきた。2年度においては、新型コロナウイルスの影響により、国際シンポジウム等の実施や、職員の海外派遣等はかなわなかった。しかしながら、ウェブを通じて国際会議へ出席し、研究発表や情報収集を行った。また、上海博物館との学術文化交流協定の締結を行うなど、国内外の博物館や美術館等との交流を継続できたため中期計画は遂行したといえる。						

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1)文化財修理報告書を刊行する。 (東京国立博物館) 1)「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」等を運用し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図る。 2)紀要・図版目録等を刊行する。 3)法隆寺献納宝物特別調査概報を刊行する。 4)研究誌『MUSEUM』を刊行する。(年6回) 5)刊行物リポジトリの導入を検討する。								
担当部課	学芸企画部企画課 学芸企画部博物館情報課			事業責任者	課長 浅見龍介 課長 今井敦			
【実績・成果】 1)『東京国立博物館文化財修理報告XXI(21)』を刊行した。 (東京国立博物館) 1)・「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」の運用を継続し、インターネットを活用した収蔵品・調査研究等に関する情報公開の充実を図った。 ・特集印刷物リーフレット等8件のPDFファイル版を当館ウェブサイト上に全件公開することによって、研究情報の普及を図った。 2)『東京国立博物館紀要 56号』を刊行した。 3)『法隆寺献納宝物特別調査概報 XLI(41) 染織 1 刺繍』を刊行した。 4)研究誌『MUSEUM』685号～690号(6冊)を刊行した。 5)刊行物リポジトリの準備作業を行った。 ○『博物館でアジアの旅 アジアのレジェンド』『東京国立博物館セレクション 日本の甲冑』を刊行した。 ○特別展図録3件、特集印刷物11件(リーフレット8件、冊子3件)を編集した。								
【補足事項】 2)『東京国立博物館ニュース』については、2年度から年4回の発刊に仕様変更した。								
【定量的評価】項目	2年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	28	29	30	元
定期刊行物	13件	16件	C		16	16	16	15
紀要等	3件	4件	C		4	4	4	3
『MUSEUM』	6件	6件	B		6	6	6	6
『東京国立博物館ニュース』	4件	6件	B		6	6	6	6
特別展の開催回数(海外展除く)	4回	－	－		8	5	8	8
テーマ別展示の開催件数	17件	－	－		33	28	28	18
講演会等の開催回数	19回	－	－		160	199	199	97
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 紀要、『MUSEUM』、『博物館ニュース』等の定期刊行物については、新型コロナウイルスの影響もあり13件の刊行にとどまったが、文化財修理報告等を計画どおり刊行することができた。また、特集展示の刊行物を増やすことで充実した情報を提供することができた。さらに、「東京国立博物館研究情報アーカイブズ」で研究員の調査研究活動等に関する情報を随時公開。加えて、特集印刷物リーフレットのPDFファイル版をウェブサイトに掲載することでさらなる情報公開に努めた リポジトリ導入のための準備として、過去の刊行物のリスト作成や校正作業を進めた。刊行物リポジトリを導入するためには、必要な経費を予算化する必要がある。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 中期計画期間を通して、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などを順調に刊行し、中期計画を遂行できた。さらに『東京国立博物館セレクション 日本の甲冑』や『小袖』(日本語版・英語版)等、来館者からの要望が高いテーマの書籍を刊行し充実させた。また、ウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信を増やし、計画目標を達成することができた。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信								
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表								
【年度計画】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 文化財修理報告書を刊行する。 (京都国立博物館) 1) 研究紀要『学叢』を刊行するとともに、学術研究公開の一環として既刊分の概要を順次ウェブサイトで公開する。 2) 社寺調査報告書等を刊行する。									
担当部課	学芸部			事業責任者	企画室長 山川暁 調査・国際連携室長 呉孟晋				
【実績・成果】 (東京国立博物館、京都国立博物館) 1) 『文化財修理報告書18』を刊行した。 (京都国立博物館) 1) 『学叢』42号を刊行した。 2) 『社寺調査報告』30号(金剛寺)を刊行した。									
【補足事項】 (京都国立博物館) ・定期刊行物の実績値には含まないが、特別展にて2件、特別企画にて2件の図録を刊行した。 ○特別企画「文化財修理の最先端」図録は近年の修復成果の中でも注目される作品を紹介するものであるが、当館研究員が編集及び執筆を行っていることに加え、日本語・英語・中国語・韓国語を併記した意欲的な図書である。 ○特別企画「新聞人のまなざしー上野有竹と日中書画の名品ー」の図録を兼ねる仏教美術研究上野記念財団設立50周年記念誌は、当館が編集に協力して刊行された。当館が所蔵する上野コレクションの全容をその関連作品も含めて紹介するものであり、今後の日中書画の研究の基礎となるものである。 ・『社寺調査報告』30号(金剛寺)は、天野山金剛寺(大阪府河内長野市)の文化財悉皆調査の報告書である。元年度に刊行した科学研究費補助金〔基盤研究(A)〕報告書『河内地域の仏教文化と歴史に関する総合的研究<金剛寺編>』に収録した合計487件について増補・校正を行い、併せて追加調査を行った古文書を中心とする書跡253件を新規に掲載した。前号の『社寺調査報告』29号(金剛寺・彫刻編)と合わせて金剛寺所蔵文化財における調査報告書の完成版である。									
【定量的評価】項目		2年度実績	目標値	評価	経 年 変 化	28	29	30	元
定期刊行物		11件	11件	B		10	11	11	11
紀要等		3件	3件	B		2	3	3	3
『博物館だより』		4件	4件	B		4	4	4	4
『Newsletter』		4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)		2回	-	-		2	2	2	2
テーマ別展示の開催件数		5件	-	-		9	8	9	6
講演会等の開催回数		23回	-	-		45	32	37	28
【年度計画に対する総合評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 社寺調査報告、図録等を計画どおり刊行することができた。特に特別企画「文化財修理の最先端」図録は作品解説や用語を多言語化し、国外の利用にも供する内容とした。学叢についても最新の研究成果を論文として掲載し、質の高いものとすることができた。また、金剛寺に関する社寺調査報告は追加調査を行うことにより、報告書としてより充実した内容を掲載することができた。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。									
【中期計画に対する評価】 評価：B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画期間を通じて、学叢、社寺調査報告、展覧会関係刊行物を中心に調査・研究結果を発信することができた。また、社寺調査報告については、複数年度に亘る調査により研究内容を深化させ、報告書の内容がより充実したものとなるよう尽力した。今後の課題はウェブサイトでの公開等、インターネットを活用した調査研究成果の発信である。今後より充実したオンラインコンテンツの発信ができるよう努めていく。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信							
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④調査研究成果の公表							
【年度計画】 (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』を刊行するとともに、学術研究公開の一環としてウェブサイトで公開する。 2) 東京文化財研究所と共同で実施している絵画作品等の光学的調査について、報告書を刊行する。 3) 文化財修理に関する印刷物を刊行する。								
担当部課	学芸部	事業責任者	部長 内藤栄					
【実績・成果】 (奈良国立博物館) 1) 研究紀要『鹿園雑集』第22号を7月に、第23号を3年3月に刊行した。あわせて奈良国立博物館リポジトリにPDFで掲載した。 2) 元年度末に刊行した東京文化財研究所との共同研究に関する報告書『信貴山 朝護孫子寺蔵 国宝 信貴山縁起絵巻 調査研究報告書－研究・資料編－』を国内外の大学・研究機関に頒布し(国内353機関、海外47機関)、最新の研究成果を広く公開・共有した。 3) 文化財修理の報告『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書 第2号』を4月に刊行した。また3年3月第3号を刊行した。								
【補足事項】  研究紀要『鹿園雑集』第22号  『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』 第2号								
【定量的評価】項目	2年度実績	目標値	評価	経年変化	28	29	30	元
定期刊行物	8件	5件	B		6	6	6	6
紀要等	4件	1件	B		2	2	0	2
『博物館だより』	4件	4件	B		4	4	4	4
特別展の開催回数(海外展除く)	2件	－	－		3	3	3	3
テーマ別展示の開催件数	3件	－	－		4	4	4	5
講演会等の開催回数	12回	－	－		26	26	27	25
【年度計画に対する総合評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 研究紀要『鹿園雑集』第22号・第23号、『奈良国立博物館 文化財保存修理所 修理報告書』第2号・第3号を刊行できた。紀要及び博物館だよりは、奈良国立博物館リポジトリに掲載することで、研究成果や最新情報を広く公表した。							
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。								
【中期計画に対する評価】 評価：B	【判定根拠、課題と対応】 調査研究の成果は展覧会図録等、展覧会に関わる刊行物においても最新の情報を発信している。中期計画期間を通し、定期刊行物として、着実に研究紀要や修理報告書を刊行し、また、奈良国立博物館リポジトリにおいて掲載することができた。あらゆる手段によって最新の調査研究成果を広く公表することができ、中期計画を達成したと判断できる。							

中項目	1. 有形文化財の保存と継承並びに有形文化財を活用した歴史・伝統文化の国内外への発信										
事業名	(4) 有形文化財の収集・保管・展覧事業・教育普及活動等に関する調査研究 ④ 調査研究成果の公表										
【年度計画】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』を刊行する。 2) 博物館科学に関する印刷物を刊行する。											
担当部課	学芸部文化財課 学芸部博物館科学課	事業責任者	課長 原田あゆみ 課長 木川りか								
【実績・成果】 (九州国立博物館) 1) 研究紀要『東風西声』第16号を刊行した(部数900部)。 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』第3号(発行部数750部)を編集、刊行した。21年度から22年度までの当館経費による修理の報告書をまとめた。											
【補足事項】 1) 『東風西声』第16号では19本の論文を掲載した。(うち当館職員執筆16本、外部研究者からの寄稿3本) 2) 『九州国立博物館 文化財修理報告』は、当館所蔵品、当館経費で修理を行った当館以外の国立博物館等所蔵文化財、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財について、修理に関する記録をまとめたものである。第3号では、21年度から22年度までの文化財修理を対象とした。対象文化財の基本的情報、施工会社、修理前後の写真、使用材料、修理で得られた知見等を掲載する。これらの情報を公開することで、次回の修理での参考となるだけでなく、美術史や歴史学等の学術研究、修理事業の普及啓発など、多方面での活用が期待される。3年度以降も順次刊行する計画である。											
											
		東風西声第16号表紙		九州国立博物館文化財修理報告第3号表紙							
【定量的評価】項目		2年度実績	目標値	評価	経年変化	28	29	30	元		
定期刊行物		5件	5件	-		5	5	5	6		
紀要等		1件	1件	-		1	1	1	2		
季刊情報誌『アジアージュ』		4件	4件	-		4	4	4	4		
特別展の開催回数(海外展除く)		1回	-	-		4	3	4	4		
テーマ別展示の開催件数		7件	-	-		6	6	9	8		
講演会等の開催回数		13回	-	-		77	84	80	69		
【年度計画に対する総合評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 研究紀要や図録等を刊行し、調査研究の成果を報告できた。また、『九州国立博物館 文化財修理報告』第3号も予定通り刊行し、当館文化財保存修復施設で修理を行った文化財の修理に関する記録を公開することができた。									
【中期計画記載事項】 文化財等に関する調査研究の成果を図版目録、研究紀要、学術雑誌並びに展覧事業に関わる刊行物などで発表するとともに、ウェブサイトでの公開等、調査研究成果の発信を更に拡充する。なお、定期刊行物等を前中期目標の期間の実績以上刊行する。											
【中期計画に対する評価】 評価: B		【判定根拠、課題と対応】 中期計画最終年度である2年度は、予定どおりに印刷物を刊行することができた。また、今中期全体を通して、計画に沿って調査研究の結果を広く公表し、中期計画を達成することができた。 今後も引き続き、取り組みを広く公開し、印刷物を刊行できるよう準備を進めたい。									